

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

ほそぐちした  
**細口下1号窯**

こうのす  
**鴻ノ巣古窯**

たかばりはら  
**高針原1号窯**

1999

愛知県埋蔵文化財センター



図絵1 遺跡遠景

各調査区周辺の航空写真。南側から撮影している。写真中央部に北から高針原1号窯、鴻ノ巣古窯、細口下1号窯が位置する。写真の右下には平針運転免許試験場が所在する。写真左上に写る緑地は、初期須恵器を生産した東山の丘陵。



図2 鴻ノ巣古窯近景

鴻ノ巣古窯の調査区を南から撮影した航空写真。調査区東側の道路は、調査時に部分開通していた国道302号線。ほぼ中央部に交差点が観察できるが、この左上に残存する緑地のすぐ北側が、高針原1号窯の調査区である。

## 序

名古屋市天白区・名東区は、名古屋市の東部に位置し、ベッドタウンとして発展を続けています。この地区は歴史的に多くの文化財が知られおり、古くから繁栄した場所でもあります。

平成8年度、財團法人愛知県埋蔵文化財センターでは名古屋環状2号線建設に伴う、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施致しました。その結果、窯業に関する遺構・遺物を確認するなど、先人の生活・文化に関するいくつかの貴重な知見を得ることができました。そして、今回これらをまとめ、報告書として刊行するにいたりました。本書が歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財に関するご理解を深める一助となれば幸いに存じます。

発掘調査の実施に当たりましては、地元住民の方々を始め関係諸機関及び関係者の皆様方から多大なご指導とご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財團法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財團法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申しあげます。

平成11年8月

財團法人愛知県教育サービスセンター

理事長 久留宮 泰啓

## 例　言

1. 本書は愛知県名古屋市に天白区・名東区に所在する細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯（『愛知県遺跡地図』（I）尾張地区による遺跡番号は01-10046、01-10005、01-4045）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、名古屋環状2号線（一般国道302号線）建設に先立つもので、愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財團法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成8年4月～10月で、調査は、福岡晃彦（本センター課長補佐）、後藤英史（本センター調査研究員）、池本正明（本センター調査研究員）が担当した。
4. 調査に際しては、次の機関から指導・協力を受けた。  
愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、愛知県土木部、名古屋市教育委員会、名古屋市見晴台考古資料館・荒木集成館、長久手町教育委員会
5. 発掘調査時の諸記録、遺物の整理・製図などについては、以下の方々の協力を得た。（五十音順・敬称略以下）  
阿部佐保子・八木佳素実（以上、本センター調査研究補助員）  
加藤素輝・町田義哉（以上、本センター発掘補助員）  
飯田祐子・宇佐美美幸・加藤豊子・木全典子・田中和子・土井てる子・服部恵子・服部里美・平野みどり・本所千恵子（以上、本センター整理作業員）  
川波ふじ子・妹尾美佐子・高橋純子・太刀川美和子・田中由紀子・永井信子・成田敦子・森川敏子（以上、本センター整理作業員）  
黒宮克宜・武田紀子・服部亞紀子・早川友司・早川義美（以上、学生アルバイト）
6. 本書をまとめるにあたっては、以下の方々にご教示・ご協力を得た。  
青木　修・天野暢保・荒木　実・岩野見司・上村安生・内田智久・梅本博志・尾野善裕・神谷友和・加納俊介・川崎みどり・木村有作・清田善樹・小島一夫・斎藤嘉彦・佐藤由紀夫・柴垣勇夫・城ヶ谷和広・中村美枝・植崎彰一・野澤則幸・福岡猛志・藤澤良祐・三宅唯美・宮田安志・山本直人・渡辺博人（五十音順・敬称略）
7. 本書第Ⅲ章で計測値を掲載する山越1号窯資料は長久手町教育委員会が所蔵し、第Ⅳ章で実測図を掲載する細口下1号窯表探資料は名古屋市教育委員会、財團法人荒木集成館が所蔵するものである。
8. 遺物の写真図版の縮尺は1/3を原則とするが、図版5、13、23は原寸、図版46は1722・1723が1/5となっている。
9. 本書で使用する色調名は『新版標準土色帳』小山正忠・竹原秀雄編に依拠した。
10. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。
11. 本書の編集は池本正明が担当した。執筆は池本のほかに、阿部佐保子（Ⅱ章2（2）、Ⅳ章2、4）、八木佳素実（Ⅳ章2（3））がこれに加わった。
12. 調査に関する資料はすべて愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 目 次

第Ⅰ章 はじめに .....	1
1 経緯と経過.....	1
2 環境と周辺の遺跡.....	2
第Ⅱ章 細口下1号窯 .....	6
1 遺跡.....	6
2 遺物.....	11
3 小結.....	23
第Ⅲ章 鴻ノ巣古窯 .....	28
1 遺跡.....	28
2 遺物.....	31
3 小結.....	49
第Ⅳ章 高針原1号窯.....	60
1 遺跡.....	60
2 遺物.....	72
3 小結.....	140
第Ⅴ章 科学分析 .....	152
1 考古地磁気測定 .....	152
2 土器胎土分析 .....	154
3 出土炭化材の樹種同定 .....	163
第Ⅵ章 まとめ .....	170
第Ⅶ章 付 載.....	172
1 細口下1号窯採集遺物 .....	172
2 細口下1号窯出土瓦についての一考察 .....	176
3 高針原1号窯製品の変遷 .....	184
4 土器容量の計測視点 .....	191
付 表 .....	198
遺構計測一覧	
遺物計測一覧	

# 挿図目次

図 1 周辺の主要遺跡	3
図 2 細口下 1 号窯調査区位置図	7
図 3 細口下 1 号窯調査区全体図	8
図 4 細口下 1 号窯 SY01	9
図 5 細口下 1 号窯 SY01 埋土	10
図 6 細口下 1 号窯出土遺物 1	13
図 7 細口下 1 号窯出土遺物 2	15
図 8 細口下 1 号窯出土遺物 3	16
図 9 細口下 1 号窯出土遺物 4	17
図 10 細口下 1 号窯出土遺物 5	18
図 11 細口下 1 号窯出土遺物 6	19
図 12 細口下 1 号窯出土遺物 7	20
図 13 細口下 1 号窯出土遺物 8	21
図 14 細口下 1 号窯出土遺物 9	22
図 15 細口下 1 号窯出土遺物 10	23
図 16 細口下 A 号窯	25
図 17 鴻ノ巣古窯調査区位置図	28
図 18 鴻ノ巣古窯調査区全体図	29
図 19 鴻ノ巣古窯原断面図	30
図 20 鴻ノ巣古窯出土遺物 1	33
図 21 鴻ノ巣古窯出土遺物 2	34
図 22 鴻ノ巣古窯出土遺物 3	35
図 23 鴻ノ巣古窯出土遺物 4	37
図 24 鴻ノ巣古窯出土遺物 5	39
図 25 鴻ノ巣古窯出土遺物 6	40
図 26 鴻ノ巣古窯出土遺物 7	41
図 27 鴻ノ巣古窯出土遺物 8	42
図 28 鴻ノ巣古窯出土遺物 9	44
図 29 鴻ノ巣古窯出土遺物 10	45
図 30 鴻ノ巣古窯出土遺物 11	46
図 31 鴻ノ巣古窯その他の遺物	49
図 32 名古屋考古学会の調査成果 と今回の調査区	50
図 33 計測法による比較（須恵器）	52
図 34 計測法による比較（灰釉陶器）	52
図 35 計測法による比較（灰白軟陶）	52
図 36 3 遺跡の口縁部計測法によ る比較	54
図 37 鴻ノ巣古窯口縁部計測法に よる器種比較	55
図 38 黒笠 89 号窯口縁部計測法に よる器種比較	56
図 39 山越 1 号窯口縁部計測法に よる器種比較	56
図 40 高針原 1 号窯調査区位置図	61
図 41 高針原 1 号窯調査区全体図 1	62
図 42 高針原 1 号窯調査区全体図 2	63
図 43 高針原 1 号窯 S Y 0 1	64
図 44 高針原 1 号窯 S Y 0 1 左壁	65
図 45 高針原 1 号窯 S Y 0 1 灰出 しピット	66
図 46 高針原 1 号窯 S D 0 2	67
図 47 高針原 1 号窯土坑群	68
図 48 高針原 1 号窯灰原断面図 1	70
図 49 高針原 1 号窯灰原断面図 2	71
図 50 高針原 1 号窯器種分類図	76
図 51 高針原 1 号窯出土遺物 1	83
図 52 高針原 1 号窯出土遺物 2	85
図 53 高針原 1 号窯出土遺物 3	87
図 54 高針原 1 号窯出土遺物 4	88
図 55 高針原 1 号窯出土遺物 5	89
図 56 高針原 1 号窯出土遺物 6	91

図 57 高針原 1号窯出土遺物 7	93
図 58 高針原 1号窯出土遺物 8	95
図 59 高針原 1号窯出土遺物 9	97
図 60 高針原 1号窯出土遺物 10	98
図 61 高針原 1号窯出土遺物 11	99
図 62 高針原 1号窯出土遺物 12	101
図 63 高針原 1号窯出土遺物 13	102
図 64 高針原 1号窯出土遺物 14	103
図 65 高針原 1号窯出土遺物 15	105
図 66 高針原 1号窯出土遺物 16	106
図 67 高針原 1号窯出土遺物 17	107
図 68 高針原 1号窯出土遺物 18	108
図 69 高針原 1号窯出土遺物 19	109
図 70 高針原 1号窯出土遺物 20	111
図 71 高針原 1号窯出土遺物 21	113
図 72 高針原 1号窯出土遺物 22	114
図 73 高針原 1号窯出土遺物 23	115
図 74 高針原 1号窯出土遺物 24	117
図 75 高針原 1号窯出土遺物 25	119
図 76 高針原 1号窯出土遺物 26	120
図 77 高針原 1号窯出土遺物 27	121
図 78 高針原 1号窯出土遺物 28	123
図 79 高針原 1号窯出土遺物 29	125
図 80 高針原 1号窯出土遺物 30	127
図 81 高針原 1号窯出土遺物 31	129
図 82 高針原 1号窯出土遺物 32	130
図 83 高針原 1号窯出土遺物 33	131
図 84 高針原 1号窯出土遺物 34	133
図 85 高針原 1号窯出土遺物 35	135
図 86 高針原 1号窯出土遺物 36	137
図 87 高針原 1号窯出土遺物 37	138
図 88 高針原 1号窯出土遺物 38	139
図 89 高針原 1号窯出土遺物 39	140
図 90 高針原 1号窯 S Y 0 1 左壁 改修状況	141
図 91 高針原 1号窯器種構成	146
図 92 各務原市天狗谷 7号窯	147
図 93 刻書土器集成	150
図 94 地磁気永年変化曲線と測定 結果	152
図 95 Q T - P I 図	157
図 96 S i O <sub>2</sub> - A l <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図	157
図 97 F e <sub>2</sub> O <sub>3</sub> - N a <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 図	159
図 98 K <sub>2</sub> O - C a <sub>2</sub> O 図	159
図 99 土器胎土顯微鏡写真	160
図 100 高針原 1号窯炭化材	164
図 101 鴻ノ巣古窯炭化材	165
図 102 細口下 1号窯炭化材	166
図 103 細口下 1号窯採集遺物 1	173
図 104 細口下 1号窯採集遺物 2	175
図 105 瓦当接合部予想図	176
図 106 凸面布目平瓦叩き跡	182
図 107 高針原 1号窯主要な器形 の変遷	187
図 108 高針原 1号窯製品変遷図	190
図 109 容量計算の視点	193

# 図版目次

図版 1	細口下 1 号窯遺構	1
図版 2	細口下 1 号窯遺構	2
図版 3	細口下 1 号窯遺構	3
図版 4	細口下 1 号窯遺構	4
図版 5	細口下 1 号窯遺物	1
図版 6	細口下 1 号窯遺物	2
図版 7	細口下 1 号窯遺物	3
図版 8	細口下 1 号窯遺物	4
図版 9	細口下 1 号窯遺物	5
図版 10	細口下 1 号窯遺物	6
図版 11	鴻ノ巣古窯遺構	1
図版 12	鴻ノ巣古窯遺構	2
図版 13	鴻ノ巣古窯遺物	1
図版 14	鴻ノ巣古窯遺物	2
図版 15	鴻ノ巣古窯遺物	3
図版 16	鴻ノ巣古窯遺物	4
図版 17	高針原 1 号窯遺構	1
図版 18	高針原 1 号窯遺構	2
図版 19	高針原 1 号窯遺構	3
図版 20	高針原 1 号窯遺構	4
図版 21	高針原 1 号窯遺構	5
図版 22	高針原 1 号窯遺構	6
図版 23	高針原 1 号窯遺物	1
図版 24	高針原 1 号窯遺物	2
図版 25	高針原 1 号窯遺物	3
図版 26	高針原 1 号窯遺物	4
図版 27	高針原 1 号窯遺物	5
図版 28	高針原 1 号窯遺物	6
図版 29	高針原 1 号窯遺物	7
図版 30	高針原 1 号窯遺物	8
図版 31	高針原 1 号窯遺物	9
図版 32	高針原 1 号窯遺物	10
図版 33	高針原 1 号窯遺物	11
図版 34	高針原 1 号窯遺物	12
図版 35	高針原 1 号窯遺物	13
図版 36	高針原 1 号窯遺物	14
図版 37	高針原 1 号窯遺物	15
図版 38	高針原 1 号窯遺物	16
図版 39	高針原 1 号窯遺物	17

図版 40	高針原 1 号窯遺物	18
図版 41	高針原 1 号窯遺物	19
図版 42	高針原 1 号窯遺物	20
図版 43	高針原 1 号窯遺物	21
図版 44	高針原 1 号窯遺物	22
図版 45	高針原 1 号窯遺物	23
図版 46	高針原 1 号窯遺物	24

# 表目次

表 1	調査進行表	1
表 2	釉着関係一覧	26
表 3	鴻ノ巣古窯器種構成表	51
表 4	口縁部計測による比較	53
表 5	高針原 1 号窯器種構成表 1	143
表 6	高針原 1 号窯器種構成表 2	144
表 7	考古地磁気試料一覧	153
表 8	胎土性状表	155
表 9	科学分析表 1	161
表 10	科学分析表 2	162
表 11	炭化材樹種同定結果	167
表 12	炭化材種の同定結果	168
表 13	細口下 1 号窯瓦計測表	177
表 14	軒丸瓦比較表	179
表 15	凸面布目平瓦計測表 1	180
表 16	凸面布目平瓦計測表 2	181
表 17	容量計測表	194

# 口絵

口絵 1	遺跡遠景
口絵 2	鴻ノ巣古窯近景

## 第Ⅰ章　はじめに



調査前風景

網戸下1号窓　瀬ノ集古窓  
高針原1号窓　現場事務所



## 第Ⅰ章 はじめに

### 1 経過と経緯

建設省、日本道路公団では、名古屋市郊外の交通量調整を目的に国道302号線建設を計画した。ところがこの計画路線上には、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯、高針原1号窯などの遺跡が所在していた。このため、事前に建設省、日本道路公団と、愛知県教育委員会とがその取り扱いを巡って協議した。その結果、これらの遺跡を発掘調査し記録として保存する必要性が認められた。作業は、愛知県教育委員会を通して委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査期間は、平成8年度。計画面積は細口下1号窯が200 m<sup>2</sup>、鴻ノ巣古窯が300 m<sup>2</sup>、高針原1号窯が1000 m<sup>2</sup>である。なお、調査に要した日程などは、図1に示した工程による。

#### 調査原因

調査方法は、地表面から表土のみをバック・ホウにより除去したのち、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅲ系に準拠した5mグリッドを設定し、手振りで包含層を掘削して遺構を検出する方法をとった。遺構測量については、ヘリコプターによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50基本平面図を作成したほか、重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。

#### 調査の手順

表1 調査進行表

		調査区		
		細口下1号窯	高針原1号窯	鴻ノ巣1号窯
96年度	4月			
	5月			
	6月			
	7月			
	8月			
	9月			
	10月			
	11月			
	12月			
	1月			
	2月			
	3月			

## 2 環境と周辺の遺跡

### 遺跡の位置

今回発掘調査を実施した地点は、現在の行政区画で表現すると、細口下1号窯、鴻ノ巣古窯が名古屋市天白区、高針原1号窯が同名東区となる。それぞれの位置は、国道302号線が県道名古屋・長久手線と交わる上社JCT交差点から南方向に計測して、細口下1号窯が6.1km、鴻ノ巣古窯が3.2km、高針原1号窯が2.8kmである。

### 周辺の地形

次に、調査区周辺の地形を眺める。現在の調査区周辺は、そのほとんどが住宅地として利用されている。しかしこれは昭和30年頃から何回かにわたって計画された土地改良事業により形成された景観である。それ以前は、標高30~90m程度の丘陵地帯となる。そして、その間を天白川と植田川が北東から南西方向に流れ、その周囲に狭い平野が展開している風景を考えることができる。

次に、このエリアの歴史的環境を年代順に概観する。

まず、古墳時代以前の遺跡は、瓶井遺跡(01-4025)で縄文時代晚期の土器棺が単独出土しているほか、東山公園遺跡(01-5044)で、縄文土器が採集されているにすぎない。全体的に遺跡の希薄なエリアとしてとらえらるべきである。

### 猿投窯

しかし、次の古墳時代に入ると、状況は一変し、猿投山西南麓古窯跡（以下、猿投窯）が成立する。猿投窯は、5世紀から13世紀にかけて存在した窯業遺跡である。11世紀頃にその存在が不明確になるものの、ほぼ継続して操業した国内最大級の窯業遺跡と評価されている。ところで猿投窯は面積が広大なため、通常これをさらに区分して理解されている。すなわち、岩崎地区、鳴海地区、東山地区（東山窯）、折戸地区、黒巻地区、井ヶ谷地区である。このうち、今回の調査区に直接関わる地区は、岩崎地区と鳴海地区である。また、植田川以北では、東山地区がこれらに接して存在している。周知のように、東山地区は猿投窯初期の生産活動の舞台となる。図2に示す範囲内でも、H-11号窯(01-5054)など最古級の遺跡のほか、I-17号窯(14017)、H-15号窯(01-10022)、I-101号窯(01-10007)など、発掘調査が実施されて内容が判明している遺跡も少なくない。

猿投窯では、平安時代に入ると灰釉陶器や鉛釉陶器の生産が開始される。この段階では、生産の中心が大きく二極化し、黒巻地区や折戸地区にその一つが、もう一つは鳴海地区を中心として確立する。ところで、この段階の後者には、NN245号窯(01-14023)、NN249号窯(熊ノ前2号窯 01-14022)など緑釉陶器を大量に生産した窯も知られている。なお、このうちの後者は緑釉単彩の鉛釉陶器のほか、彩文陶器も生産されている。これは、八事小堂跡(01-9002)などわずかにその出土例が知られる製品で注目できる。

11世紀末に入ると、猿投窯ではほとんどの遺跡が、椀、小椀を主体とした単純な器種を大量に生産する窯となる。いわゆる灰釉系陶器生産の開始である。この中で東山地区ではやや特殊な動きがみられる。一部に特殊品を生産した窯が存在することである。具体的には、H-G-101号窯(01-5007)、同105号窯(01-5018)、八事裏山古窯群(01-10021)などが瓦類や仏具などを焼成した窯として著名である。なお、この傾向は天白川を挟んだ



図1 周辺の主要遺跡（1:5000）

この地図は国土地理院2万5千分の1地形図「名古屋南部」・「平針」を使用したものである

対岸の鳴海地区北部でも一部にうかがうことができる。本書で報告する細口下1号窯(01-10046)のほか、N N 305号窯(01-10048)、天白緑地1号窯(01-10059)、同2号窯(01-10060)、などがその具体例として知られる。

以上のように、この地域では、古墳時代～平安時代にかけて生産遺跡の存在が明確となる。しかし、窯業に関わる集団の生活域は不明な部分が多い。ここでは植田川ないし天白川周辺の平坦部に未発見の集落遺跡が存在する可能性を考えるとどめる。なお、天白川右岸では、平安時代以後の遺物が採集される本郷畠遺跡(14173)の存在が知られてはいるが、未調査のためその内容は不明である。

#### 猿投窯以後

中世後期～近世初頭に入ると、すでに猿投窯は廃絶し、当該地では窯業遺跡を確認することができない。一方、植田川ないし天白川周辺の平坦部では、各地で在地領主の城館が点在している。植田川沿いの一色城(01-4024)、下社城跡(01-4008)、高針城跡(01-4009)や、天白川沿の野方東城跡(14154)、野方西城跡(14155)、浅田城跡(14156)、梅森北城跡(14158)、梅森東城跡(14157)、赤池城跡(14159)、平針北城跡(01-10075)、平針城跡(01-10045)、植田城跡(01-10018)などがそれである。しかし、こうした中世城館も在地領主層が淘汰されていく過程で廃城となっていく。

江戸時代にはいると、当該地には、高針村、平針村、赤池村といった名称の村落が存在している。しかし、これらの村落は基本的には丘陵地帯で占められるため、米の生産力は高くはない。むしろ、名古屋城下町の近郊集落という位置から交通の要所として発達した。ところでこの時代は、交通網の充実化にともなって名古屋城下町とその周辺を結ぶ街道整備が試みられた時期である。当該地の周辺では飯田街道が著名であるが、これにつながる街道として、高針村から岩崎村(日新市)をへて飯田街道に向かう街道があるが、高針村ではこれにともなう馬宿が設置されている。一方、岡崎街道では平針村に宿駅が設置された。

#### 丘陵の再開発

また、この時代には耕地面積の拡大を目的とした開発活動も活発となっている。丘陵地帯のそれは、小支谷の入口を閉塞して貯水施設を設定する簡便な方法がとられた。このため、多数の小規模な貯水池が計画され、昭和30年代後期頃から開始される土地改良工事直前の景観となった。牧野池は、こうした丘陵部分を開拓して造成された池の一つである。今日では、牧野池緑地の名で保護を受け、里山ブームを追風にした紅葉の名所として著名となっている。

## 第Ⅱ章 細口下1号窯



細口下1号窯調査風景

## 第Ⅱ章 細口下1号窯

### 1 遺跡

#### (1) 概要

**調査の概要** 細口下1号窯は、名古屋市天白区中平三丁目地内に所在する。地形的には、東側にむけて傾斜する緩やかな斜面であるが、調査直前には道路の予定用地のみ島状に成形されていた。これは、本窯が新国道の側道建設および本道部分の予定用地を整備する工事を発見の契機とすることに関連している。

今回の調査区では、窯体1基を検出した。なお、灰原や窯体の付属施設などは確認することができなかった。前者は調査区外に残存し、後者は消滅しているものと考えられる。

#### (2) 遺構

今回の調査では、窯体1基(SY01)のはか、焼土面(SX01)を検出している。

##### ① SY01

構造は分焰柱を有する窑窯である。残存長は5.0m。焼成室がほぼ残存するが、燃焼室、煙道部はすでに消滅していた。主軸の方向はW-25°-Sで、ほぼ東向きに開口する。

以下、窯体の各部を報告する。

まず、焼成室は全長5.0mを検出した。天井部は残存しない。壁面は、分焰柱基底部上端から計測して、1.0m地点で最大残存高0.5mをはかる。分焰柱から焼成室に向い右側(以下、右壁。なお、反対側は左壁と呼称する)の最上部が瘤状を呈する。ダンパーの痕跡か。

焼成室は、床面を二枚検出できたが、断面観察ではさらに一枚を確認できる。ここでは下層を一次窯、上層を三次窯とし、断面観察でのみ確認できた中央の面を二次窯とする。

**床面の数** まず一次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から2.3m地点で、1.8mをはかる。傾斜角は29度。平面形はややゆがむ長方形を呈する。床面は赤褐色の被熱部分を残存させるに留まるが、後述する三次窯の床下施設設置時に剥されている可能性も考えられる(図4)。

次に三次窯は、最大幅が分焰柱基底部上端から1.8m地点で、2.0mをはかる。傾斜角は27度。平面形は一次窯とほぼ類似するが、分焰柱基底部上端から計測して、0.2m

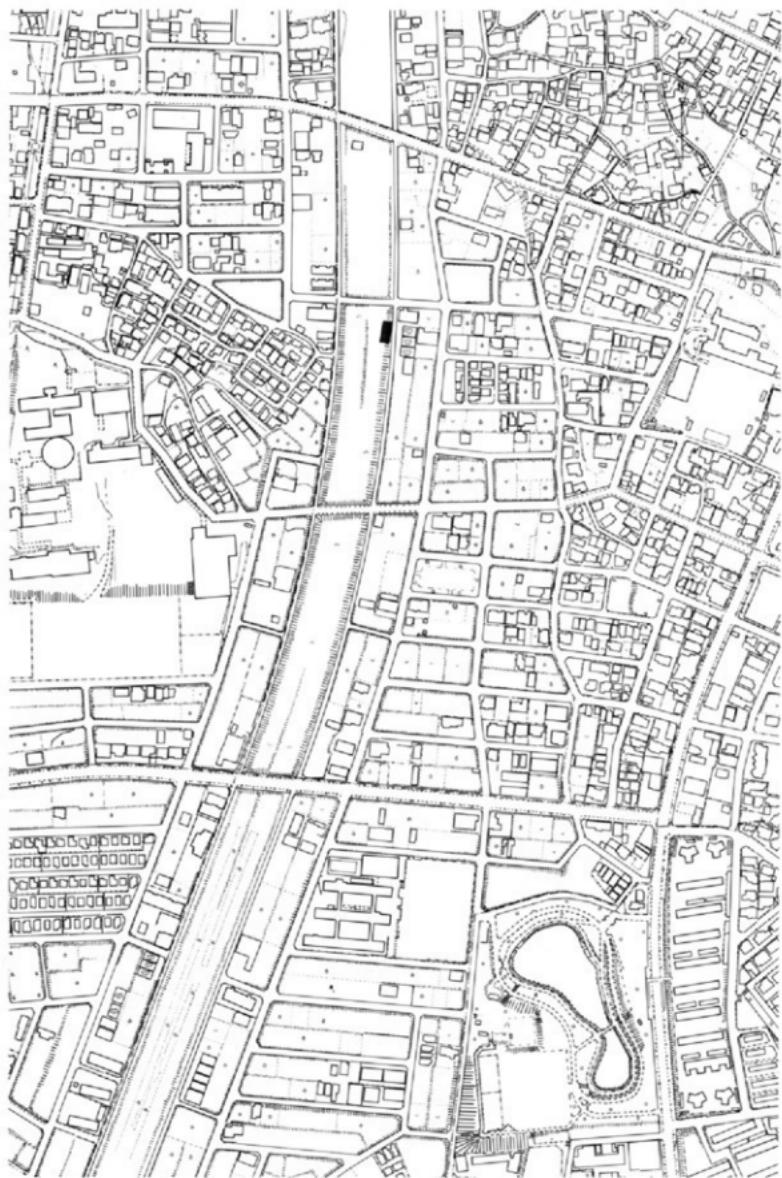


図2 細口下 1号窯調査区位置図 (1 : 2500)

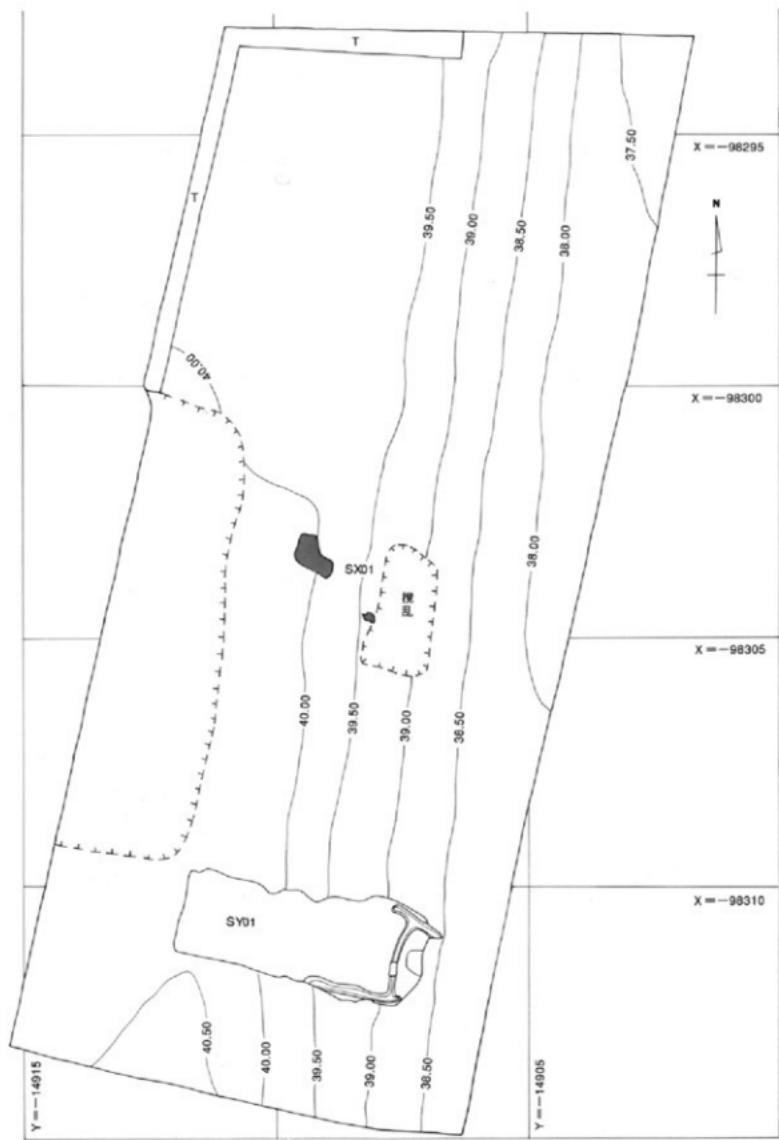


図3 細口下1号窓調査区全体図（1:100）

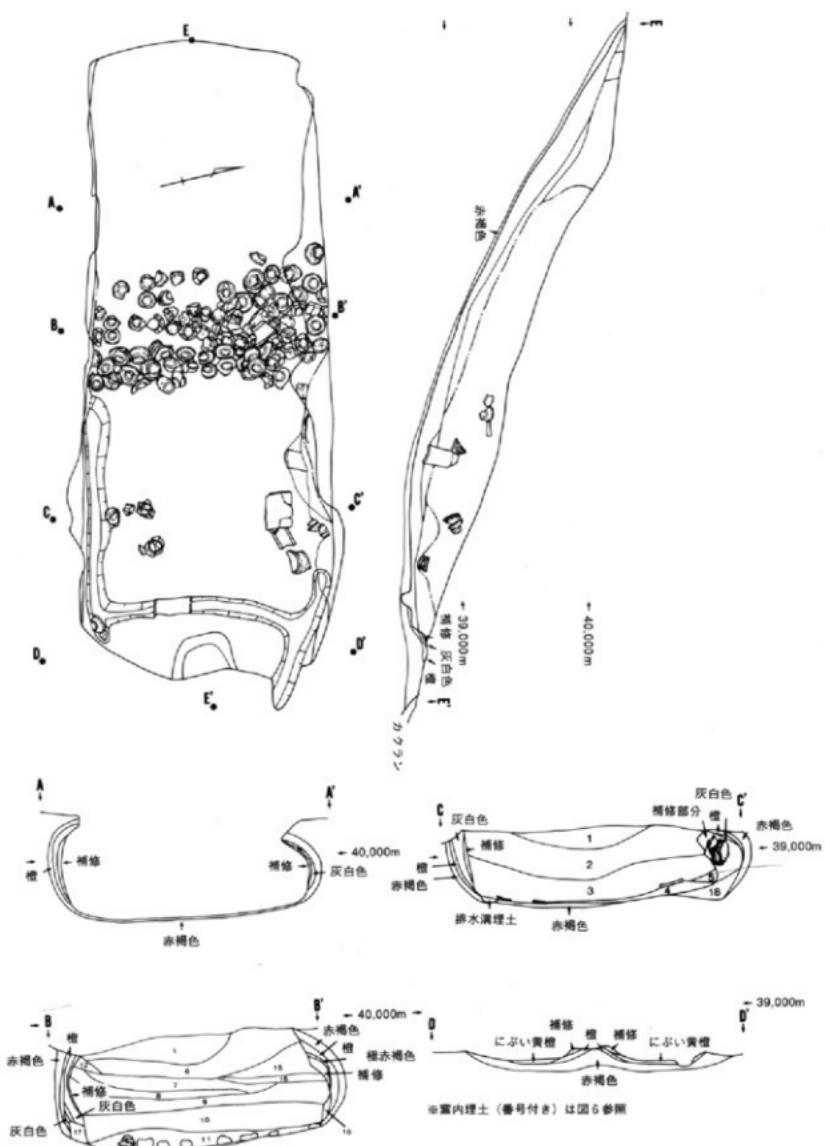


図4 細口下1号窓 SY 01 (1:40)

地点から 2.2 m 地点までの右壁が、最大 20 cm 程度張り出す。壁面には、スサ入り粘土を用い、焼成不良品、焼台、窯盤片などを塗り込めた部分が確認できる。なお、右壁で特にこれが著しい。この部分は最大で 27.0 cm と厚く、壁面の補修を考えるより、むしろ三次面設置に伴う、壁面の改修と判断できる。床面は、一次窯面上に黄褐色粘質土、木炭層、褐色細砂などを充填しているが、そのほとんどがすでに流失している。中央部の床下には、一次窯の床面直上に焼成不良品の塊を伏せ置いたり、焼台を敷き詰めた施設が確認できた。左壁側に焼成不良品、右壁側に焼台が集中する傾向がある（以下、床下施設と仮称する）。分布域は、分焰柱基底部上端から計測して 2.0 m 地点から 3.0 m 地点までに集中するが、分焰柱より上方 1.1 ~ 0.6 m 地点の左壁側にも、これと同様のものが若干確認できる。したがって、ほぼこのあたりまで床下施設が広がっていた可能性が強い。一方、焼成室下方では、排水溝が確認できた。幅は、ほぼ 12 cm をはかる。右壁と左壁に沿って設定され、中央部が焼成室を横断する形で連結する。左壁の排水溝は分焰柱基底部上端から計測して、2.0 m 地点まで、右壁は同様に 0.5 m 地点まで掘削されている。燃焼室側は右壁では残存部にまで続くが、左壁はほぼ分焰柱上端部で終息する。埋土はにぶい赤褐色の粘質土となる。一部に丸瓦（図 8-70）を転用した蓋が設置されているため、暗渠として機能していた可能性が強い。また、左壁側の最下部には、焼成不良品が敷き詰められている可能性を残す。

分焰柱は、焼成室側半分の基底部を残すにすぎない。残存部分は地山土の掘り残しによる。基底部の規模は、短辺 0.5 m をはかる。残存高は 8.0 cm。断ち割り調査の結果、焼成室側に二次窯に伴う補修が確認できた。

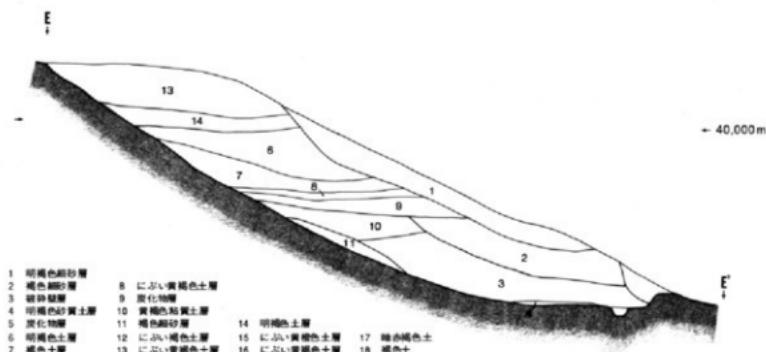


図 5 細口下 1 号窯 S Y 01 埋土 (1 : 40)

## ② SX01

SX01は、SY01の南側約7m地点に位置する焼土面。近接して、二か所確認できた。面積は約0.6m<sup>2</sup>。周囲の状況から、窯体焼成室の上部である可能性が高い。被熱の幅は3.0cm程度。出土遺物は得られなかった。

窯体の可能性

## 2 遺物

出土遺物の総量はコンテナー70箱で、大半がSY01またはSX01の焼成品と窯道具である。以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、事前に若干の整理を行なう。

### 種類

### 種類と器種

SY01またはSX01の焼成品種類としては、灰釉系陶器と瓦がある。

### 器種

器種には、灰釉系陶器には、椀、小皿、鉢、壺、瓦には軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。また、窯道具には馬爪焼台がある。

法量は巻末の付表を参照とする。

### (1) 土器

今回の調査で最も多く出土している。

以下、これを器種ごとに報告する。

#### 椀 (図6-1~38、7-39~59)

#### 椀の分類

今回の調査で量的に最もまとったものになる。記述が煩雑になるので、事前に器種分類を試みる。ここでは三つに区分(椀A~C)する。まず、椀A(図6-1~11、24~38)は、内外面とも丸みを持った体部を有するものをまとめる。腰部はやや張る深手で、口縁部はややラフに調整され、外反する。高台はやや低くつぶれる。端部にはモミガラまたは砂粒の圧痕が確認できる。次に、椀B(図6-12~23、7-39~51)は、前者に比較して、腰部があまり張らずほぼ直線的なものをまとめる。底径は椀Aよりやや広い傾向にある。口縁部はラフに調整され、高台は低くつぶれる。端部にはモミガラまたは砂粒の圧痕が確認できる。最後に椀C(図7-53~59)であるが、全形をとどめる資料を得てはない。形状は椀Bと類似するが、全体に調整の省力化が確認でき、口縁部は縁帶状に、内面は底部周辺に浅いくぼみが一周するようになる。高台は低くつぶれる。端部にはモミガラの圧痕が確認できる。

なお、椀には口径がやや小さい資料（図8-52）が1点のみ含まれている。口縁部の小破片で、体部の形状は判然とはしないが、形状は椀AまたはBの特徴を観察できる。

#### 小皿（図7-60～64）

##### 小皿の分類

数量は乏しい。やはり器種分類を試み、三つに区分（小皿A～C）する。まず、小皿A（図7-60～62）は、小皿としては深手の部類に含まれるものまとめ。底部が凝高台状にやや突出するのが特色。体部はやや丸みを持つ。次に、小皿Bは底径がやや広く器高がやや低いものをまとめ。図示に耐える資料を得ていない。底部は平底ないしわずかに突出する。次に小皿C（図7-63、64）は、底部の突出が大きく、深目の形状をとるものまとめ。全体の調整は丁寧である。

#### 鉢（図7-67～69）

数量は乏しい。椀を大型化して口縁部に片口を付けた形状。図示した資料は3点である。67、68と69に形状差が指摘できる。前者は、椀Aをそのまま大振りにしたような形状。ただし、端部には面を持ち、高台はやや高い。整形は比較的丁寧である。腰部を中心に回転ヘラケズリ調整を加える。後者は椀B類をさらに扁平にした形状。形状は前者と類似するが、整形はやや雑となる。出土位置は、前者がSY01の補修部裏込め、後者が窓内床面直上である。

#### 壺（図7-65、66）

##### 飛獣文四耳壺

数量は乏しい。いわゆる三筋文系陶器で、2点図示する。65は肩部片。耳部を4か所に貼付した四耳壺。器壁はやや厚く肩部は張る。耳部はすべて残存しないが、剥離痕の観察から二本の粘土紐を並べたものであった可能性が強い。外面は、2本1組みの沈線文で横方向に区画された後、耳部直下の区画には、線刻による飛雲文を施す。線刻は太く浅い。SY01焼成室の破碎層層出土。66は胴部片。破片上方の外面には、破片上方に2本1組みの沈線文が確認できる。表採資料。

#### (2) 瓦（図8-13～70～84）

軒丸瓦1点、丸瓦11点、平瓦4点の計16点が出土している。

#### 軒丸瓦（図8-70）

多少歪んでいて、また瓦当部との接合部分など非常に雑な作りで、瓦当部、玉縁部は欠損しているため原型がわからない状態である。丸瓦部は凹面に布目接合部がみられることから桶巻作りである。側面は縦方向に削られ凹面側に面取りがなされる。凸面には縦方向にナデがみられる。

細口下 1号窯

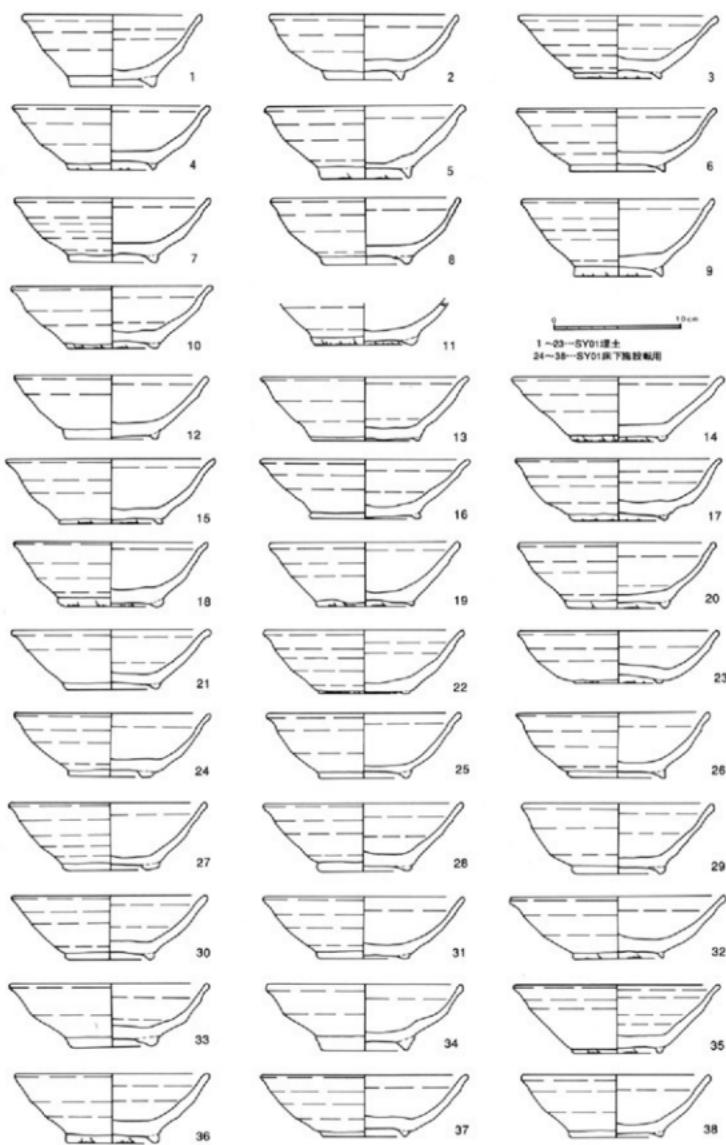


図6 細口下 1号窯出土遺物 1

この軒丸瓦は、窯の床下施設の溝を覆う状態で出土しているため、溝の蓋として使用されていたと推定される。

#### 丸瓦（図9～11-71～80）

識別できるものに関しては全て玉縁付丸瓦である。全てのものが凹面に布目が残っており、（図11-78, 80）は桶跡が、（図10-72, 76）は糸切り痕が、（図10, 11-73, 79）は接合部が明瞭にみられ、また直径方向に切断されていることから桶巻作りである。

凸面は横・縦のナデによる調整がされていて、指圧痕が残るものもあるため、粘土板の硬さの具合が想像できる。側面は残っているもの全てが縦方向に削られ、分割截線は残らず、凹面側を面取りする。端面が残っている（図11, 12-72, 77）から、前側の凹面側に面取りがなされていることがわかる。

#### 平瓦（図12, 13-81～84）

凸面布目平瓦 残りのよい（図12-81）から全長28.2cm、幅17.3～20.6cm、厚さ1.8cmと大きさがほぼわかる。4点全て通常凹面にある布目痕が凸面に残り、全てではないが凹面に糸切り痕、叩き跡がみられる。このタイプの平瓦は川原寺をはじめ出土している特殊な存在の平瓦である。

側面は縦方向に削り、凹面側に面取りがなされている。凸面と側面のなす角度は86.5°～117.5°で、通常、一枚作りは120°前後、桶（外）巻作りは90°前後であるので、断定はできないが桶（内）巻作りではないかとおもわれる。（図12-81）において広端部側の端面には凹面側に面取りがなされている。

以上の瓦については、本書第Ⅵ章において、さらに特徴ある点についての説明をすることにする。

#### （3）窯道具（図14-85～93）

確認できた窯道具は全ていわゆる馬爪焼台で、総重量44143gであった。これを完形品の焼台の数量 平均重量727gで割ると、60.7個体となる。これらは全て楕の焼成用と考えられる。いずれも砂粒を多量に含んだ胎土を使用し、その名称の語源となる馬爪形にラフに整えたものとなる。側面には指圧痕、上面には楕の高台圧痕を残す。部分的には基などの植物圧痕も観察できる。なお、図示した資料は、全て床下施設の構造材として転用されたものである。

#### （4）そのほかの遺物（図14）

本調査区では、SY01より年代が遅り、これと直接の関連が考えられない遺物も出土している。具体的には土器と石器があり、前者では須恵器、後者は石鏃を得ている。

細口下 1号窯

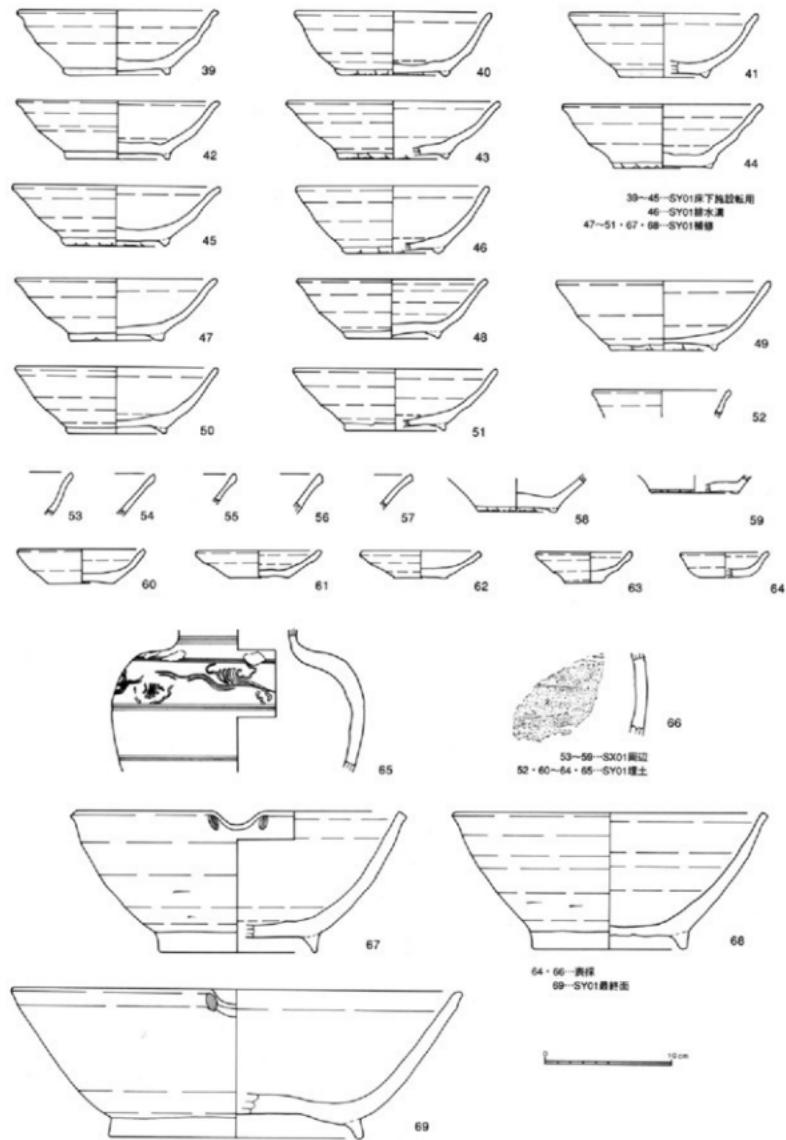


図7 細口下 1号窯出土遺物 2

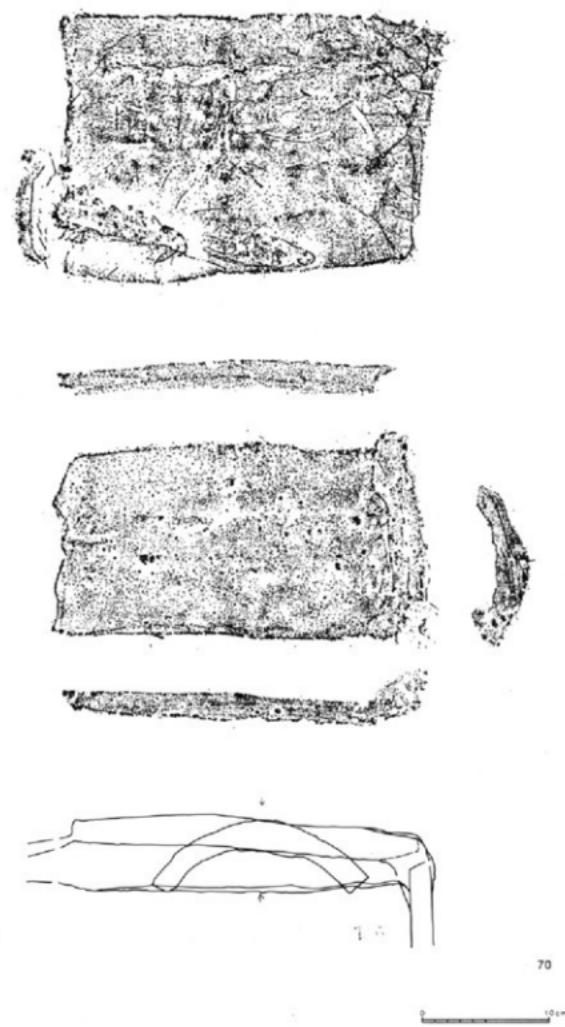


图 8 细口下 1 号窑出土遗物 3

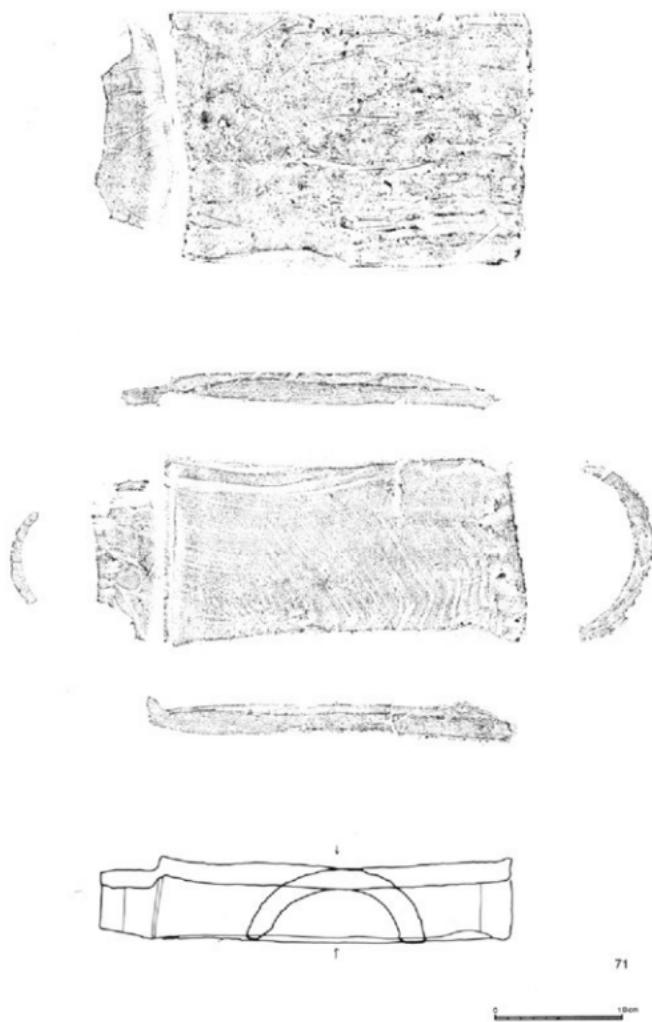


圖 9 細口下 1 号窯出土遺物 4

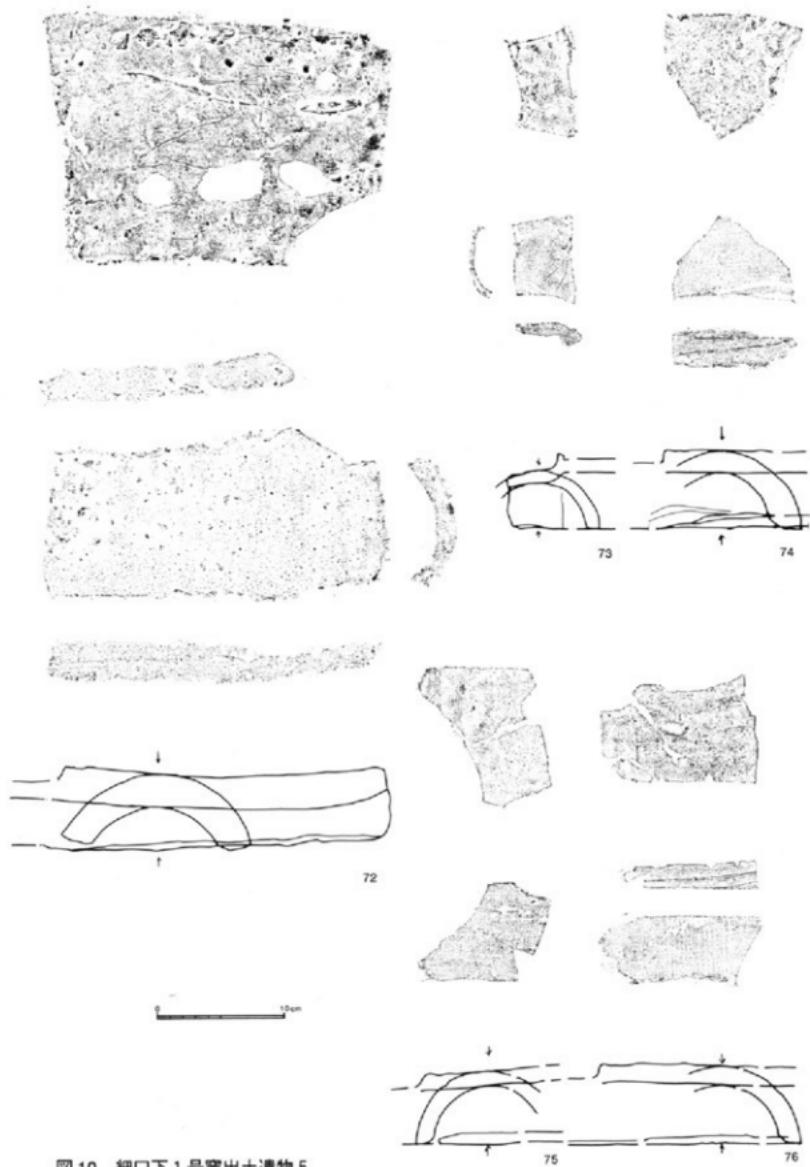
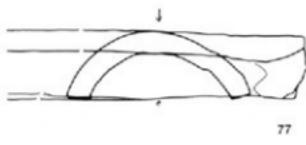


图 10 细口下 1 号窑出土遗物 5



77

78



1 cm



79



80

図 11 細口下 1 号窯出土遺物 6

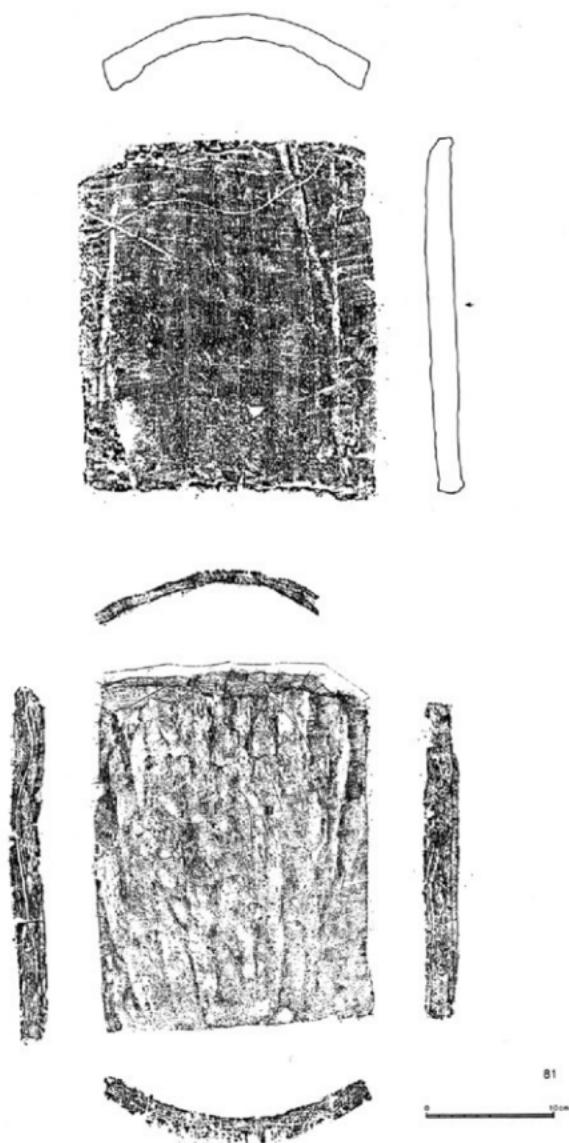


図 12 細口下 1 号窯出土遺物 7

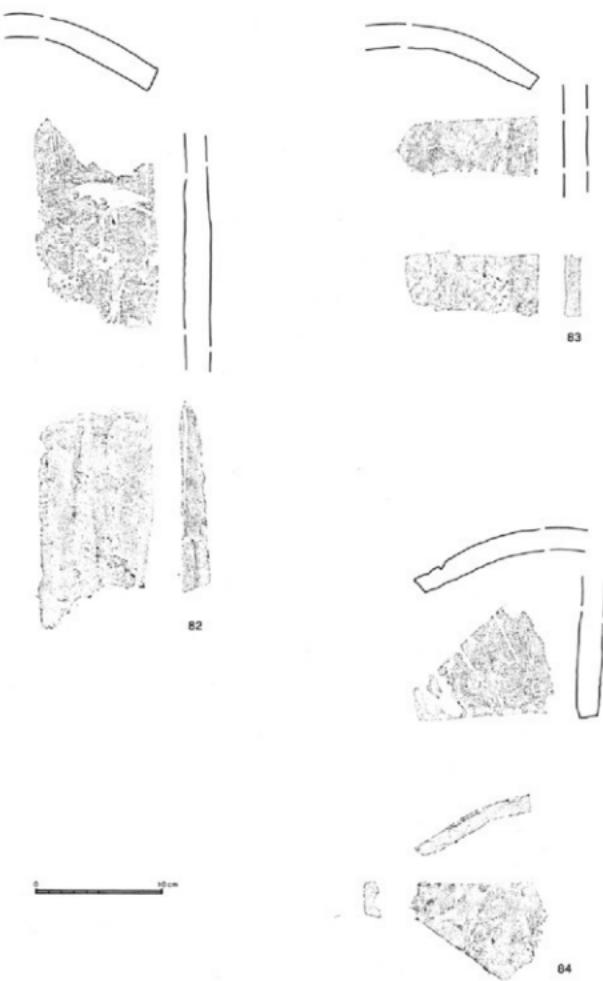


図 13 細口下 1 号窯出土遺物 8

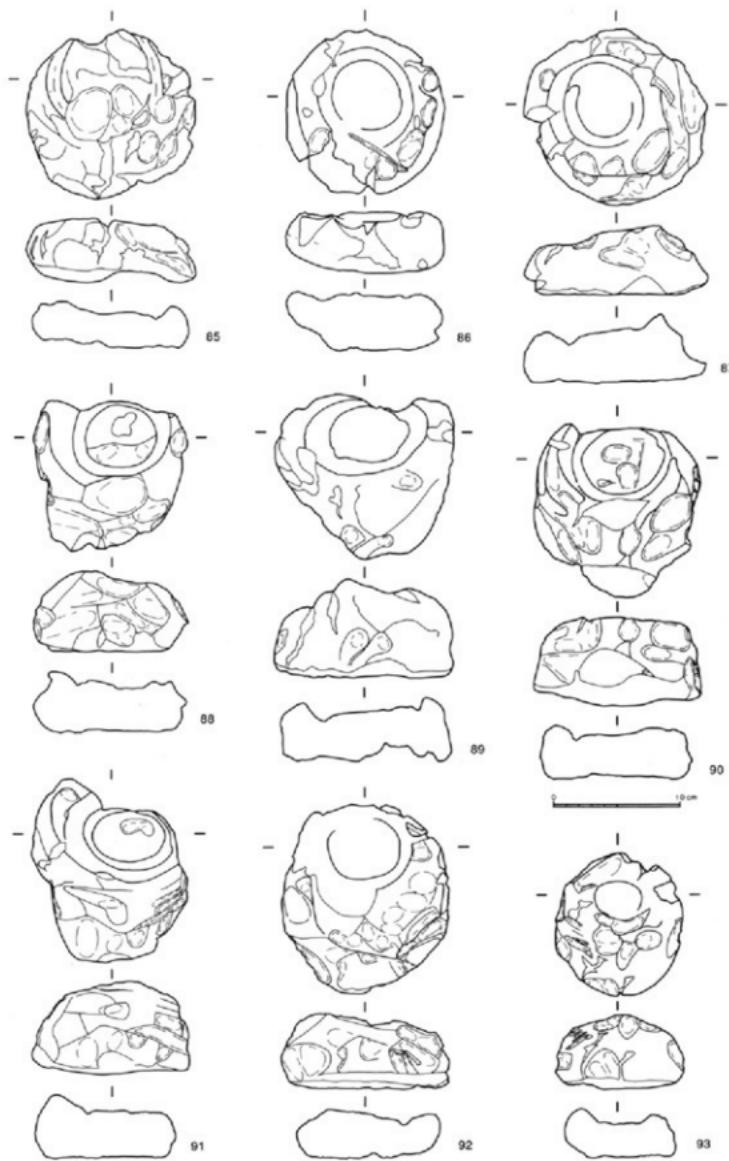


图 14 细口下 1 号窑出土遗物 9

## 土器（図16-94～103）

土器には須恵器がある。これらは、調査区全体に散在し、分布上の特色はみつけることはできない。

以下、本書IV章の器種名称を使用して報告する。94、95は杯B。底部片で、高台はやや高い。調整はシャープ。96は蓋A。天井部の小片で、やや大振りな宝珠鉢が付く。上面はフラットである。97は鉢C。底部の小片である。切り離し手法C。98は蓋B。脚部上方の小片。99は蓋C。口縁部片で、屈曲部はやや高い。端部で後を持って屈曲する。100はフラスコ形瓶。やはり口縁部片である。100～103は壺。101は壺Aの口縁部片。ややゆがむ。102、103は胸部片。青海波ナデ消し技法による。いずれも黄土塗布が確認できるが、前者は内外面、後者は外面のみとなる。後者は横瓶かもしれない。

## 石器（図15-104）

石器が一点出土している。出土位置はSY01の右壁補修部である。石材はチャート。脚部の一部が欠損するが、ほぼ完形となる。全長1.7cm、重量は0.5gをはかる。

## 3 小結

## (1) 遺構について

本窯は、新国道の側道を建設する段階で、その排土中から多くの灰釉系陶器が出土したことを見出る契機とする。このため、調査直前では道路の予定用地のみ島状に成形された形で窯体のある丘陵が残存していた。従って、旧来の地形は判別できない。しかし、SY01の残存状況と、SX01が窯の床面であったと仮定すれば、新国道建設予定地より若干東に傾斜した状態で、かって丘陵が伸びていたことが推測できる。

次に、今回報告するSY01は、從来出土遺物が知られるのみで、その実体が不明確であった細口下1号窯の窯体と考えられる。焼成室があまり外側に張り出さない形状は、壺、壺類を焼成する窯体としてはむしろ一般的と考えられよう。

ところでSY01は、床下施設の存在に特徴をみることができる。今日、灰釉系陶器窯の床下施設は、各地でしばしば報告されている（池本 1998）。いずれも防湿効果に関連し

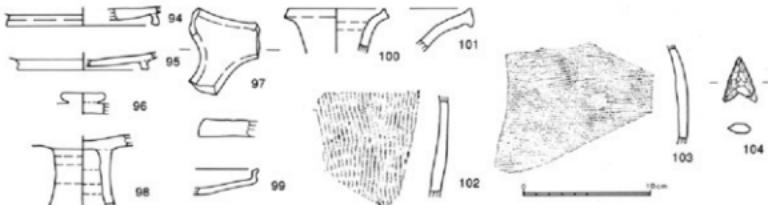


図15 細口下1号窯出土遺物10

S X 0 1

た作業と説明されることが多い。なお、作業内容は、SY01で確認できた二者に代表できる。すなわち、一つは焼成室床面を掘り下げた後、異なった土砂を充填することで土質改良を加えるもの、もう一つは溝を設定するものである。前者には、SY01のように焼成不良品などを敷き詰める工程の他に、掘削後にそのまま土砂を充填し、炭化物もしくは木材などを貼床直下に敷き詰める事例もある。後者にも溝の基底部に焼成不良品などを敷き詰める事例と、そのまま土砂を充填する事例があるが、埋め戻しの工法は類似している。ここでは両者をまとめて、湧水の状況に応じた可変的な窯体調整技術として評価しておく。

次にSX01に注目したい。調査区周辺では、周辺の土地改良工事の段階でいくつかの窯の存在が確認され、この段階で採集された資料の報告も成されている。このうちで最もまとまったものは（三渡他 1985）であろう。これによればこのエリアにはA～Eまでの5基の窯が存在したとされている。ところでSX01が窯体床面であるとするのなら、三渡氏のいうB号窯がこれに該当するのかもしれない。

## (2) 遺物について

軸着の関係

ここでは、まず灰釉系陶器碗の出土位置に注目する。前述した分類の楕A、Bは主にSY01から得られた資料となる。SY01資料は、埋土、補修部の裏込め、床下施設構造材転用と区分できるが、図示しなかった資料も含めると、楕A、Bは全ての場所から出土している。なお、図示した資料には軸着資料を剥して個別に図化したものも含まれている。軸着関係は表2にまとめる通りであるが、現状では楕AとBが軸着する例は確認されていない。また、楕CはSX01周辺の擾乱坑の埋土を中心に出土しており、SX01に関係した資料である可能性が強い。なお、瓦類はここからは出土していない。

以上の状況から、SY01は楕A、Bと小皿A、壺類、鉢、瓦などを生産したものと考えられ、初期の灰釉系陶器窯に散見する特殊器種生産窯として理解できる。なお、SY01の一次窯～三次窯の生産内容差は資料不足から明らかにはできなかった。しかし、楕と小皿については一次窯～三次窯までの全ての段階に生産されたことが考えられる。一方、壺、鉢は全ての時期にこれが生産された保証はなく、三次窯でのみ確実に生産されていることが判明しているに留まる。瓦は、三次窯では確実だが、さらに丸瓦が床下施設の排水溝蓋として転用されていることから、二次窯以前にも生産されたことが考えられる。次にSX01は、これが窯体であるのなら、楕Cと小皿Bを生産したものと考えられる。

資 源 編 年

次にこれを斎藤孝正による編年（斎藤 1988b）にあてはめると、SY01がⅦ-3期、SX01がⅧ-2期に該当する。実年代は、前者が実年代は12世紀後葉、後者が13世紀中葉とされている。

なお、出土資料の統計学的処理は、今回の出土資料の大半が床下施設の構造材として転用されたものである関係上、焼成比率を反映していないと考えられ、実施していない。

細口下A号窯

次に、図16にまとめたSY01またはSX01の焼成品とは考えられない一群について考えたい。の中には焼成不良品などもいくつか含まれており、調査区の立地条件などもあわせて考えると、生産遺跡に関する資料と予測できる。上記の（三渡他 1985）によれば、ここで話題とする資料の内容がA号窯とはほぼ一致する。なお、A号窯については、部分的

ではあるが調査が実施されており、同書に燃焼室および前庭部の測量図と、その出土遺物が掲載されている。なお、この遺跡は周辺の現状地形を観察すると、すでに消失しているものと考えられる。

## 縄文遺跡

最後に、1点のみ出土している石鍬は、SY01の補修時の裏込めに偶然混入したものである。形状から判断すると、縄文時代に属するものと考えられ、調査区の周辺に縄文時代の遺跡が存在した可能性を示している。

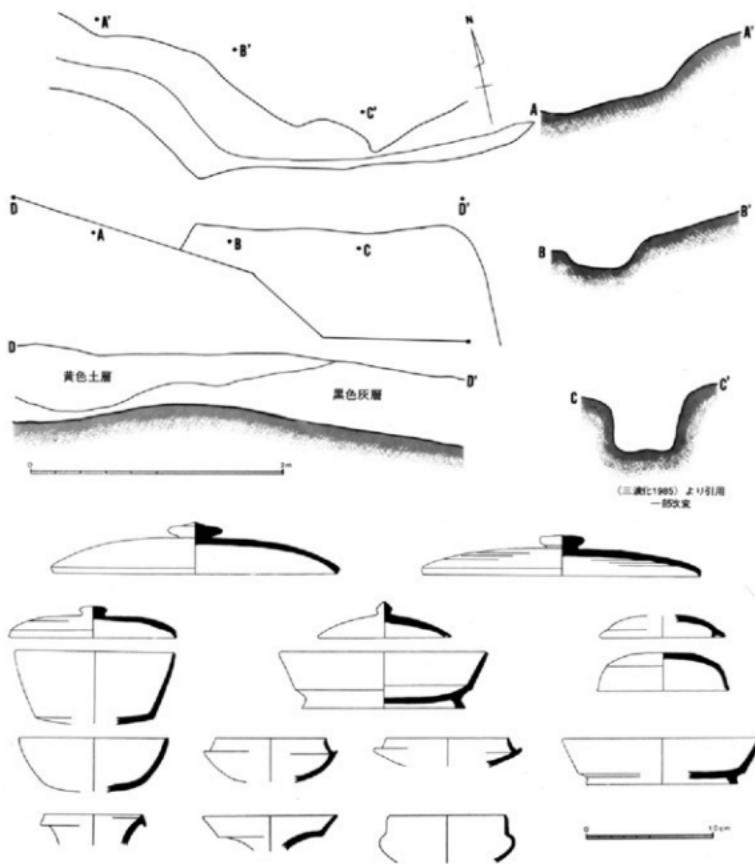


図 16 細口下 A 号窯



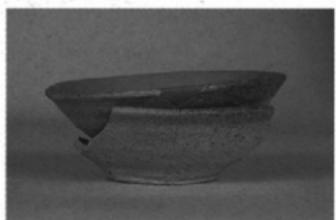
軸着試料A



軸着試料B



軸着試料C



軸着試料D



軸着試料E

表2 軸着関係一覧

	上段	中段	下段	備考
軸着試料A	17		12	
	椀B		椀B	
軸着試料B	4		3	
	椀A		椀A	
軸着試料C	62		5	
	小皿		椀A	
軸着試料D	2		1	
	椀A		椀A	
軸着試料E	11		—	
	椀A		—	
軸着試料F	32	39	33	
	椀A	椀A	椀A	
軸着試料G	28		27	
	椀A		椀A	
軸着試料H	29		30	
	椀A		椀A	
軸着試料I	26		24	
	椀A		椀A	

小皿軸着試料

### 第三章 鴻ノ巣古窯



## 第三章 鴻ノ巣古窯

### 1 遺跡

#### (1) 概要

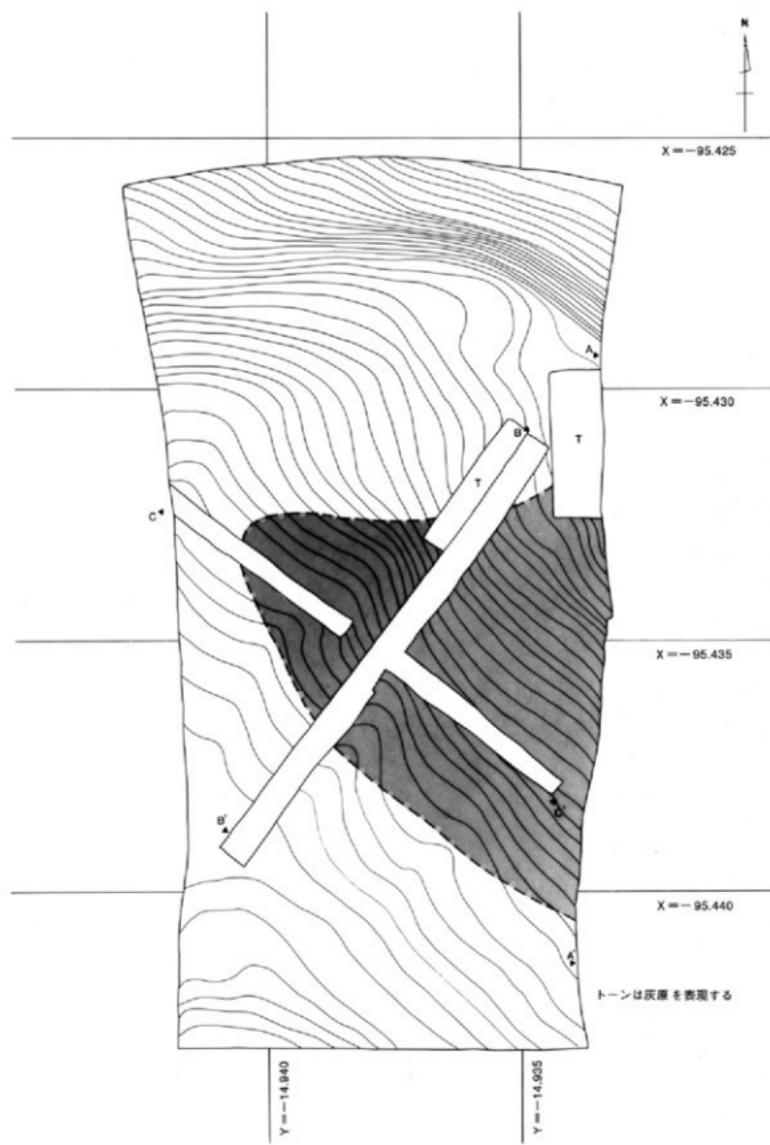
##### 調査の概要

鴻ノ巣古窯は、名古屋市天白区天白町植田地内に所在する。調査区の調査直前の状況は、旧地形の判別が困難であった。調査区の本来の地形は南側にむけて傾斜する緩やかな斜面となる。しかし、調査直前には上面に天白区植田中央土地区画整理事業の排土が大量に搬入され、道路の予定用地だけが島状となっていた。

なお、本窯は1977年、1978年の二次に渡って名古屋考古学会の手で発掘調査が実施され、その報告書も刊行されている（荒木他 1978、同 1979）。



図17 鴻ノ巣古窯調査区位置図



## (2) 造構

本調査区では、撤入土除去後に旧表土面が確認できたが、窯体に近接すると考えられる部分はすでに削平されていた。灰原は、この旧表土層とその下層に存在するにぶい黄橙層を剥がすと確認できた。検出できた灰原は、調査区の北東部分に分布する（図19）。確認した面積は約50m<sup>2</sup>程度。調査区の北東部を中心として扇形に広がっている。厚さは20cm程度、色調は黄褐色を中心とする。焼土などの混入はなく、炭化物も乏しいことから、その末端部分と考えられる。出土遺物は多量とはいえないが、須恵器（図20-105～152）、灰釉陶器（図21～27-153～420）、灰白軟陶（図29-421～428）、窯道具（図29-429～457）などがある。

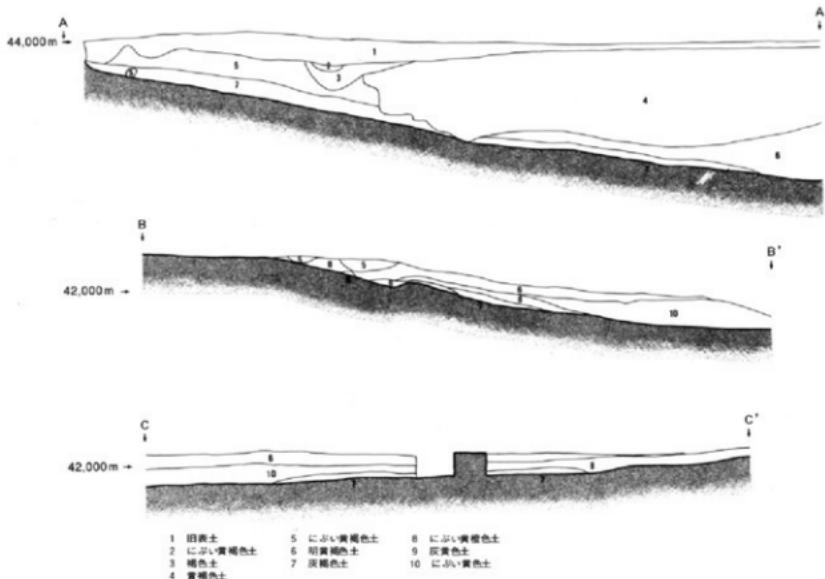


図19 鴻ノ巣古窯灰原断面図

## 2 遺物

今回の出土遺物は、コンテナー90箱に留まる。

以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、土器の種類と器種について事前に若干の整理を行なう。なお、図示した資料は、全て灰層から出土している。

### (1) 土器

#### 種類

種類としては本窯の製品である須恵器、灰釉陶器、灰白軟陶と、その焼成に使用した窯具がある。

#### 器種

器種には、須恵器の器種として、椀A、高盤、盤、蓋、鉢、風字硯、壺。灰釉陶器の器種として、椀、平皿、広縁段皿、狭縁段皿、輪花段皿、耳皿、長頸瓶、小瓶、(手付)瓶、双耳瓶、水瓶、短頸壺、大平鉢、蓋、三足盤。灰白軟陶の器種として、平皿、瓶、蓋などがある。また、窯道具にはサヤ、ツク、トチ、焼台、その他がある。

なお、法量は巻末の付表を参照とする。

#### ① 須恵器 (図20-105~152)

須恵器の器種

##### 椀 (図20-105~134)

本窯の須恵器では最も一般的な器種となる。腰部はやや張り、口縁部で緩やかに外反する形状で平底。体部は回転ナデ調整、底部は回転糸切りを無調整で残す。105はやや大振り。形状から椀に含めたが、鉢とするべきかもしれない。外面は口縁部直下でくびれ、端部は上方で面を持つ。本書第IV章の椀Aに相当する(以下、椀A)。

##### 高盤 (図20-135~138)

大振りな器形。135はやや重むが、全形が判明する資料。杯部は皿状で、端部で縁帯を形成する。脚部は太く緩やかに外反する。やはり端部で縁帯を形成する。中央部分にはヘラによる沈線文を二条施す。杯部外面下方に、回転ヘラケズリ調整を施すほかは全面回転ナデ調整による。

##### 盤 (図20-139~144)

杯部は直線的に伸び、端部で縁帯を形成する形状を呈する。高台は、細く高い。体部は

直線的に伸びるもののがほとんどであるが、144のように内彎するものも一部には含まれる。杯部外面下方に、回転ヘラケズリ調整を施すほかは全面回転ナデ調整。

#### 蓋（図20—145、146）

2点のみ得られた。145は天井部に宝珠鉢を持つ。天井部は、ほぼフラットで口縁部で屈曲する形状。146は口縁部で、口縁部が短く屈曲する形状。端部で縁帯を形成する。本書第IV章の蓋Aに相当する。

#### 鉢（図20—147）

1点のみ得られた。147は体部の上方に最大径を持つ。丸味を帯びた形状で、最大径付近に把手を貼付する。口縁部は丸く收める。口縁部外面にヘラによる沈線を一条施す。内外面回転ナデ調整だが、全体にラフとなる。把手は手づくねによる。サヤ蓋として転用されており、外面に隔壁極小片などが付着する。

#### 風字硯（図20—148）

1点のみ得られた。148はヘラケズリで成形し、ラフにナデ調整を加える。裏面の脚は残存しない。

#### 甕（図20—149～152）

149～152は偏平な体部と、緩やかに外反する口縁部を持つ。150は素地補修が確認できる。端部は縁帯を形成する。平底。体部外面にタタキ調整、内面に当て具痕が確認できるが、後者はラフなヨコナデ調整によって消される。なお、図示していないが、体部に環状の把手を付ける資料も存在する。152は底部片で平底を呈する。

### 灰釉陶器の器種

#### ② 灰釉陶器（図21～27—153～420）

##### 椀（図21、22—153～245）

椀は、灰釉陶器の主力器種となる。形状は、腰部にやや丸味を持ち、口縁部で短く外反する。高台は断面三ヶ月形の、いわゆる三日月高台だが、やや形状はくずれ、内面の屈曲が鈍い。器壁は薄く、全面回転ナデ調整を主体とする。外底部には回転ヘラ削り調整を施し、回転糸切り痕を消す。施釉部位は口縁部付近の内外面、全てハケヌリとなる。法量により大形（口径19.0cm程度）、中形（口径16.5cm程度）、小形（口径14.0cm程度）と区分ができるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。なお、188はみこみに円形の沈線文、243は外底部にヘラ記号「！」を施す。

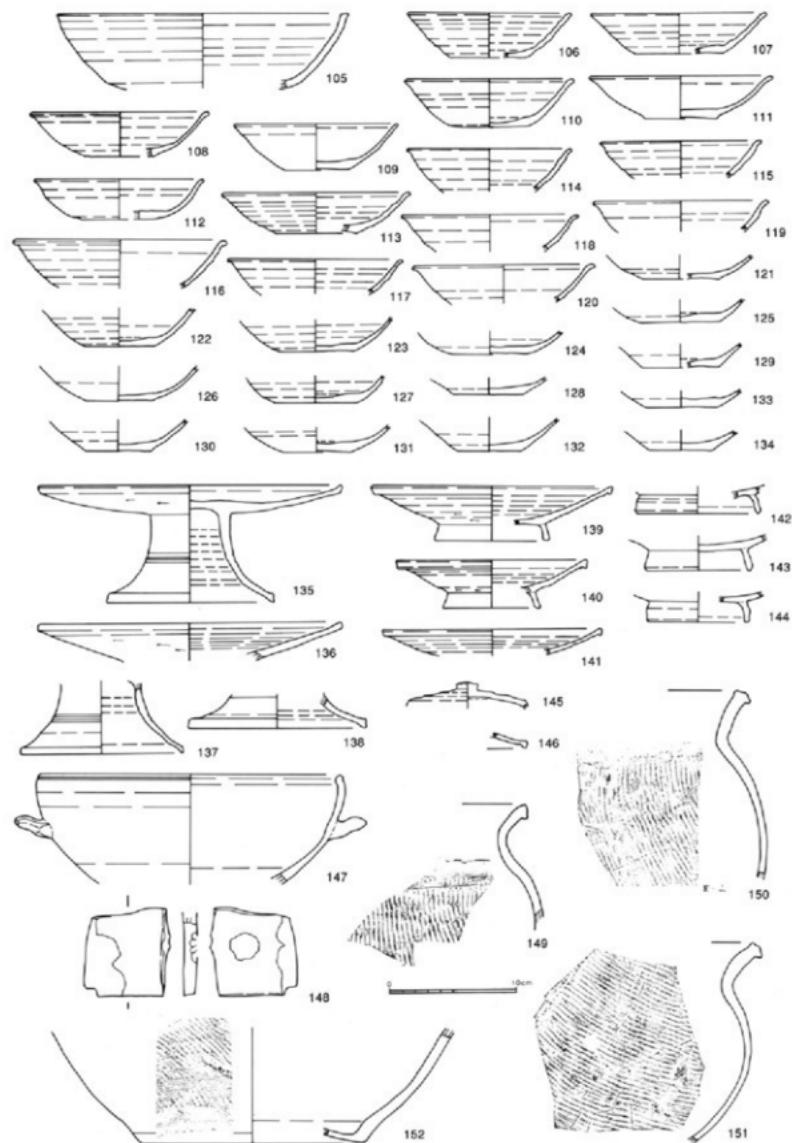


図20 鴻ノ巣古窯出土遺物1

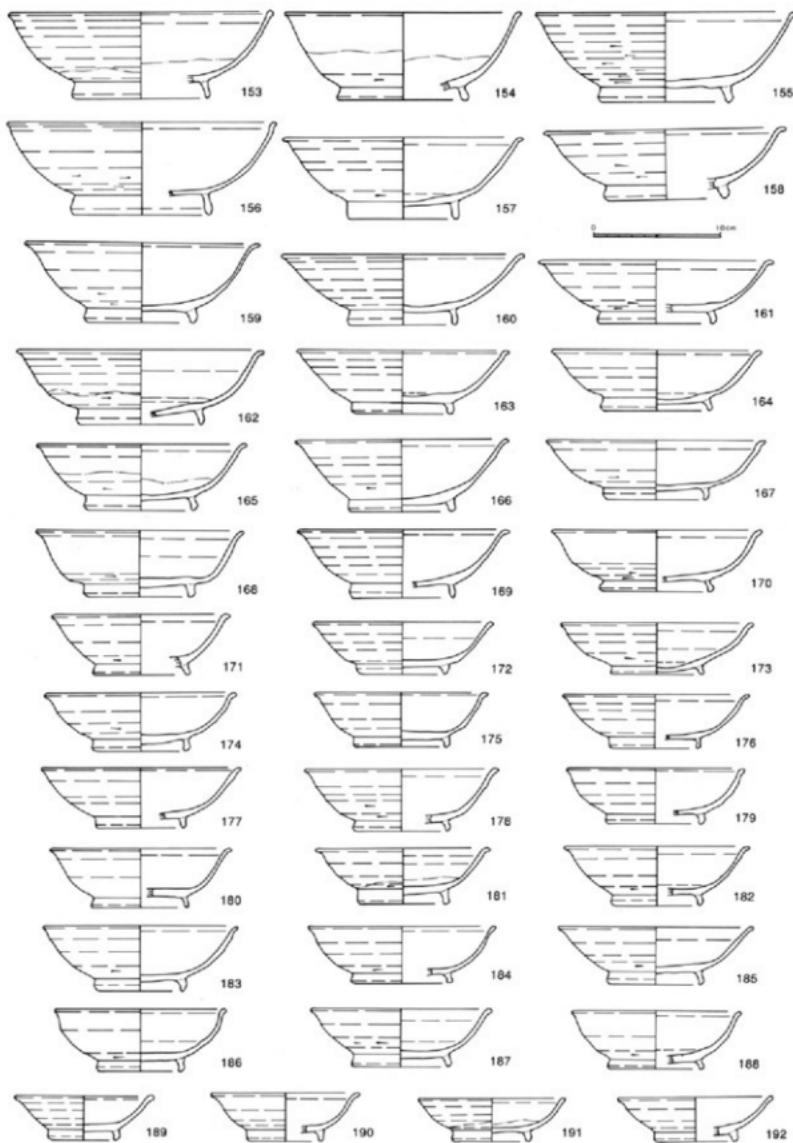


図21 鴻ノ巣古窯出土遺物 2

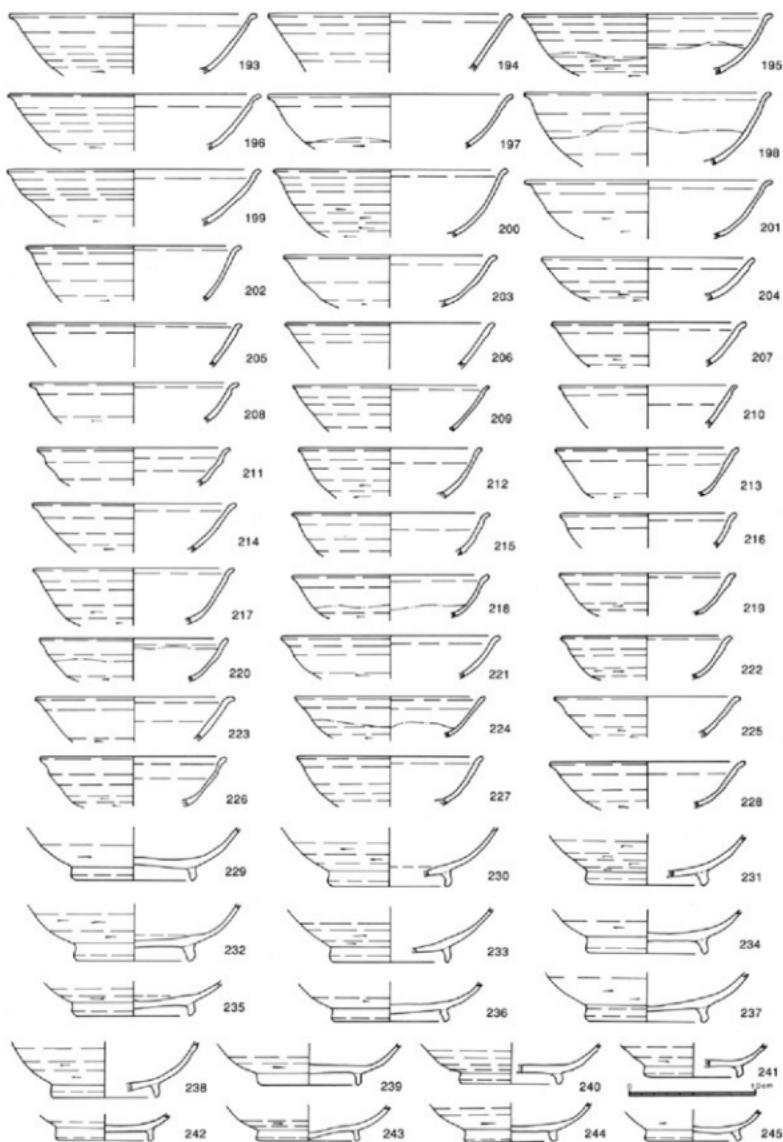


図22 鴻ノ巣古窯出土遺物3

**平皿（図23-246～287）**

平皿も灰釉陶器の主力器種の一つとなる。椀の器高をそのまま低くした形状で、形態、整形、施釉状況などは、椀と基本的に同様となる。椀のように、法量差は明瞭ではないが、246～253は、器高がやや高い。施釉部位は、やはり口縁部付近の内外面で、すべてハケヌリとなる。

**広縁段皿（図23-288～296）**

体部に段部を持つ皿。段部はカキトリにより、内面のみに確認できる。形態、整形は、基本的に椀と同様である。数量が乏しいため明らかにしがたいが、法量により大、小の区分ができるのかもしれない。施釉部位は口縁部付近の内外面で、全てハケヌリによる。

**狭縁段皿（図23-297～314）**

体部に段部を持つ大振りな皿。段部は内外面に確認できる。形態、整形は、椀と同様。ただし、段部は整形時の折り曲げによる。施釉部位は口縁部付近の内外面で全てハケヌリによる。

**輪花段皿（図23-315）**

315は口縁部片。広縁段皿の口縁部に輪花を施したもので、1点のみ得られた。輪花は口端からユビオサエによる。内外面に灰釉をハケヌリする。

**耳皿（図23-316）**

小片を含め、9点出土している。図示できるものには、316がある。1点のみ図示した。体部の形状は平皿と同様だが、無高台となる。耳部は、折曲げにより成形される。端部にはヒダをつける。なお、外底部には回転糸切りを無調整で残す。外底部を除き回転ナデ調整で回転ヘラケズリ調整は施さない。

**長頸瓶類（図24-317～351）**

長頸瓶も灰釉陶器の主力器種の一つとなる。形態は、頸部がやや短くやや開く。口縁部は外反し、端部で縁帯を形成する。体部は肩部が張り、下副部がほぼ直線的となる。底径はやや広く、低くがっしりとした高台を貼付する。器壁は薄い。全面回転ナデ調整を主体とするが、下副部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、口縁部～肩部を中心とする。いずれもハケヌリ。なお、図示していないが、肩部に環状の把手が付くものが2例ある。

**小瓶（図25-352～368）**

体部は肩部のやや張る卵形で、平底。緩やかに外反する頸部と、短く屈曲する口縁部を

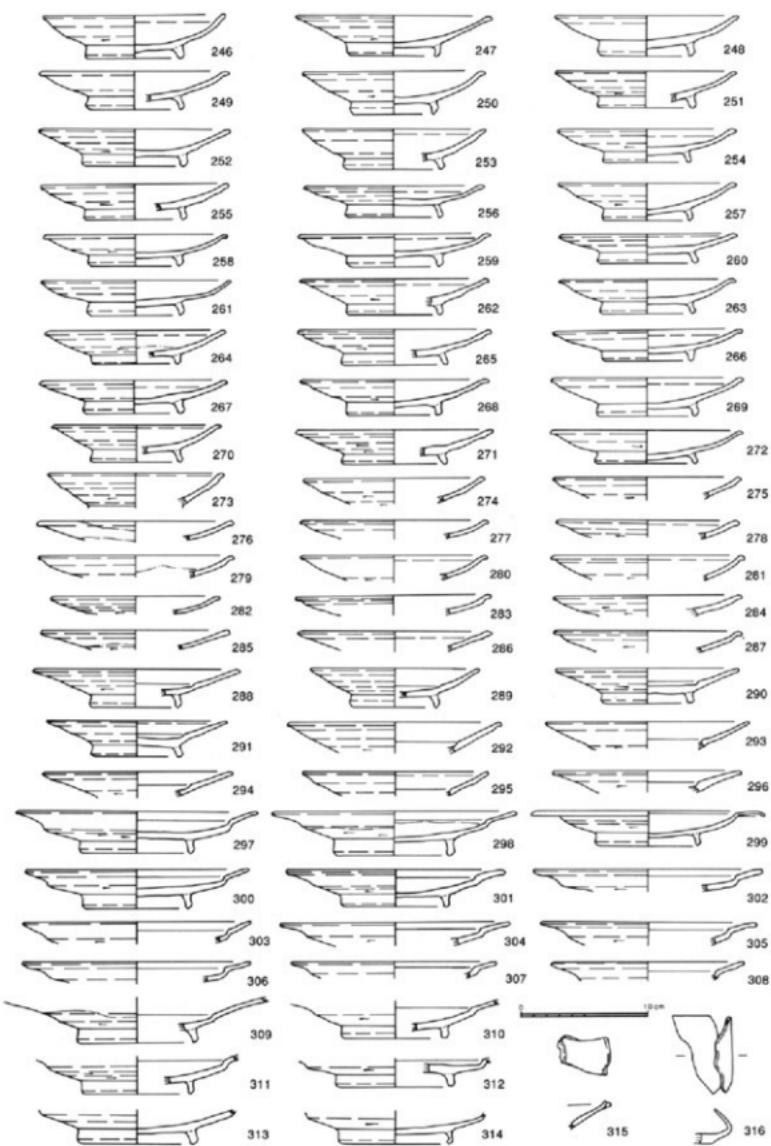


図23 鴻ノ巣古窯出土遺物4

持つ。端部は丸い。全面に回転ナデ調整を施し、外底部には回転余切りを無調整で残す。把手を貼付した資料は確認できないが、368は把手部の小片である。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、頭部外面、口縁部を中心とする。なお、352は、焼成後に胴部に穿孔された資料。性格は不明。

#### (手付) 瓶 (図25、26-369~399)

小瓶を大振りにした形態。把手が付くものと付かないものがある。369は全形が判明する資料。やや長い体部を持つ。頭部から肩部に粘土板を環状に貼付して把手とする。全面回転ナデ調整を施すが、体部下半は回転ヘラケズリ調整を施す。胴部最下端、底部との境界部分では、沈線文状のくぼみが一周する。外底部には回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、頭部外面や口縁部を中心とする。なお、375・377には確実に把手が付かない。387は、352の小瓶と同様で、焼成後に下胴部に穿孔された資料となる。

#### 双耳瓶 (図26-400~403)

破片4点を得たが、400~402はおそらく同一個体。401はやや歪む。肩部が張り、下腹部が直線的な形状で平底。耳部はヘラケズリ整形された粘土板で、肩部に貼付後、中央部分を穿孔する。頭部は、直線的で短く、口縁部で縁帯を形成する。肩部以上は、回転ナデ調整を施すが、胴部、外底部は回転ヘラケズリ調整を施す。施釉部位は肩部から口縁部でハケヌリ。

#### 水瓶類 (図26-405、406)

2点得られた。405は口縁部片。細く長い頸部は、屈曲して端部で縁帯を形成する。全面回転ナデ調整、中央部にヘラによる沈線文を二条施す。頭部外面、口縁部に施釉が確認できる。406は底部片。高台がやや高く、外側に張り出す。底径は狭い。外底部と下胴部は回転ヘラケズリ調整を施す。

#### 短頸壺 (図26-404)

図示していないが、口縁部片が1点ある。なお、404は短頸壺の体部片なのかもしれない。肩部の張る形状だが、歪む。全面回転ナデ調整によるが、肩部以下の外面には回転ヘラ削り調整を加える。肩部にハケヌリで施釉。

#### 大平鉢 (図27-407~411)

大平鉢は椀をそのまま大きくした形状だが、法量がこれとはかなり異なるので別器種とした。4点図示したが、407と408は同一個体かもしれない。全形の判明している407は器壁が薄く、高い高台が付く。外面の回転ヘラ削り調整は口縁部付近にまで及ぶ。施釉は内

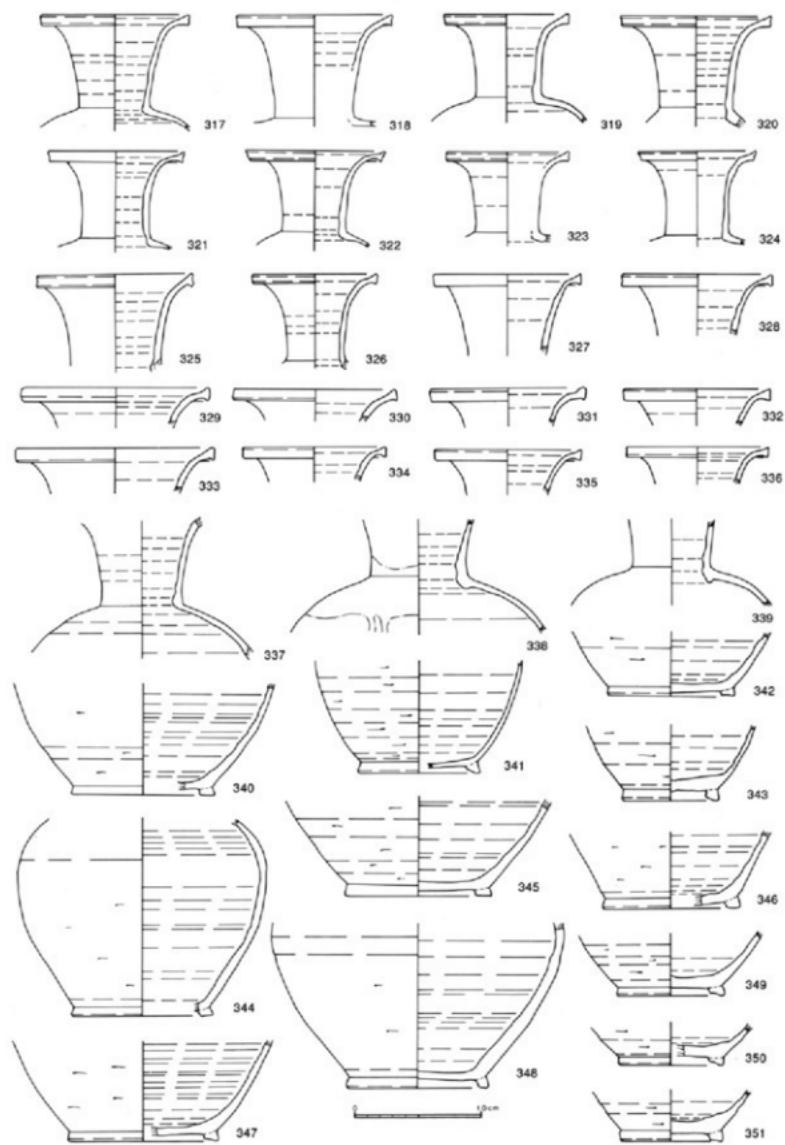


図 24 鴻ノ巣古窯出土遺物 5

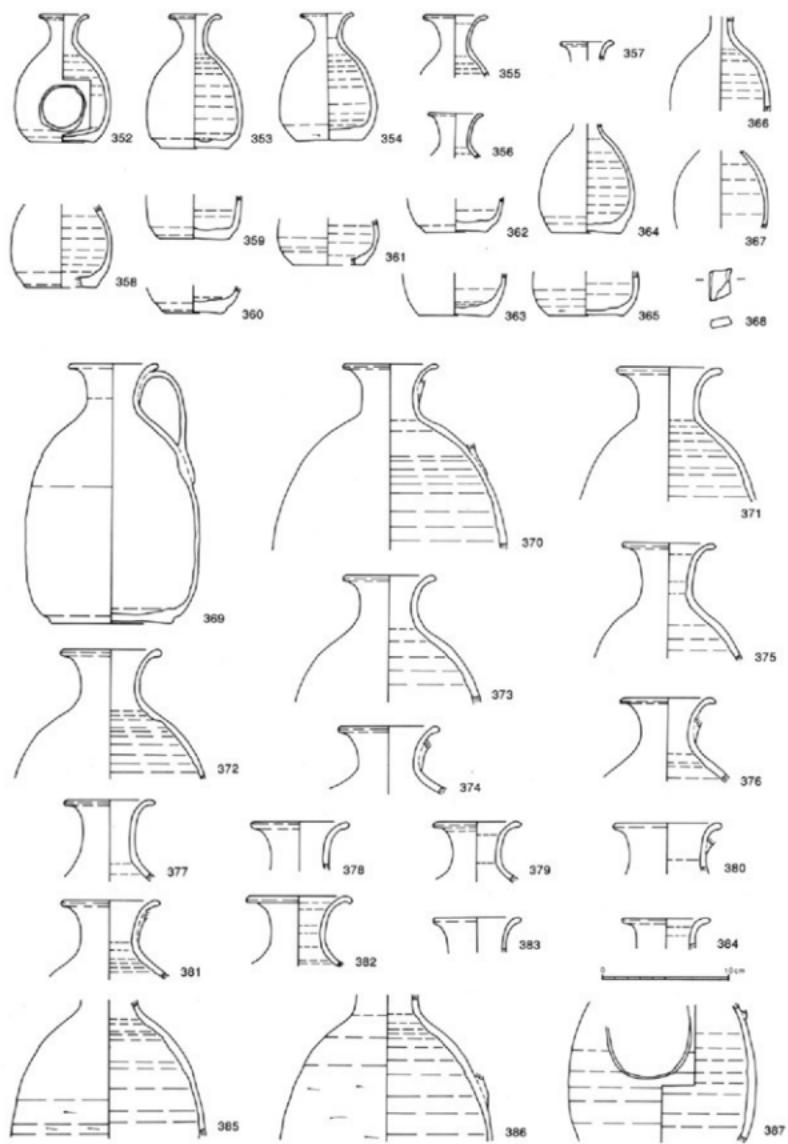


図25 鴻ノ巣古窯出土遺物 6

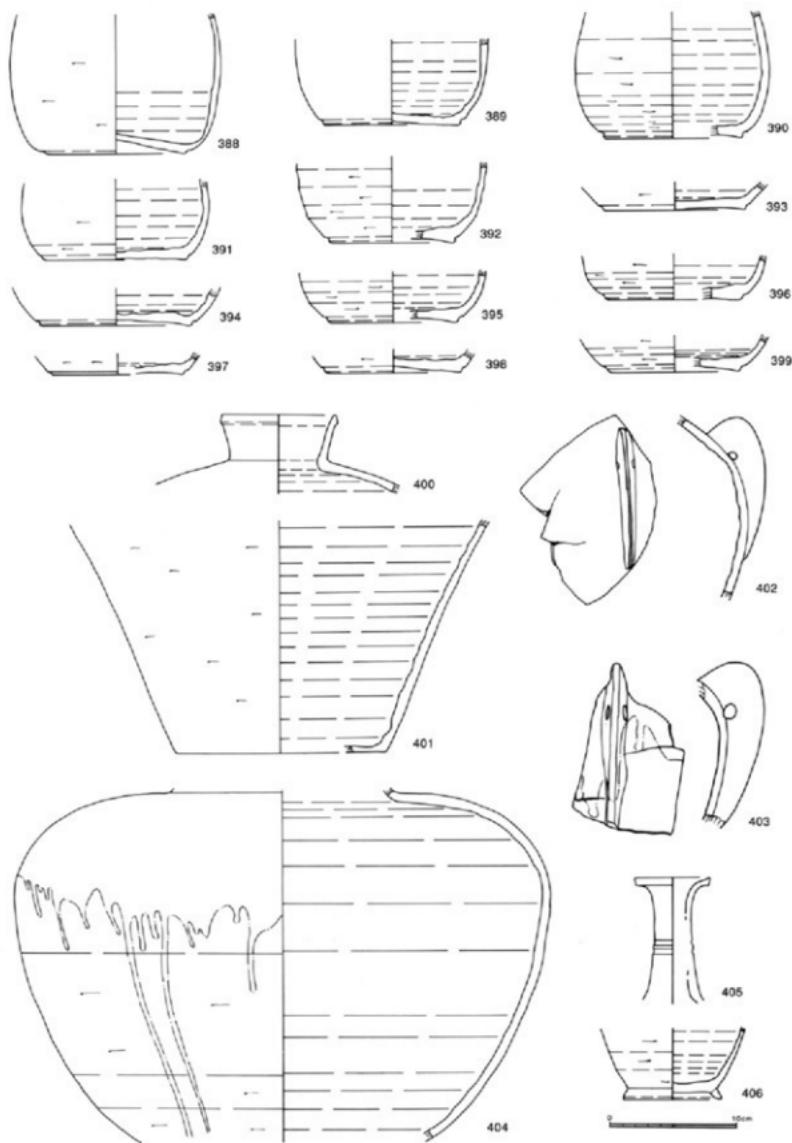


図26 鴻ノ巣古窯出土遺物7

外面の腰部までと内底部。いずれもハケヌリとなる。409～411は407と基本的には同一。ただし、410、411の内底部は露胎。408には素地補修が確認できる。

## 蓋（図27-412～417）

412はやや大振りな蓋。天井部を欠損するが、全体に丸味を帯びる。器壁は薄く、器高は高い。外面の口縁部付近には、低く中央のくぼむ突帯を貼付する。全面回転ナデ調整だが、突帯より上方の外面は回転ヘラ削り調整。

413～416は香炉の蓋。平皿を天地逆にしたような体部を持つ。口縁部は屈曲し、端部はフラットとなる。天井部外面中央に回転ヘラケズリ調整を施すほかは、全面回転ナデ調整となる。天井部外面にはヘラによる沈線文を二条施すが、413はさらにその内側にも沈線文が確認できる。

417は短頭蓋の蓋か。口縁部片。天井部に丸味を帯び、屈曲して口縁部を形成する。全

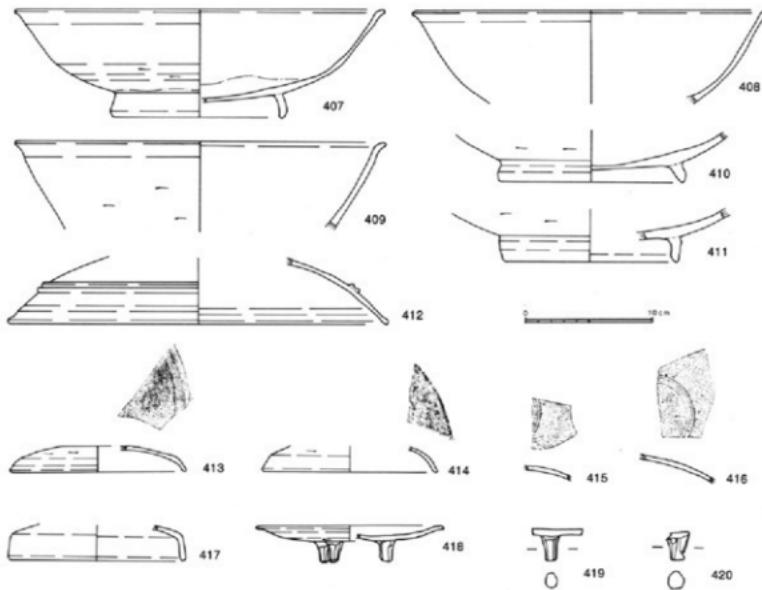


図27 鴻ノ巣古窯出土遺物 8

全面回転ナデ調整。施釉部位は自然釉との区別が不明瞭だが、天井部に確認できる。

### 三足盤（図27－418～420）

418は平皿の高台を取り去った体部に、三か所の脚部を貼付する形状。体部の形態、整形などは、基本的に碗と同様。脚部は、体部に貼付後、回転ヘラケズリ調整で形状を整える。施釉部位は体部内面のみ。やや重む。419、420はその脚部片。2点得られた。いずれも側面は縦方向のヘラケズリ調整。後者は、下部にヘラによる切り込みが確認できる。

### ③ 灰白軟陶（図29－421～428）

灰白軟陶の器種

灰白軟陶（小島他 1981）は、縁釉陶器の素地と呼称される場合もある。数量は乏しい。無釉で緻密な胎土を使用し、焼成を軟質仕上げされるのが特徴となる。部分的にはヘラミガキ調整も加えられるなど、全体にシャープな印象を受ける。なお、本窯資料では大半に陰刻文が確認できる（図29）。

### 平皿（図29－421、422）

形態、整形は、ヘラミガキ調整を除けば灰釉陶器平皿と基本的に同様。ただし調整がより丁寧となる。ヘラミガキ調整は体部内外面。421は高台が残存し、いわゆる角高台となるが、これがややくすれた形状。

### 瓶（図29－423～426）

423～426は陰刻文を施す一群。図示した資料は、ヘラミガキ調整後に陰刻文を施す。いずれも特徴的な部位を欠く小片のため、器種を特定できない。部位は、424が肩部片、425、426が胴部片、423が底部片となる。前三者は、全面回転ナデ調整で外面にはヘラミガキ調整をさらに加える。ただし、425、426はこれが不明瞭。陰刻文は423～425が花文。426はモチーフ不明。423は低くがっしりとした高台と、わずかに丸味を帯びる下胴部を持つ。回転ヘラ削りの調整痕跡を回転ナデ調整で丁寧に消し、外面にはヘラミガキ調整をさらに加える。陰刻文は上方に草木文と高台付近に花文を施す。

### 蓋（図29－427、428）

427は香炉の蓋。口縁部片で、天井部から丸みを帯びて口縁部に至る形状。全面回転ナデ調整だが、外面にはヘラミガキ調整を加える。ヘラ沈線が、天井部と口縁部の境界に二条、口縁部付近に一条施される。陰刻文は花文で、花弁と芯の花文を描き、スカシを付加する。施文はヘラミガキ調整による。428は一応蓋として報告する。口縁部は縁帯を形成する。全面回転ナデ調整。灰白軟陶としては粗製で表面にはヌタも確認できる。残存部ではヘラミガキ調整は確認できない。陰刻文はモチーフ不明。草木文か。

(2) 窯道具 (図29-429~457、図30-458~466)

窯道具の種類

窯道具には、保護具と支持具、その他がある。

① 保護具

保護具にはサヤがある。

サヤ (図29-429~439)

サヤは、サヤ鉢 (429~437) とサヤ蓋 (438、439) に区分する。前者は円筒形で平底、後者は傘型で天井部に面を持つ。全体に調整がラフで、前者は成形段階の粘土縫の単位が比較的容易に観察できるが、436~439はヨコナデ調整を施す。前者の底部、後者の天井部は無調整の粗面となる。それぞれ体部との接合部分でラフな回転ヘラケズリ調整をラフに施す。使用粘土は須恵器とはほぼ同質のもの (436、437、439) と、意図的に砂粒を混入させたサヤ専用のもの (429~435、438) がある。なお、429、431、433、434は、器面の観察

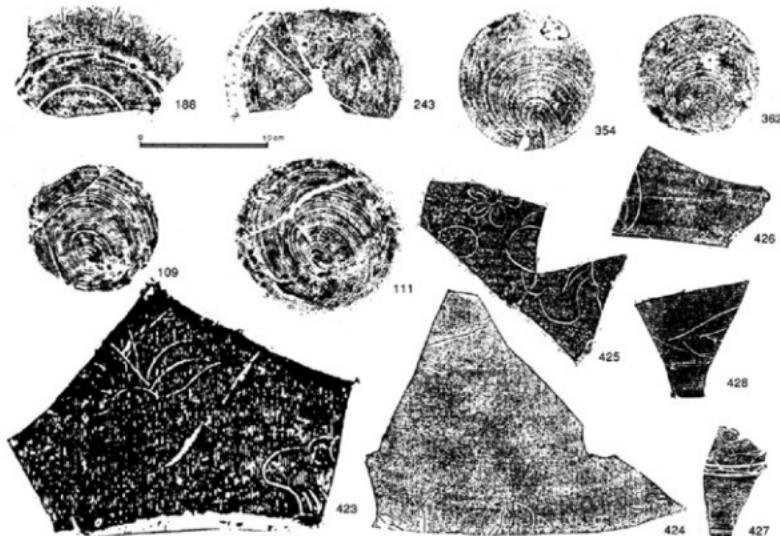


図28 鴻ノ巣古窯出土遺物 9

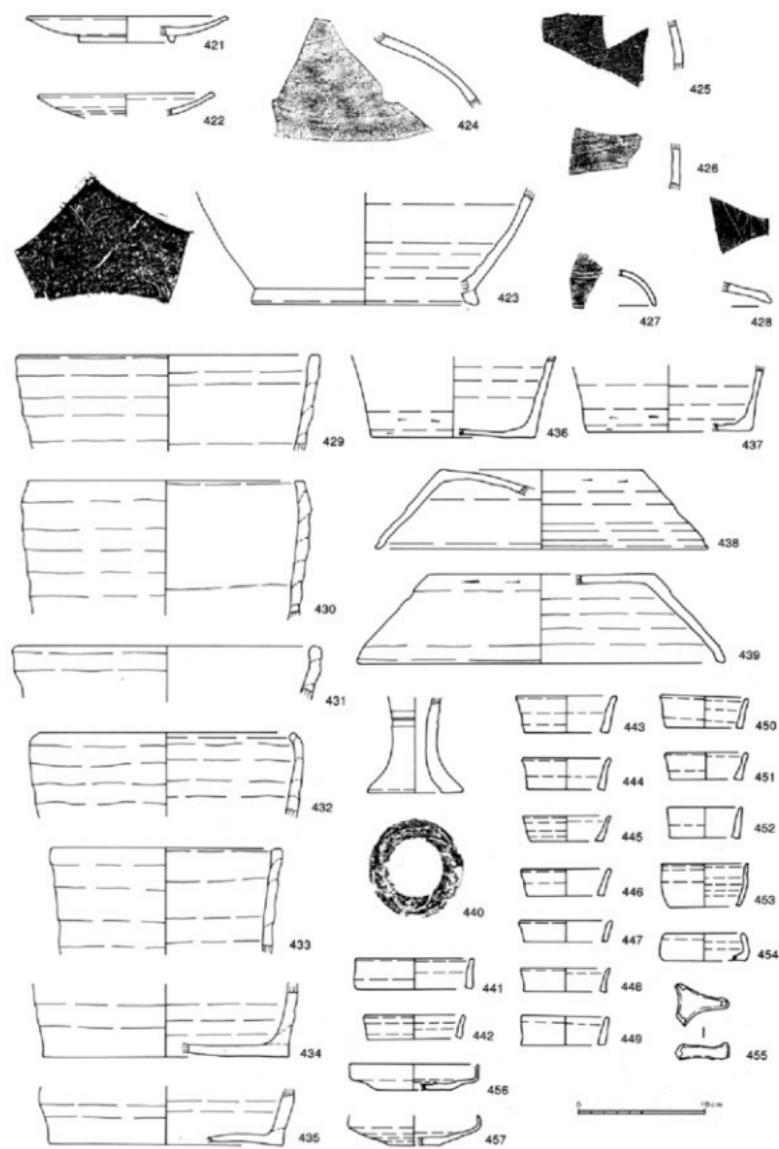


図29 鴻ノ巣古窯出土遺物 10

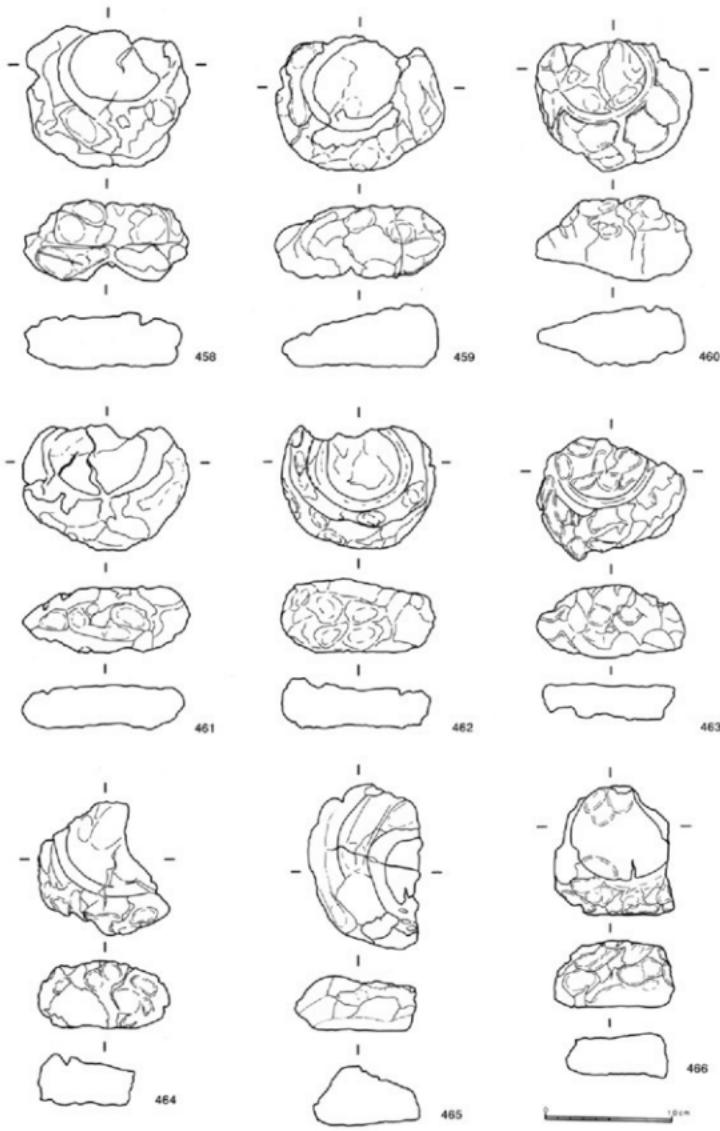


図30 鴻ノ巣古窯出土遺物11

から数次に渡る使用が確認できる。

## ② 支持具

支持具にはツク、トチ、焼台がある。

### ツク（図29—440）

支持具のうち、器高の高いもので、1点のみ得られた。440は筒状の体部を持ち、底部で開く。器壁は厚い。体部は回転ナデ調整で、底面には回転糸切りの痕跡をとどめる。体部の中央には沈線を2条施す。使用胎土は須恵器と同様。数次に渡る使用は確認できない。窯道具としては整形が丁寧となる。

### トチ（図29—441～457）

支持具のうち器高の低いものを呼ぶ。トチには筒トチ（441～453）、三又トチ（455）、盤状トチ（456、457）がある。

まず、筒トチは、須恵器盤の高台を天地逆にした形状。やや径が狭い。底面に糸切りの痕跡をとどめる。使用胎土は須恵器または灰白軽陶器と同様。窯道具としては整形が丁寧となる。いずれも数次に渡る使用は確認できない。上部と下部に軸着が認められる資料もみられることから、製品間に挟んで使用したことが予想できる。法量は、口径7.0cm、器高2.0cm程度が一般的だが、443は口径がやや大振り、453は器高が高い。

次に、三又トチは1点のみ得られた。457は腕部が1か所残存する。成形は手づくねによる。焼成はあまく、使用胎土は灰白軽陶と同様となる。数次に渡る使用は確認できない。表面には軸が付着し、先端部には製品をはがした痕跡が認められる。

456、457は、盤状トチ。2点得られた。いずれも器高は低く、体部で屈曲する。胎土は須恵器と同様。体部は回転ナデ調整、底部は回転糸切り痕を無調整で残す。具体的な使用法は不明であるが、形態から判断して盤状トチの名称で一応ここに含めた。

### 焼台（図30—458～466）

焼台には、いわゆる馬爪形焼台（図30—458～466）と礫焼台（図版16）がある。

焼台の数量

馬爪形焼台は、総重量166768.0gあった。これを完形品の平均重量453gで割ると、368.1個体となる。大半が上面に椀の高台圧痕が確認できることから、多くは椀の焼成用と考えられるが、(手付)瓶を焼成した例も確認できる（図版16—467）。いずれも砂粒を多量に含んだ胎土を使用し、その名称の語源となる馬爪形にラフに整えたものとなる。側面には指圧痕、上面には椀の高台圧痕を残す。部分的に離れ材の可能性を持つ茎などの植物圧痕が確認できる資料も含まれる。

次に礫焼台は、直径10数cm大の転石を焼台として使用したものと呼ぶ。石材は大半が

チャートとなる。総重量は 85548.8 g であった。これを完形品の平均重量 71 g で割ると 214.5 個体となる。これらは多くが被熱を確認でき、部分的には製品の極小品や自然軸が付着する資料も含まれる。なお、これらの使用例として（図版 16-469）がある。この資料は剥離した窯体の床面で、窯焼台 2 点に灰釉陶器手付瓶の底部が軸着していることが観察できる。

### ③ その他の窯道具

その他の窯道具には焼筈などがある。

#### 焼筈（図版 16）

（図版 16-470）は、直径 10 cm、高さ 5 cm 程度のスサ入り粘土塊を二段に積んで焼筈としている。表面には自然軸が厚くかかる。窯体床面に軸着した状態で剥離した床面ごと出土した。

#### 分焰柱（図版 16-471）

窯体の構造物であるが、ここで扱う。全形は不明。横断面は長径 15.0 cm、短径 12.0 cm をかかる梢円形を呈する。表面には自然軸や窯壁極小片が付着する。中央には縦位に直径 4 cm 程度の空洞が認められ、地山掘り残しによる構造ではない。

#### 窯壁片（図版 16-472）

窯体の構造物であるが、ここで扱う。スサ入りの窯壁片。表面に布目が確認できる。壁面補修時に貼付されたものが剥落したものか。

### （3） そのほかの遺物（図 31）

**土 蒜 器** 今回得られた資料のうち、鴻ノ巣古窯と直接関わりが存在しない資料をここでまとめる（図 31）。数量は乏しく、いずれもローリングが著しい。器種は高杯、甕等が確認できる。時期は古墳時代前期を中心とする。出土位置は、調査区全域における、特に傾向はうかがうこととはできない。層位は灰層中または基盤層に若干めり込むような形となる。

473～477 は高杯。473 は杯部片。縁を持って立ち上がる形状。474～477 は脚部。474、475、477 は、脚部上方の小片となる。476 のみ、丸味を帯びる脚部の形狀が判明する。円形のスカシ文が三か所に確認できる。478 は甕の底部片か。平底。

## 3 小結

## (1) 遺構について

前述のように、今回の調査では灰原の末端部分を検出したに留まった。現状では、灰原の上面に厚さ5~7mにも及ぶ搬入土が覆っているが、これは1970年代頃に実施された天白区植田中央土地区画整理事業の残土となる。これらの搬入作業は、大規模な整地を伴つたもので、調査区周辺では全面に渡り、旧地形が標高44~42m程度に削平されていた。窯体はこの段階で消滅したものと考えられる。

以前の調査

なお、名古屋考古学会の手により発行されている報告書（荒木他 1978、同 1979）によれば、本地点には2つの窯体が存在していたとされている。ところで、今回検出できた灰原は、その堆積状況から1基分の灰原と考えられる。ここではその位置関係から、名古屋考古学会の報告書の2号窯に対応する灰原と考えておきたい。一方、1号窯は、報告書に記載された内容や、センターに平行して存在するという特異な立地から考えて、特殊な



図31 鴻ノ巣古窯その他の遺物

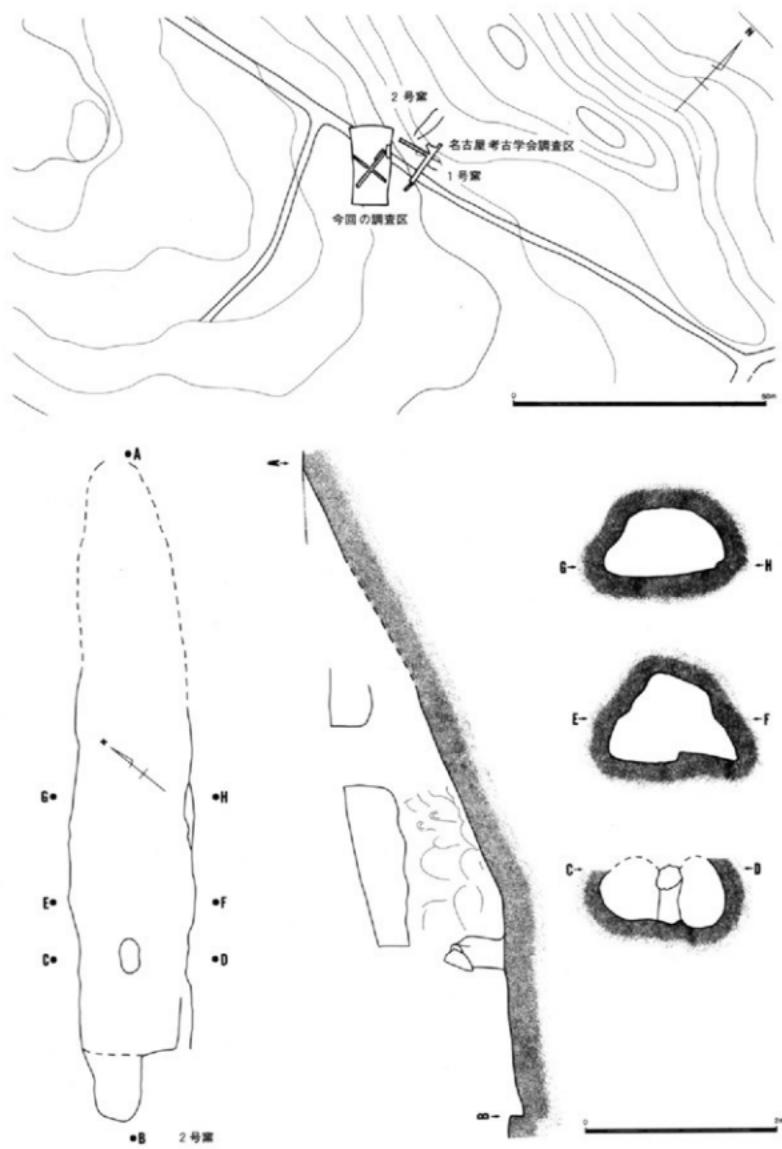


図 32 名古屋考古学会の調査成果と調査成果と今回の調査区

窯体を想定することができるのであろうか。しかし、この遺構はほとんど流失した状況下での検出であるため、その具体的な構造は明らかにはされていない。

### (2) 遺物について

今回得られた資料は、いずれも黒鉛90号窯式の後半に含められる内容を持っている。出 備 属 時 期

表3 鴻ノ巣古窯器種構成表

種類	器種	破片数集計法		重量計測法		口縁部計測法		底部計測法	
		破片数	比率	重量	比率	口縁部個体数	比率	底部個体数	比率
須恵器	楕	193	3.57%	3219.9	3.23%	11,416,666.67	5.05%	36.5	8.62%
	高盤	32	0.59%	1043.8	1.05%	2.5	1.11%	1	0.24%
	盤	42	0.78%	688.6	0.69%	4.25	1.88%	4,083,333.33	0.96%
	蓋	8	0.15%	104.4	0.10%	1	0.44%	1	0.24%
	楕盤蓋類不明	55	1.02%	163.2	0.16%	1	0.44%	1	0.24%
	鉢	25	0.46%	1498.1	1.50%	1	0.44%	1,416,666.67	0.33%
	風字印	1	0.02%	65	0.07%	1	0.44%	1	0.24%
	甕	35	0.65%	3110.6	3.12%	1	0.44%	1	0.24%
	須恵器合計	391	7.22%	9893.6	9.92%	23,166,666.67	10.25%	47	11.09%
灰釉陶器	楕	1017	18.79%	24592.3	24.65%	82.25	36.38%	139,416.67	32.91%
	平皿	428	7.91%	8742.1	8.76%	36,916.67	16.33%	71	16.76%
	広縁段皿	54	1.00%	1367.8	1.37%	5,083,333.33	2.25%	7	1.65%
	狹縁段皿	98	1.81%	2424.2	2.43%	7,083,333.33	3.13%	11.25	2.66%
	輪花段皿	1	0.02%	34	0.03%	1	0.44%	1	0.24%
	耳皿	9	0.17%	51.1	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	輪皿類不明	1817	33.57%	13169.3	13.20%	31	13.71%	101.25	23.90%
	長頸瓶	154	2.85%	9410.4	9.43%	14,666,666.67	6.49%	14,666,666.67	3.46%
	小瓶	73	1.35%	1121	1.12%	2.75	1.22%	5.5	1.30%
	手付瓶	141	2.60%	8298.7	8.32%	10	4.42%	13,583,333	3.21%
	双耳瓶	5	0.09%	1119	1.12%	1	0.44%	1	0.24%
	水瓶	1	0.02%	139	0.14%	1	0.44%	1	0.24%
	短頸壺	4	0.07%	59.2	0.06%	1	0.44%	1	0.24%
	瓶類不明	1185	21.89%	18461.8	18.51%	1	0.44%	1	0.24%
	大平鉢	19	0.35%	455.5	0.46%	1,166,666.67	0.52%	1	0.24%
	蓋	4	0.07%	52	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	三足盤	3	0.06%	52	0.05%	1	0.44%	1	0.24%
	灰釉陶器合計	5013	92.61%	89549.4	89.78%	198,916.67	87.98%	372,666.67	87.96%
灰白軟陶	平皿	1	0.02%	11	0.01%	1	0.44%	1	0.24%
	瓶	4	0.07%	277	0.28%	1	0.44%	1	0.24%
	蓋	2	0.04%	14	0.01%	1	0.44%	1	0.24%
	香炉	2	0.04%	2	0.00%	1	0.44%	1	0.24%
	灰白軟陶合計	9	0.17%	304	0.30%	4	1.77%	4	0.94%
合計		5413	100.00%	99747	100.00%	226,083.33	100.00%	423,666.67	100.00%
窯道具	サヤ	100	74.63%	6158.1	91.48%	2,333,333.33	21.21%	1.75	18.75%
	ツク	1	0.75%	179	2.66%	0.083,333.33	0.76%	1	10.71%
	筒(輪)トチ	31	23.13%	379.6	5.64%	6,583,333.33	59.85%	4,583,333.33	49.11%
	三叉トチ	1	0.75%	11	0.16%	1	9.09%	1	10.71%
	盤状トチ	1	0.75%	3.7	0.05%	1	9.09%	1	10.71%
	窯道具合計	134	100.00%	6731.4	100.00%	11	100.00%	9,333,333.33	100.00%

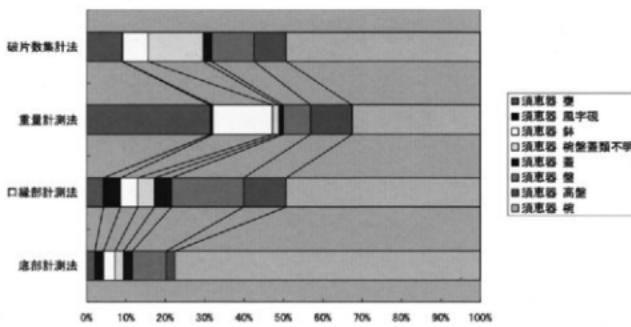


図33 計測法による比較（須恵器）

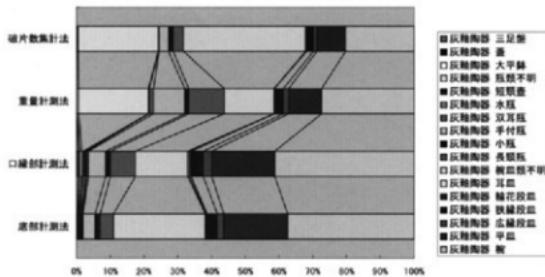


図34 計測法による比較（灰釉陶器）

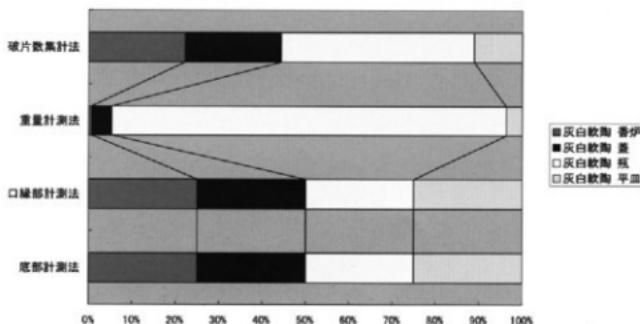


図35 計測法による比較（灰白軟陶）

表4 口縁部計測法による比較

測定名		山越1号窯		黒岩20号窯跡		鴻ノ巣古窯	
種類	器種	口縁部個体数	比率	口縁部個体数	比率	口縁部個体数	比率
須恵器	楕A	81.33	9.63%	129.25	14.30%	11.42	5.05%
	楕AB	6.33	0.75%				
	高台付楕	1.00	0.12%				
	高楕					2.50	1.11%
	楕	2.83	0.34%			4.25	1.88%
	楕	8.58	1.02%			1.00	0.44%
	楕輪底無不明					1.00	0.44%
	楕底	1.00	0.12%				
	短頸楕			1.00	0.11%		
	楕			1.00	0.11%	1.00	0.44%
	すり跡			1.00	0.11%		
	風字楕					1.00	0.44%
	楕			1.00	0.11%		
	楕	1.00	0.12%	1.00	0.11%	1.00	0.44%
	陶鏡			1.00	0.11%		
	洗	1.00	0.12%	1.00	0.11%		
須恵器合計		103.06	12.20%	135.25	14.97%	23.17	10.25%
灰釉陶器	楕	352.50	41.72%	259.91	28.76%	82.25	36.38%
	縫楕			1.00	0.11%		
	無台楕	1.0	0.12%				
	平皿	166.58	19.72%	314.50	34.80%	36.92	16.33%
	貼付楕花皿			1.00	0.11%		
	段皿			20.83	2.30%		
	広縁段皿	18.83	2.23%			5.08	2.26%
	狭縁段皿	39.50	4.66%			7.08	3.13%
	楕花段皿			1.00	0.11%	1.00	0.44%
	縫皿			1.00	0.11%		
	耳皿	4.50	0.53%	1.75	0.19%	1.00	0.44%
	楕皿無不明	128.25	15.18%			31.00	13.71%
	長頸瓶	4.00	0.47%	3.16	0.35%	14.67	6.49%
	小瓶	11.42	1.35%	1.83	0.20%	2.75	1.22%
	手付瓶	9.17	1.09%	2.50	0.28%	10.00	4.42%
	双耳瓶					1.00	0.44%
	水瓶					1.00	0.44%
	淨瓶			1.00	0.11%		
	双耳巻			1.00	0.11%		
	短頸瓶	1.00	0.12%	1.00	0.11%	1.00	0.44%
	巻			1.00	0.11%		
	瓶頸不明					1.00	0.44%
	大平鉢	1.17	0.14%			1.17	0.52%
	皿	1.83	0.22%			1.00	0.44%
	三足盤					1.00	0.44%
	唾壺			1.00	0.11%		
灰釉陶器合計		737.92	87.34%	613.48	67.98%	198.92	87.98%
灰白釉陶	楕	1.00	0.12%	46.66	5.16%		
	花文楕			1.33	0.15%		
	輪花楕			1.00	0.11%		
	花文輪花楕			1.00	0.11%		
	貼付輪花楕			1.00	0.11%		
	貼付輪花花楕			1.00	0.11%		
	花文深楕			1.00	0.11%		
	輪花深楕			1.00	0.11%		
	縫楕			22.16	2.45%		
	花文縫楕			3.25	0.36%		
	花文盤			2.50	0.28%		
	輪花盤			1.00	0.11%		
	縫皿			12.91	1.43%		
	花文縫皿			1.41	0.16%		
	段皿			17.58	1.95%		
	花文段皿			1.25	0.14%		
	輪花段皿			1.00	0.11%		
	平皿	1.00	0.12%	27.00	2.99%	1.00	0.44%
	耳皿			1.00	0.11%		
	縫			1.66	0.18%		
	手付瓶			1.00	0.11%		
	花文瓶			1.00	0.11%		
	手付小瓶			1.00	0.11%		
	皿					1.00	0.44%
	花文香炉座			1.00	0.11%		
	香炉			2.50	0.28%	1.00	0.44%
	托			1.00	0.11%		
	唾壺			1.83	0.20%		
灰白釉陶合計		2.00	0.24%	155.04	17.15%	4.00	1.77%
合計		844.83	100.00%	903.77	100.00%	226.08	100.00%

**計測手順** 土資料は灰原資料であることから、操業段階の焼成比率を反映しているものと考えられる。しかし、出土量の関係から、全ての個体を識別することが困難であるため、ここでは全点を集計した。

**計測結果** 具体的方法は、今回の出土遺物の総量が生産遺跡資料としては少量であるため、4つの異なる作業を相互に比較する方法をとった<sup>(1)</sup>。破片数の集計（破片数集計法）、重量の計測（重量計測法）、口縁部の計測（口縁部計測法）、底部の計測（底部計測法）である。なお、口縁部計測法および底部計測法については成果の直接比較が可能なよう、本センター刊行の黒雀89号窯報告書（小澤他 1994）で実施された方法を基本的に踏襲している。この方法は破片接合後に口縁部及び底部を計測するものである。口縁部及び底部を12等分して残存部を数えるもので、端数は四捨五入するが、1/12以下はすべて1/12に切り上げている。個体数はこれを12で割って求めている。なお、集計後、12/12に満たない器種や口縁部が残存しない器種はすべて1.0としてカウントしている。

**湯ノ巣の器種構成** 表3は、得られた結果をまとめたもので、図33～35で種類別にこれをグラフ化した。比較すると重量計測法が他二者からやや突出した傾向を示す。このことは、重量計測法が、各器種に法量差が大きい資料にはあまり適切でないことを暗示しているのかもしれない。そうであるならば、破片数集計法も数字上ではあまり明瞭ではないが、同様の傾向を持つだろう。一方、口縁部ないし底部を計測する方法は相互が比較的近い形状のグラフとなっている。これは両者の計測法が本窯資料に有効である根拠となるだろう。今回の資料は、口縁部の方が底部のそれより器種判別に有利であることから、前者の計測法に、より適合性を認めることができる。

次に最も有効と考えられた口縁部計測法の成果を中心に、資料の器種構成比をながめる。種類別の生産内容は、灰釉陶器がほぼ全体の90%を占めている。須恵器は残りの10%。灰白釉陶は破片数7点と微量である。

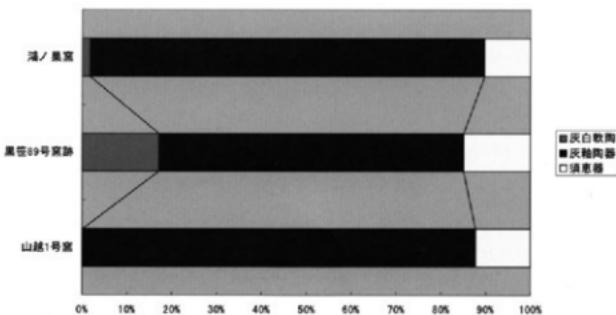


図36 3遺跡の口縁部計測法による比較

それぞれの内訳は、まず、須恵器については楕Aが50%程度、続く盤が20%、これに高盤も加えると30%となる。ここでは供膳具の優位を指摘できるが、後述する灰釉陶器のように特定器種の極端な突出が認められない。一方、灰釉陶器は、楕、皿類が80%を越える。楕と平皿の比率は、2：1より前者がやや優位となる。ここでは、供膳具生産の優位、中でも楕の生産量の突出に注目できるだろう。一方、主力器種の一つにもみえる瓶類は、10%にも満たない数値となる。器種別では、長頸瓶と（手付）瓶が、ほぼ1：1の比率で存在している。小瓶は、30%前後とこれらより数値が低い。灰白軟陶は、瓶類が多いのか。ただし、資料数が乏しいため、断言できるものではない<sup>(2)</sup>。

以上、鴻ノ巣古窯資料の構成比を分析した。その結果、灰釉陶器の碗に偏重した生産内容を確認することができた。

次にこれを、ほぼ同一時期に属する、愛知郡三好町黒笠 89 号窯資料と比較する。黒笠 89 号窯は、愛知用水掘削と一緒に伴う農地開発によって発掘調査が実施されている。報告書は 1957 年とその翌年に刊行されている（愛知県教委 1957、1958）が、ここで比較対象としたのはデータは 1994 年に財団法人愛知県埋蔵文化財センターから刊行された報告書（小沢他 1994）による。内容をながめると、種類別にはやはり須恵器と灰釉陶器と灰白陶器がある。構成比率は須恵器から 15%、68%、17% となる。次に種類毎の器種構成比をみる。まず、須恵器はほとんどが碗 A で構成されている。構成比は須恵器中の 99% にも迫り、残り 1% 強に、すり鉢、甕、瓶、鉢などが存在する。次の灰釉陶器は全体の 68% で

## K 8 9 の器種構成

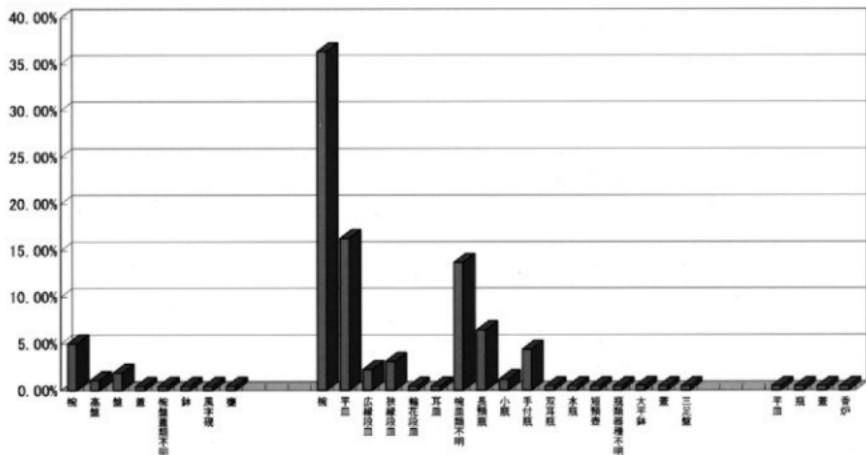


図37 清ノ巣古窯口縁部計測法による器種比較

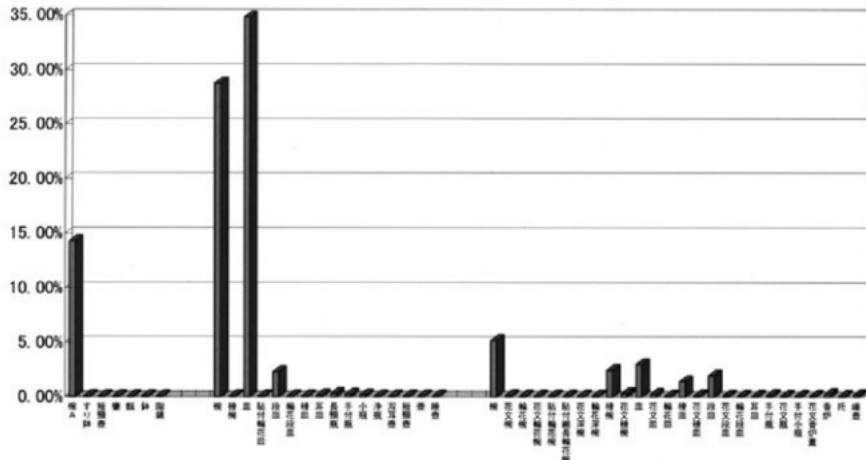


図38 黒猿89号窓口縁部計測法による器種比較

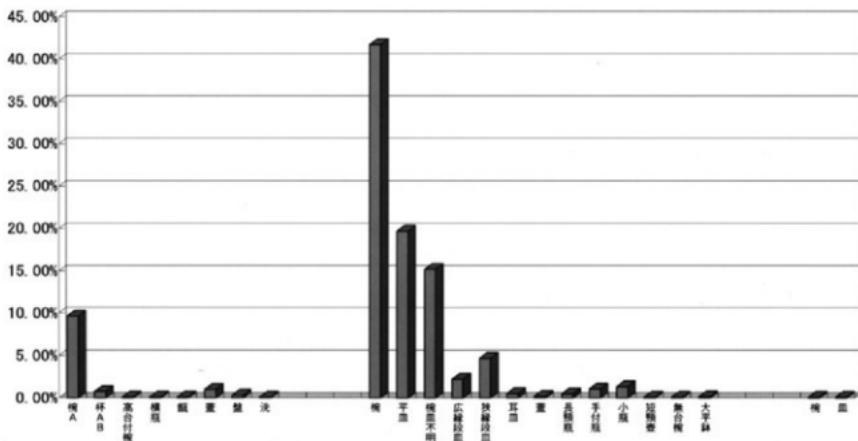


図39 山越1号窯口縁部計測法による器種比較

ある。器種は椀が42%、平皿が51%、瓶類は1%をはるかに下回る。灰白軽陶は全体の17%となる。器種は碗類が51%、皿類が43%、瓶類は1%をはるかに下回る。特に棱輪が灰白軽陶の17%を占める。なお、灰白軽陶中の陰刻文出現率は7%である。

黒笠98号窯の内容を鴻ノ巣古窯と比較すると、まず種類別で灰白軽陶の比率が高いのが特徴となる。器種数も黒笠98号窯の方が多く、これは特に灰白軽陶に著しい。しかし、両者の須恵器と灰軽陶器の比率はほぼ同一で、これらの差異が基本的に灰白軽陶の生産量に起因したものであったことを考えさせる。

次に、これを器種別に比較する。まず、須恵器では両者に器種構成は大差はない。しかし、構成比では黒笠89号窯に碗Aの突出が指摘できる。灰軽陶器では器種構成に差が認められ、黒笠89号窯には稜輪、稜皿や貼付輪花皿が加わる。また、特殊なものとして、外面に蓮弁文を施す碗の部品が報告されている。一方、構成比では共通傾向として碗、皿類が総生産量の過半数を占めることである。具体的な数値は、鴻ノ巣古窯が73%、黒笠89号窯が68%である。しかし、碗、平皿の比率に差異が認められ、鴻ノ巣古窯が2:1、黒笠89号窯はほぼ1:1となっている。灰白軽陶では両者に著しい差が存在する。ここではまず生産量に注目できる。具体的には鴻ノ巣古窯が僅か数点にすぎなかったのに対し、黒笠89号窯では17%と一定比率をもって存在している。器種構成では、やはり黒笠89号窯に稜輪、稜皿や貼付輪花碗、貼付輪花皿、托などが加わる。また、数字上には表現されていないが、黒笠89号窯にはいわゆる蛇の目高台を持つ碗、皿類が含まれている。また、陰刻文では質、量ともに黒笠89号窯が優位となる。鴻ノ巣古窯に個性的なパターンがいくつか含まれるのに対して、黒笠89号窯は数パターンに類型化でき、前段階からの系譜を引く伝統性の強いものとなっている。

以上、鴻ノ巣古窯と黒笠89号窯の内容を比較した。まずこれらの共通傾向として、灰軽陶器の碗に偏重した生産内容と、須恵器生産が全体の10数%を占めるという共通性が指摘できた。

一方、両者の差は灰白軽陶生産に明瞭に現れる。鴻ノ巣古窯の灰白軽陶生産が、例外的存在であるのに対して、黒笠89号窯では須恵器の生産量すら越え、器種も豊富なものとなっている。つまり、黒笠89号窯資料は、灰軽陶器と須恵器の生産で少器種大量生産の傾向を示しながら、灰白軽陶の生産では、その対局にある多器種少量生産方向性を保持したという二面性を考えることができる。須恵器や灰軽陶器の器種が、鴻ノ巣古窯資料と比較して黒笠89号窯資料の方が多いことも、同様の理由によるのだろう。

ここで両者の差を明確にするため、もう一例は同時期の比較資料を提示する。愛知郡長久手町山越1号窯の資料である。この資料は愛知郡長久手町役場に保管されるもので、今回同町の御好意により口縁部計測を許可された。山越1号窯は、土地区画整理事業によって発掘調査が実施されている。報告書は1976年に刊行されている(山川他 1976)が、「長久手町史」資料編五に再整理のデータも報告されている。ここでの種類には須恵器と灰軽陶器と灰白軽陶がある。資料の内容を鴻ノ巣古窯のそれと比較すると、水瓶が欠落し、

山越の器種構成

輪花の手法が認められないなど、若干の差が確認できるのみで、よく類似している。構成比率は、須恵器が12%で、灰釉陶器が88%となる。灰白軟陶は微量で0.04%である。次に種類毎の器種構成比をみると、須恵器はほとんどが輪Aで構成されている。構成比は80%程度。非常に単純な構成となる。次の灰釉陶器は、輪が47%、平皿が22%、瓶類は4%となる。輪と平皿の比率は2:1である。灰白軟陶は輪と平皿が存在するのみで、陰刻文は確認できない。山越1号窯資料のこうした内容は、鴻ノ巣古窯の内容とよく類似している。

以上、10世紀前半の猿投窯について、三か所の窯資料を比較した。その結果、生産内容の基本路線が、灰釉陶器輪に集約された少器種大量生産の方向性を持っていたことを考えることができた。これは、この段階における灰釉陶器窯の基本的性格と考えることができるものだ。また、須恵器と灰釉陶器の生産比も、前者が10数%程度の数値で一致している。この方向性は、鴻ノ巣古窯、山越1号窯の生産内容にオリジナルな姿として指摘できるだろう。少器種に集約された大量生産は、これ以後の基本路線として定着する方向性である。

## 灰白軟陶

一方、黒笠98号窯の事例は、こうした性格に、灰白軟陶の量産というオプションを付加したものと理解することができる。この場合の灰白軟陶の生産は、多器種少量生産の方向性をたどる。つまり、黒笠14号窯以来の伝統的な性格である。なお、同様の構成比を持つ資料は乏しく、ここでは特殊な位置を占める。灰白軟陶の綠釉陶器との関わりを考えると、興味深い問題とも考えられる。しかし、現状では、同様の方法による計測データが乏しく、資料的に不安定になっていることを否めない。計測データの増加が課題である。

## 注

1 こうした計測法を比較検討する方法はすでに丹波周山窯(宇野他 1982)などによって実践されている。

2 名古屋市天白区に所在する荒木集成館には、本窯の第一次、第二次調査の遺物が収蔵されている。今回、荒木実氏の御好意により実見する事ができた。これらの資料には今回の調査でみられなかつた種類、器種として灰釉陶器の淨瓶、平瓶、須恵器では体部が屈曲する有台杯(本書第IV章の杯B)、双耳杯などが少量含まれているが今回計測値には含めていない。

## 第Ⅳ章 高針原1号窯

---



高針原1号窯調査風景

## 第IV章 高針原1号窯

### 1 遺跡

#### (1) 概要

##### 調査の概要

高針原1号窯は、名古屋市名東区高針原二丁目地内に所在する。地形的には、北側にむけて傾斜する緩やかな斜面で、調査直前には道路の予定用地のみこれが残存していた。

今回の調査区では、窯体1基と、これに伴う前庭部、灰原、土坑、溝などを検出した。以下、各遺構について概要を記述する。

#### (2) 遺構

今回の調査では、窯体1基(SY01)のほか、これにともなう灰出しビット、前庭部、排水溝、灰原などを検出している。

##### ① SY01

構造は舟底ビットを有する窑窟である。焼成室が上部が削平され、全長7.6mが残存する。主軸の方向はほぼN-18°-Wで、北向きに開口する。出土遺物には、須恵器(図51-55-479~592)がある。

以下、窯体の各部を報告する。

本窯は、燃焼室と焼成室の境界が不明瞭であるが、平面図でいうDラインは、平面形がやや絞られるほか、床面傾斜でも変換点となっている。このことを理由に一応ここを境界とする。境界点より上が焼成室である。

焼成室は、全長5.9mを検出した。上部は削平されている。平面形は、胴部があまり張らない形状で、ほぼ直線的となる。床面は傾斜角29度をはかる。剥離が進み、残存状況は良好とはいえない。このため、床面直上の出土遺物は、いずれも原位置を保つものではない。壁面は、舟底ビット上端から計測して、0.7m地点で、最大残存高1.6mをはかる。ほぼ全面に、補修が確認できる。左壁はこれが特に顯著で、最低15面の補修が確認できる。ここではこれを古いものから順にA面からO面と呼称する。補修作業は、灰色のスサ入り粘土を貼付したものである。基本的には前段階の壁面に新たな壁面をそのまま貼付する作業となる。こうした結果、SY01では、構築当初の窯体が幅2.8mであったのに対して、最終面では、これが1.9mとなる。しかし、このうちのG面とK面とには大規模な改修が確認できる。特に前者は、SY01のオリジナルな床面を、10cm以上掘り込み、新たな床面を設定している。一方、後者では床面の掘り込みはさほど顯著ではないが、やはり新たな床面の設定が考えられる。

燃焼室は、幅2.8mをはかる。ほぼ長方形である。床面は、ほとんどが舟底ビットで占められているため確認できなかった。

##### 壁面の数

高針原1号窯



図40 高針原1号窯調査区位置図 (1 : 2500)



図 41 高針原 1 号窯調査区全体図 1 (1 : 200)

高針原1号窓

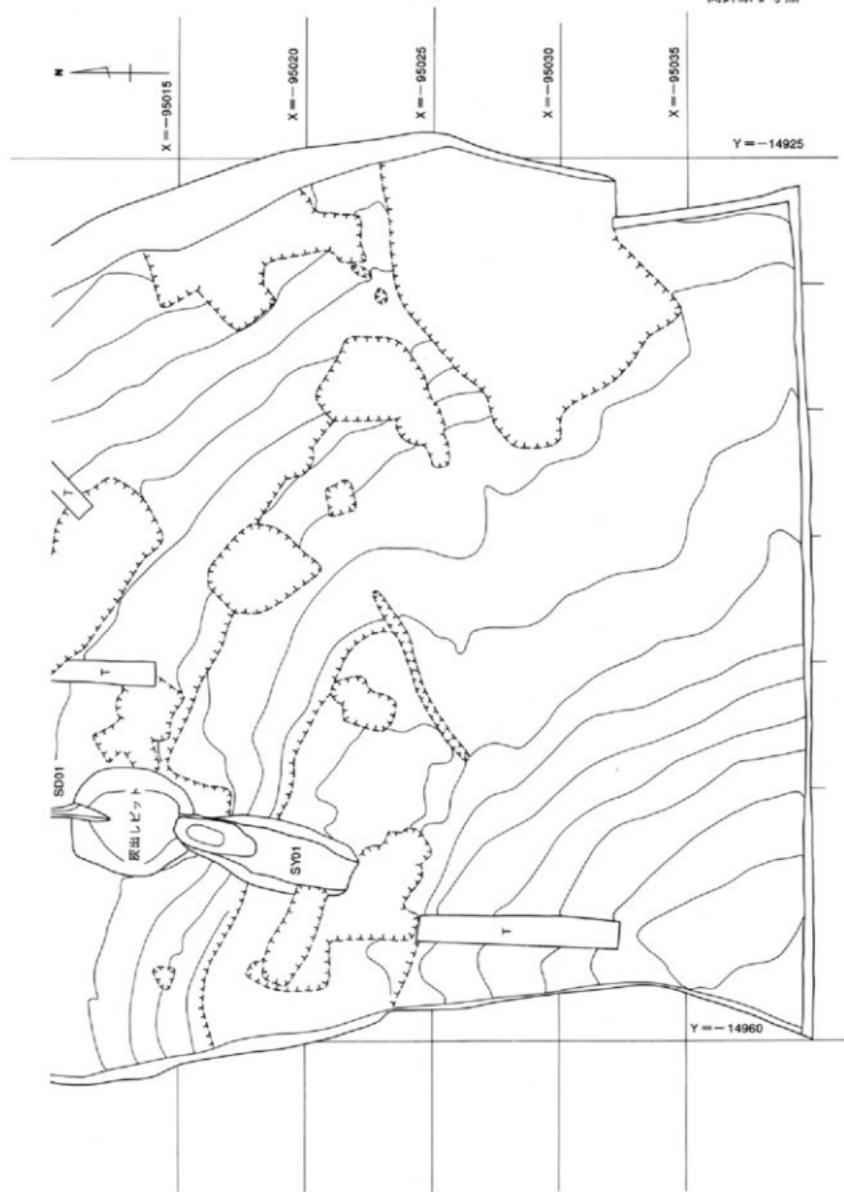


図42 高針原1号窓調査区全体図2 (1:200)

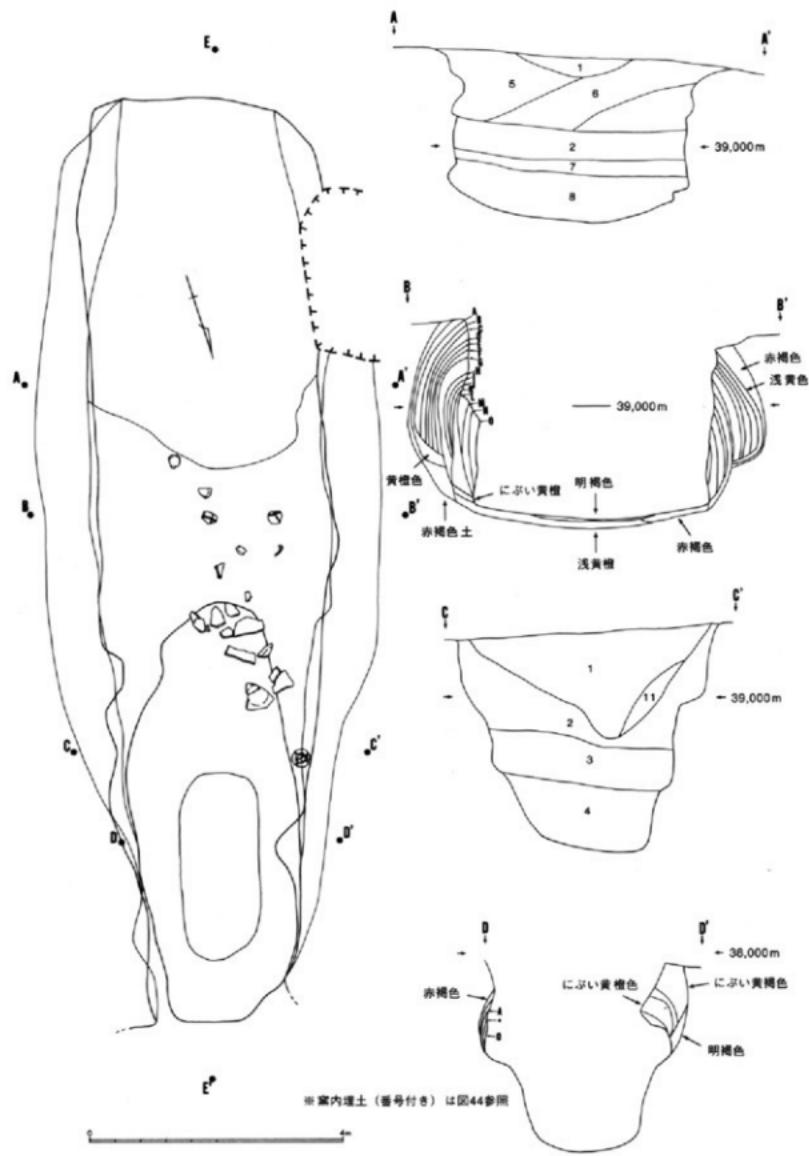


図43 高針原1号窓SY01 (1:100)

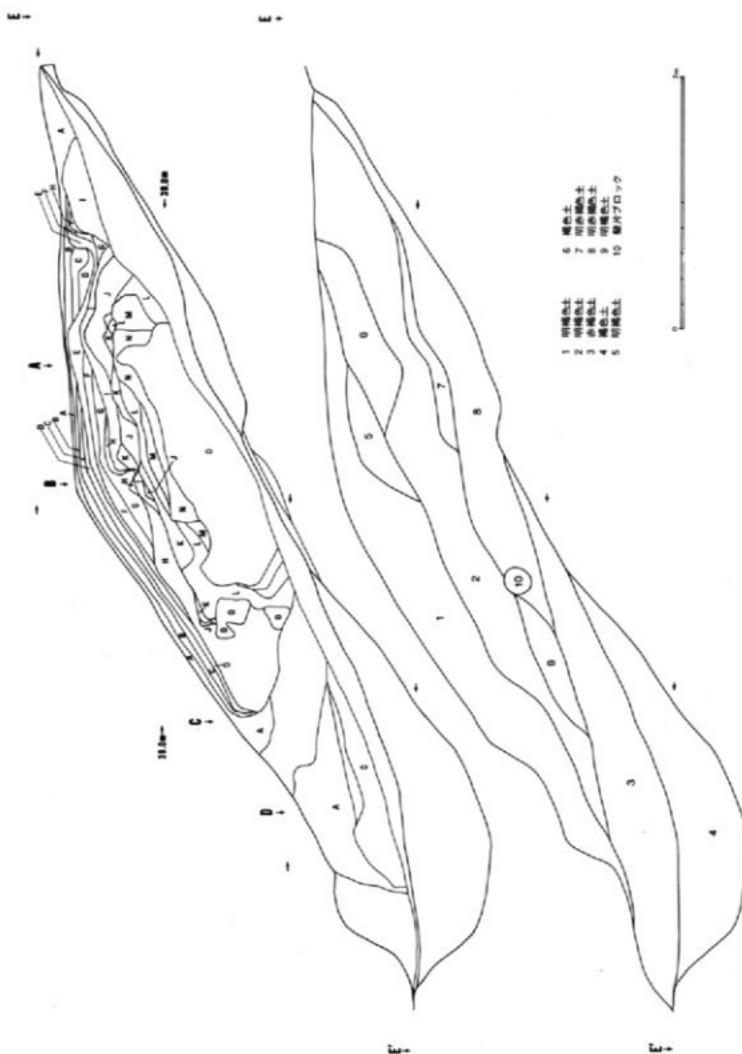


図44 高針原1号窯SY01左壁 (1:40)

舟底ピットは、平面形が椭円形を呈する。規模は、長径 3.3 m、短径 1.4 m をはかる。壁面はほとんど被熱しない。埋土は窓内のそれとは異なるが、出土遺物には焼成室埋土の資料と接合するものもある。

焚口は、舟底ピットの下端部が該当する。幅は 0.8 m。

灰出しピットと前庭部は、焚口の前面に広がる。前者は、焚口前面の地山面を掘削して形成されたもので、平面が円形を呈する。底面積は 33.3 m<sup>2</sup>で、底部は岩盤を削平したものとなる。埋土は図 45 に示す。出土遺物には、須恵器（図 56 - 593 ~ 631）がある。後者は、灰出しピットの北側を取り囲むように設定されている。地山土を整地して、平坦面を得たもので、面積は、60.6 m<sup>2</sup>をはかる。中央には後述する SD01 が掘削されている。上面は灰原が覆う。

## ② SD01

SD01 は灰出しピット下方を起点とし、北方向に掘削された溝。幅 0.3 m、検出面からの深さ 0.3 m をはかる。全長 7.0 m を検出した。検出面は SY01 構築に間わる堆土の上面からとなる。主軸の方位は N - 120° - E。埋土は、後述する灰層Ⅲ群で占められる。出土遺物には、須恵器（図 57 - 632 ~ 659）がある。

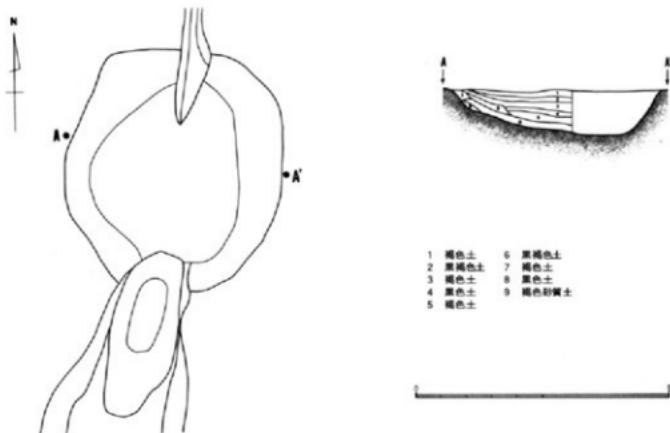


図 45 高針原 1 号窓 SY01 灰出しピット (1 : 100)

### ③ SD02

SD02は灰層Ⅱ群の上面を検出面とする溝。前底部の北側を取り巻くように存在する。幅0.7m、深さ0.3mをはかる。全長6.8mを検出したが、一部は耕作などにより削り取られる。埋土は後述する間層と同一となる。帰属時期は特定できないが、灰層Ⅰ群や整地層に覆われていることから、SY01の操業期間中には含まれる。出土遺物には、須恵器（図57-660～671）がある。

### ④ 土坑群

前底部整地層の上面と、その外縁部に接するエリアで、土坑が確認されている。いずれも用途は不明で、大きさや形状には類似性がない。これらが、相互に有機的な関連性を持つか否かは不明だが、ここでは分布域が近接するという理由のみで、一括して土坑群として報告する。

検出できた土坑は、7基である。SK01、02、04が比較的大型で、SK03、05～07が小型となる。分布位置は、SD01の周辺部を中心とする。いずれも上面を灰層が覆う。

SK01は、SD01の末端部の西側約2.0mに存在する。平面形がやや不整形な土坑で、上面は灰層Ⅱ群下層が覆う。

SK02は、前底部整地層の末端部からやや北東にずれる。平面形が円形を呈する。

SK04は土坑群の西端となる。長軸が等高線と類似する。平面形橢円形の土坑となる。

SK03、05～07は、柱穴大の規模の土坑だが、いずれも柱痕は確認できない。

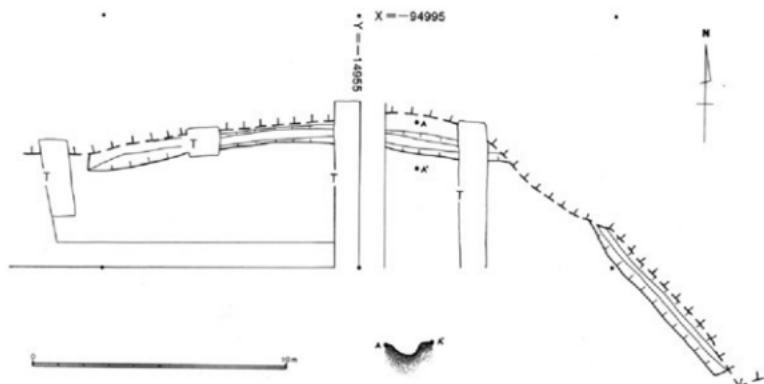


図46 高針原1号窯SD02(1:200)

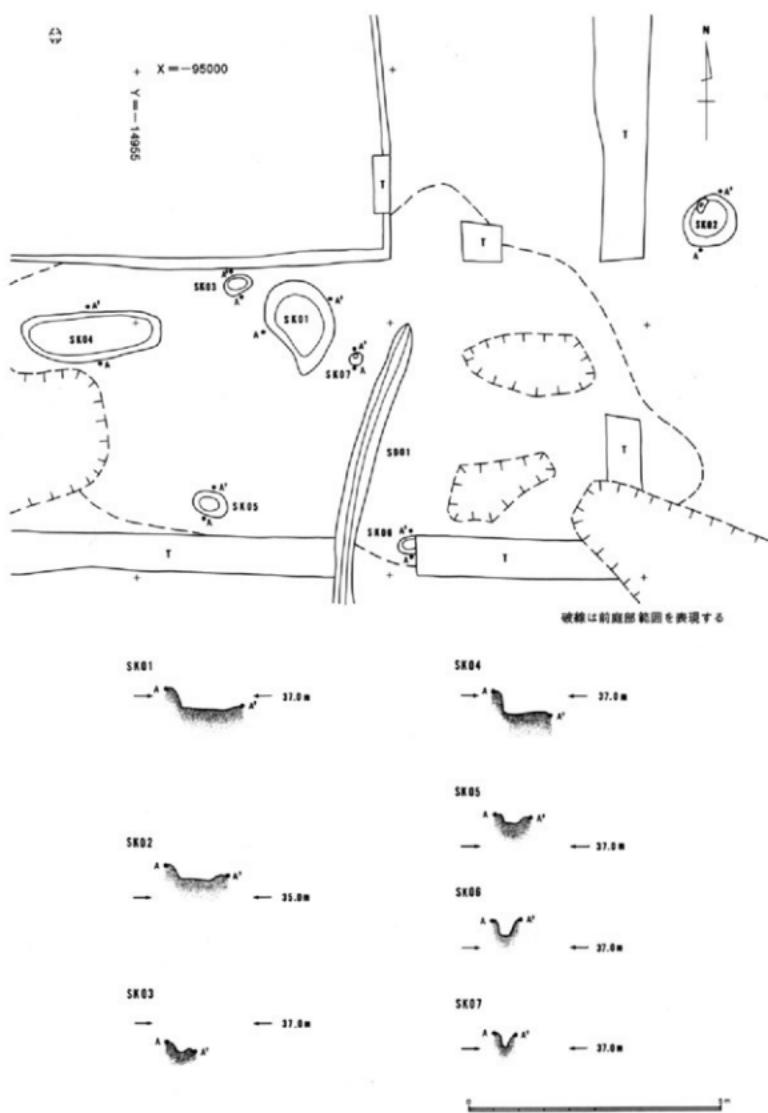


図47 高針原1号窯土坑群（1:100）

出土遺物は基本的に乏しいが、SK01には須恵器（図57-672・673）がある。

### ⑤ 灰原

灰原は面積約350m<sup>2</sup>、最大残存高2.0mに及ぶ。4つの灰層群と間層によって構成される。これらは、上記した窯体に伴うものと考えられる。灰原は、上面がほぼ全域にわたって30~40cm程度搅乱されているほか、廃材などを埋めた搅乱坑がめだつ他、北側は耕作などによりカットされており、残存状況は良好とはいえない。

以下、これをまとまりごとに特徴を記述する。

#### 灰層Ⅰ群

#### 灰原の層序

厚みは数20cm前後だが、灰原のはば全域に分布する。色調は明褐色。後述する間層の上面に堆積する。出土遺物には、須恵器など（図58-674~727）がある。

#### 灰層Ⅱ群

灰原のはば全域に分布する。前庭部の上面を覆う。今回検出した灰層のうち最大規模で、厚みは最大部分で2mを越える。上面にはSD02が掘削される。堆積状況により上層、中層、下層と区分できる。出土遺物には、須恵器など（図59~78-728~1407）がある。

#### 灰層Ⅲ群

灰原東部にのみ分布する灰層。色調は黒色。灰層Ⅱ群の上に堆積し、これを整地した再堆積層とも考えられる。出土遺物には、須恵器など（図79-1408~1442）がある。

#### 灰層Ⅳ群

灰原西部にのみ分布する灰層。色調は褐色。灰層Ⅲ群の上に堆積し、これを整地した再堆積層とも考えられる。出土遺物には、須恵器など（図80-1443~1466）がある。

#### 間層

灰層Ⅰ群とⅡ~Ⅳ群の間に堆積するもので、色調は淡黄色を呈する。灰原の東部が薄く西部が厚い。いわゆる地山再堆積層。SD02の上面を覆う。出土遺物には（図80-1467~1474）がある。

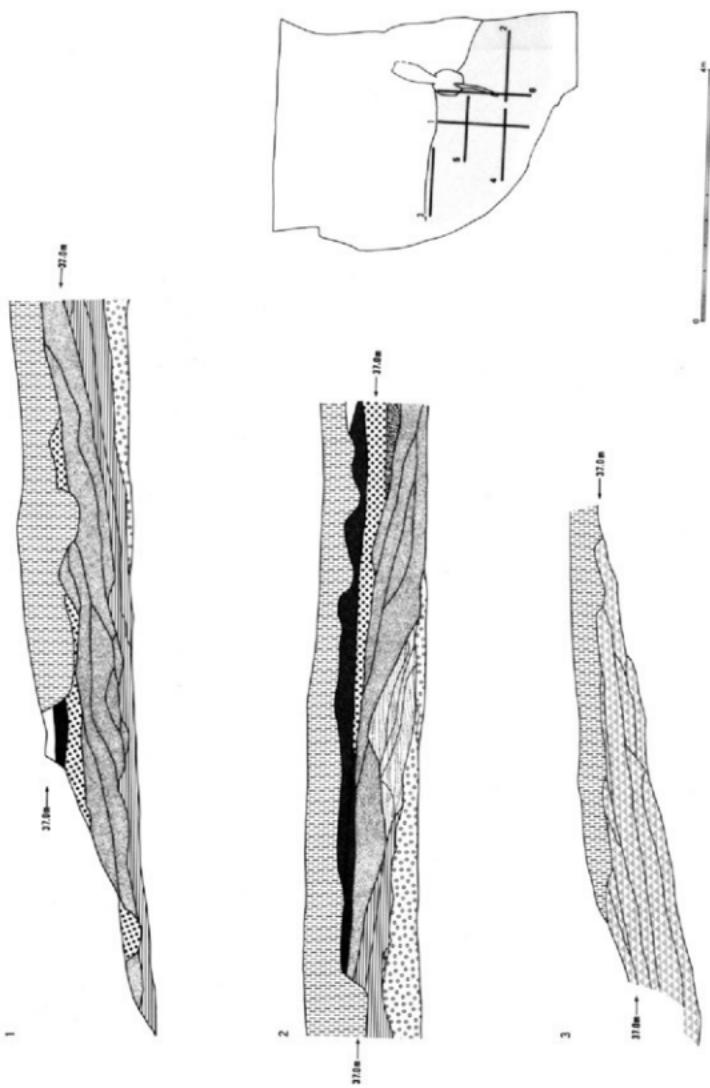


図 48 高針原 1 号窪灰原断面図 1 (1 : 80)

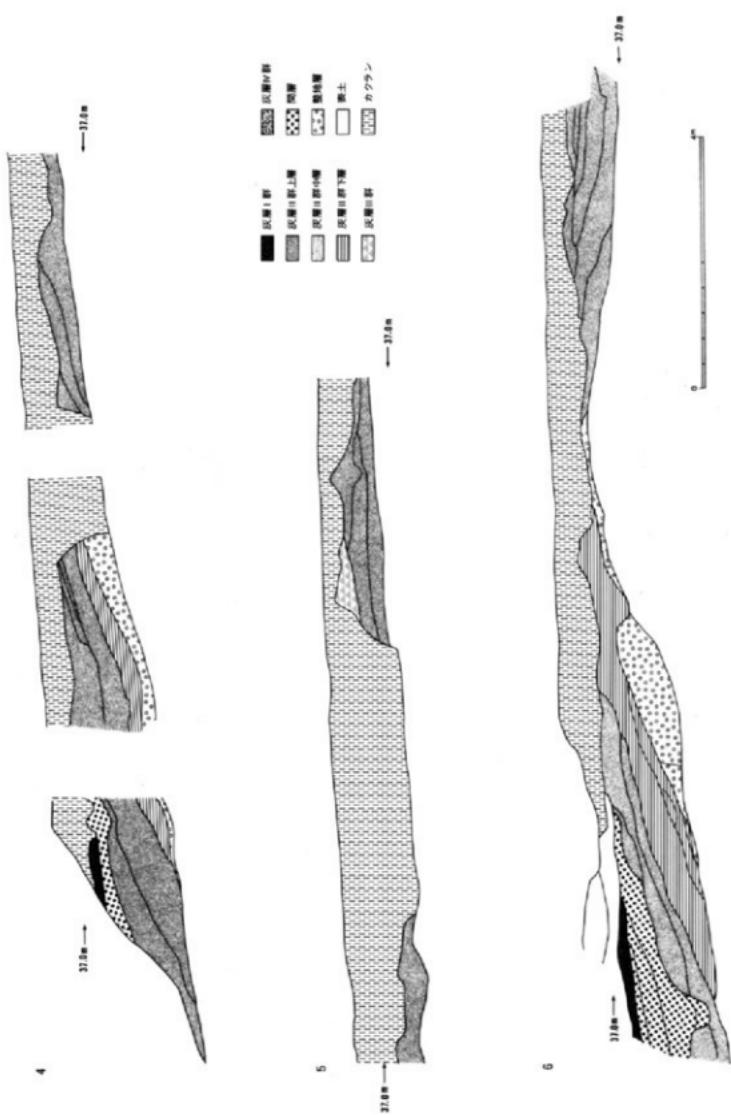


図49 高針原1号窯灰原断面図2 (1:80)

## 2 遺物

今回の出土遺物には、SY01の焼成品と考えられる土器類や、窯道具などがある。総量は、コンテナー1000箱を数える。

以下、これらについて具体的な説明を加えるが、記述の混乱を避けるため、土器の種類と器種について事前に若干の整理を行う。

### 種類と器種

#### 種類

種類としては須恵器、土師器などの土器と、その生産に使用した窯道具がある。

#### 器種

出土遺物には、須恵器の器種として、杯類が6種、碗類が2種、高杯類が4種、盤類が3種、蓋類が5種、鉢類が5種、瓶類が10種、甕類が3種あり、土師器の器種として甕などがある。また、窯道具には棒トチ、焼台がある。

### (1) 土器

#### ① 須恵器の分類

以下、土器を出土位置別に報告する。なお、須恵器については煩雑になるため、事前に器種分類などを試みる。法量は巻末の付表を参照とする。

#### 手法と技法・加飾法

ここでは記述の煩雑さを避けるため、本窯資料に認められる手法、技法、加飾法をまとめる。

#### 手法

**手法の分類** 製作の手法にはさまざまな種類が認められる。整形手法と切り離し手法に特徴をみるとができる。

#### 整形手法

成形された器形を整える手法で、本窯では5つが代表的となる。回転ナデ調整、ナデ調整、ケズリ調整、タタキ整形、カキメ調整である。まず、回転ナデ調整は、回転を伴う通常のナデ調整。器面を平滑化する効果がある。ほとんどの器種に普遍的に認められる代表的な調整手法である。一部に工具の使用が認められるのかもしれない。次にナデ調整は、回転を伴わないナデを呼ぶ。やはり器面を平滑化する効果がある。前者ほど一般的ではなく

いが、普遍的に認められる。やはり、一部に工具の使用が認められるのかもしれない。ケズリ調整は、端部が若干鋭利な形状の工具を使用する。ここでは使用する工具を「ヘラ」と呼称する。器面の乾燥が、ある程度進んだ段階で施される手法で、壁面を削り取る効果がある。なお、ケズリ調整は、回転を伴うか否かによって回転ケズリ整形、手持ちケズリ整形と区別する。前者は、ほとんどの器種に普遍的に認められる。また、タタキ整形は、タタキ具と当て具による通常のタタキ整形。器形の加工や器壁の均一化、成形時の接合部の強化などの効果がある。壺、横瓶など特定器種に特徴的。最後のカキメ調整は、板状の工具の小口などを使用した回転を伴う調整。器面を搔き取り平滑化する手法。平行する条線が特徴的。ケズリ調整と類似するが、器面の平滑化や微調整に重点をおくもので、これは異なる。フラスコ形瓶、甕に使用される。

#### 切り離し手法

整形終了後に、製品をロクロないし回転台から切り放す手法。本窯資料では3つが認められる。これを切り放し手法A～Cと呼称する。まず、切り離し手法Aはいわゆるヘラ切りを呼ぶ。ヘラを使用して、製品を回転させながらこれを切り離すもの。本窯では、小振りな器種に普遍的に認められる。次の切り離し手法Bは、いわゆる回転糸切りを呼ぶ。本窯では碗類と杯Bの一部に限定される。最後の切り離し手法Cは自然乾燥に伴い切り離しが完了するもの。本窯では大振りな器種に普遍的に認められる。外底部にはロクロないし回転台の天蓋、あるいは現代の陶工が使用する亀板に類似するような整形台の圧痕を未調整で残す。切り離し面の多くは、離れ材として使用した砂粒の圧痕を残すが、まれにこれが木葉痕である場合もある。

#### 技法

特定の調整を、一定の約束で組み合わせた一連の手順を呼ぶ。本窯では以下の特徴的な技法が確認できる。

技法の分類

#### 端部調整技法

端部調整に関わる技法は3つに分けられる。これを端部調整技法A～Cと呼称する。まず、端部調整技法Aは、本窯では最も一般的なもので、回転ナデ整形により口縁部を引出し、丸く整える技法である。例えば、なめし皮のような柔軟性をもつ器具を、補助的に使用しているのかもしれない。端部の形状が単純なものを1類、短く外反するものを2類とする。次の端部調整技法B類は、やはり回転ナデ調整の組合せによる技法である。端部を、外側から押えてフラットにした類。そのまま肥厚せずに端部を形成する類を1類、上方（または下方）に若干引き出す類を2類、縁帯となる類を3類とする。最後の端部調整技法C類は、端部付近の一面に棱を付ける技法である。口縁端は端部調整技法B類となる。

端部の技法

### 底部調整技法

底部調整に関わる技法は4つに分けられる。これを底部調整技法A～D類と呼称する。まず底部調整技法A類は、小形品に特徴的。切り離し手法A類による底部を回転ケズリ調整で整えたものを呼ぶ。次に底部調整技法B類は、切り離し手法B類に伴うもので、底部の周縁部分に調整を加えるものを呼ぶ。手持ちケズリ調整を加えるものを1類、回転ケズリ調整を加えるものを2類とする。底部調整技法C類は、裏Aに特徴的となる。切り離し手法C類で製作された底部を、半乾燥の段階で、タタキ整形によって丸底あるいは凝尖底に加工する技法(西 1986)。最終段階には、螺旋状にカキメ整形をラフに加えるものを呼ぶ。底部整形技法D類は、やはり切り離し手法C類に伴うもので、底部の周縁部分や底部下方にケズリ調整を加えるものを呼ぶ(西 1986)。

### 頸部三段接合技法

台付長頭瓶のような、体部と頭部の径の差が大きい器形や、平瓶やフラスコ形瓶のように同一方向の回転体でない器形は、体部からの連続整形が困難となる。このため通常では体部と頭部を別作りにして、これらを接合する方法がとられる。この作業は、整形時に内面調整を施すため、残った整形穴の処理と、頭部に接合孔を設定する作業に区分できる。なお、前者の器形は整形穴と接合穴が同一位置にある。ただし整形穴の方が大きく、粘土板により整形孔を閉塞し、小乾燥を経て接合穴が設定されている。一方、後者の器形では、整形孔を閉塞し、接合穴を別地点に設定する。これらの手順には粘土板の使用が特徴的で、三つの部位で頭部と体部を接合して器形を完成させている。これを頸部三段接合技法と呼ぶ。

### 穿孔部強調技法

ハソウにのみ認められる技法。器面の小乾燥の後、穿孔部の下方に粘土帯を貼付して強調するもの。強調部はナデ調整で整えられる。後述の組合せ文A類による文様帯と重なり、その一部を消す。

### 青海波ナデ消し技法

タタキ整形の外面をそのままに、内面の当て具の痕跡をナデ整形で消すもの。本窯では、タタキ整形のほとんどがこの技法となっている。

### 修飾

本窯では黄土塗布と施文がある。

### 黄土塗布

黄土ハケ塗り 鉄分を多く含む、いわゆる「黄土」をハケにより塗布する作業。焼成が良好であれば、

漆黒色の仕上がりとなる。塗布部分が内面にも及ぶため、これに装飾効果を認めるのは論議もあるが、一応ここに含めて考える。壺、平瓶、盤などの特定器種に確認できる。

#### 文様

文様には沈線文、スカシ文、クシカキ文と、組み合せ文がある。

文様の分類

#### 沈線文

先端が尖る棒状器具を原体とする直線文。単独で施される場合も多いが、頭部、脚部など柱状となる部位には二本一組みの沈線文で加飾することが多い。これは特に二重沈線文と呼称する。

#### スカシ文

一段と二段があり、後者は二重沈線文と組み合わせられる。高杯の脚部に特徴的。

#### クシカキ文

伝統的文様で直線文、波状文、刻目文、オシビキ文、環状刻目文がある。

#### 組み合せ文

種類を異にする文様を一定の法則で組み合わせるものを呼ぶ。本窯では3つのパターンの組み合せ文が認められる。組合せ文A～C類とする。組み合せ文A類は沈線文を横方向に間隔を開けて施し、ここに文様を充填する。充填文は原体をクシによる。台付長颈瓶、ハソウに特徴的である。次の組合せ文B類は、組合せ文A類を積み上げるものを呼ぶ。沈線文または二重沈線文を一定間隔で施し、それぞれにクシを原体とした文様を充填するもの。充填文が各文様体に一段のみのものをB1類、二段確認できるものをB2類とする。最後の組み合せ文C類は二段のスカシ文と二重沈線文の組み合わせである。

#### 器種分類

本窯の須恵器を形状をもとに、上記の調整と技法、文様などを考慮しながら器種分類を試みる。

#### 蓋類

口縁部が下方にあり、天井部を持つ形状。大半が杯とセットを成す。天井部には底部調整技法C類が観察できる。

蓋類は、口縁部の形状に注目し、8類に分類する。

第 IV 章

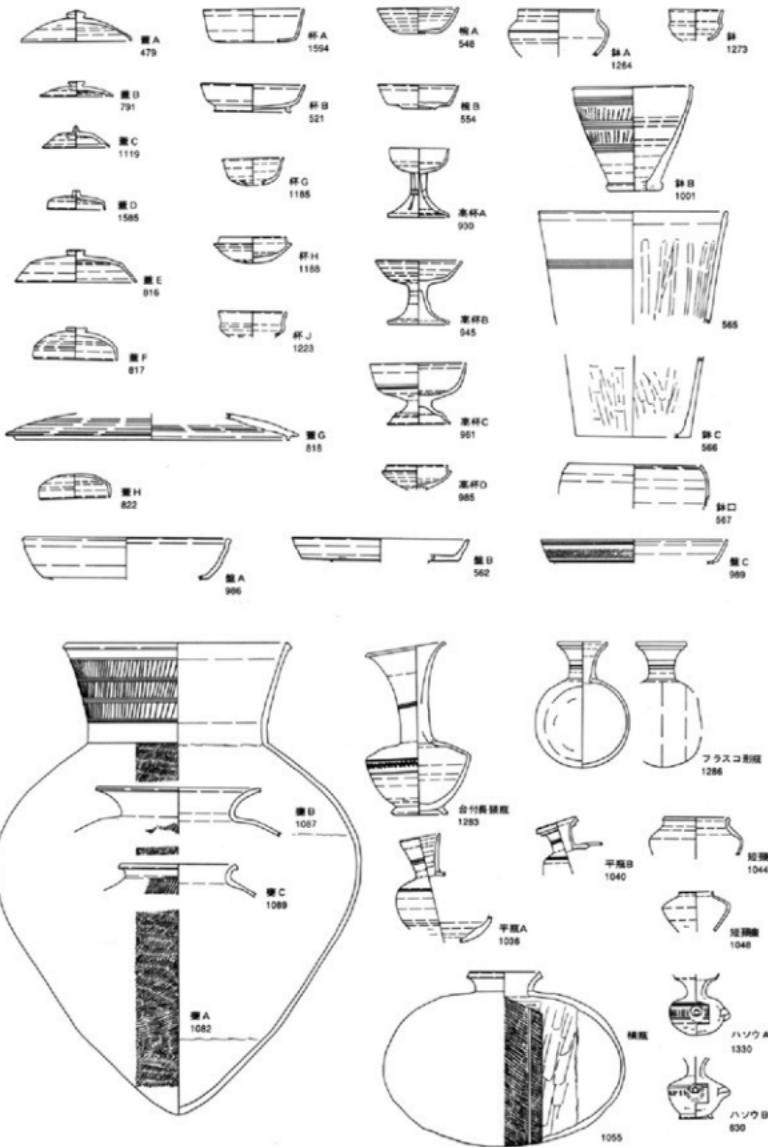


図 50 高針原 1号窯器種分類図

## 蓋の分類

## 蓋A

基本的には杯Bの蓋。大、中、小に区分できる。天井部には宝珠鉢を持ち、ここから丸みを帯びて口縁部に至る。口縁部は、端部調整技法B 2類により、短く屈曲して縁帯を形成する。法量により大、中、小に区分できる。

## 蓋B

基本的には杯Gの蓋。全体に小振りな器種で、蓋Aの小形とほぼ同一法量である。全体に蓋Aと類似するが、口縁部内面に突帯が巡り、かえり部を形成することが特色となる。端部は端部調整手法A 1類による。口縁部とかえり部の接地状況に着目すると、前者が接地して後者が接地しないもの、双方接地するもの、前者が接地せず後者が接地するものに区分できる。

## 蓋C

全体に蓋Bと類似する。数量は乏しい。天井部の鉢が円筒形となる。蓋Bに比較して、器高がやや高いことが特色。天井部で鈍く屈曲する体部と、かえり部から口縁部までがやや長い。

## 蓋D

数量は乏しい。円筒形の鉢と、口縁部付近で屈曲して端部を形成する体部を持つ。

## 蓋E

数量は乏しい。器高は高く、天井部で鈍く屈曲する。

## 蓋F

数量は乏しい。蓋Hの天井部に宝珠鉢が付くもので、小片ではこれと判別が困難となる。有蓋高杯の蓋。

## 蓋G

数量は乏しい。超大型の蓋をまとめる。法量や一部に黄土塗布も確認できることから蓋である可能性が高い。

## 蓋H

杯Hの蓋である。杯Hを天地逆にし、かえりを小さくした形状。

## 杯類

器高が低い偏平な器種を呼称する。外底部は基本的に底部調整技法Cによる。

杯 の 分 類      杯類は、体部などの形状の特徴から 5 類に分類する。

杯A

平底の杯をまとめる。基本的には無蓋。

杯B

高台を有する杯をまとめる。基本的には有蓋。蓋Aとセットか。一部に切り離し手法Bが確認できる。

杯G

丸底の杯をまとめる。杯Aとの区別が不鮮明となるが、概ね小振りで体部に丸みを帯びる。基本的には有蓋。蓋BまたはCとセットか。

杯H

いわゆる杯蓋。かえりをもつもので、丸底。有蓋で、古墳時代以来の伝統的器種。杯Hとセットとなる。

杯J

杯Hによく類似するが、受け部が外側に突出しないもの。鉢A、短頸壺と類似し、一部区分がこれと不鮮明となる。無蓋か。

椀 の 分 類      椭類

体部に丸みを帯びた平底で、外底部に切り離し手法Bの痕跡を無調整で残すものをまとめる。底部はやや突出する。周囲にのみ、手持ちケズリ調整を施す例もある。

楕類は、腰部の形状に注目して、2 類に分類する。

楕A

腰部に丸みの強いものをまとめる。

楕B

腰部に棱を持つものをまとめる。

高杯 の 分 類      高杯類

高い脚部に、杯部が付く器形を呼称する。杯部の外側下方には、底部調整技法Cが観察できる。

高杯類は、主に杯部の形状に注目して、4 類に分類する。

**高杯A**

杯部が杯H蓋を天地逆としたもの。杯部は細部までこれと類似し、小片ではこれと判別が困難となる。脚部は、杯部との接合部付近では柱状となる。この部分に穿孔によるスカシを付ける場合もある。一部は組み合わせ文C類となる。スカシは通常上下二段。これを対角線上に二か所設定するが、これが三か所となるものもある。なお、本窯では、上段のスカシが内面まで到達せず、外面に切り込みとして存在するものも多い。裾部は端部調整技法B 2類による。

**高杯B**

杯部は前述の杯AあるいはG。杯部は細部までこれと類似し、小片では判別が困難となる。脚部は上方が柱状に発達せず、ここにスカシは確認できない。法量により大、小に区分できる。裾部は、端部調整技法B 2類による。

**高杯C**

杯部が深く、丸みを帯びる類をまとめる。脚部は杯部に比較すると低く、裾部で屈曲する。法量により大、小に区分できるが、前者は一部にスカシが確認できる。

端部は、端部調整技法C類による。

**高杯D**

数量は乏しい。有蓋高杯で、杯部が杯Hと同様。脚部は残存例がないが、高杯Aの脚部と判断したものに、これが混在している可能性も考えられる。

**盤類****盤の分類**

皿状を呈する。偏平で一般的には大口径となる。基本的には黄土を塗布し、底部調整技法B類による底部を持つ。

盤類は、底部の形状に注目して、3類に区分する。

**盤A**

無台で平底の盤をまとめる。

**盤B**

脚を持つ盤をまとめる。法量により大、小に区分できる。

**盤C**

高台を持つ盤をまとめる。杯Bの口径を拡大した形状。有蓋か。

**鉢の分類** 鉢類  
 体部は、底部からほぼそのまま口縁部に至る単純な器形を呼ぶ。口径が広く深手となる。  
 鉢類は、体部や口縁部の形状に着眼して、4類に区分する。

**鉢A**

短頸壺に類似した直立する短い口縁部を持つ。ただし口径が広い。法量により大、小に区分できる。杯」や短頸壺と類似し、一部区分がこれと不鮮明となる。

**すり鉢・陶臼** 鉢B  
 極端に厚く特徴的な底部を持つ。体部は直線的。口縁部は端部調整技法B1による。すり鉢とか陶臼と呼称される器種。

**鉢C**

いわゆる壺で、体部がバケツ状を呈する。底部に穿孔が施される。

**磁 鉢** 鉢D  
 磁鉢ないし鉄鉢形土器と呼称されているもの。体部は丸みを帯び、口縁部付近で内彎する。口縁部は端部調整技法B1あるいはB2類。体部に沈線文を施す資料も含まれる。法量により大、小に区分できる。

**壺・瓶の分類** 壺・瓶類  
 いわゆる袋物のうち、頭部の細いものを呼称する。形態の特徴から6類に分類する。

**台付長頸瓶**

肩部で大きく屈曲する体部と、頭部から、直線的に開く長い口縁部を持つ。体部と頭部は、頭部三段接合技法による。肩部は稜を持って屈曲し、その直下に組み合わせ文Aを刻むことが多い。底部にはがっしりとした高台がつく。

**フラスコ形瓶**

偏平な球形の側面に細く短い口縁部がつく器形を呼称する。回転体ではない。体部と頭部は、頭部三段接合技法による。なお、肩部に粘土紐による把手が付く例や、底部に高台を付ける例もある。

フラスコ形瓶は口縁部の形状から2種に区分する。フラスコ形瓶Aは、口縁部に端部調整技法Cによる低い突帯が付く類である。また、フラスコ形瓶Bは、口縁部に、端部調整技法B1により縁帯を形成するものを呼ぶ。

**平瓶**

やはり回転体ではない。口縁部が中心からやや外れた位置に斜めに付くのが特徴的。切り離し手法Aが観察できるが、多くは回転ケズリ調整によりこれを整える。天井部には断面方形の粘土板による把手が付く例も認められる。

平瓶は口縁部の形状から2類に区分する。平瓶Aは口縁部が頭部から直線的に開く類。本窯出土の平瓶のほとんどがこれに含まれる。平瓶Bは、口縁部が端部調整技法B3類により縁帯を形成するもの。頭部は短い。なお、体部の形状に着眼すると、丸底の扁平球形と、平底の円柱形状に区分できる。両者は、底部の形状にも差異が認められ、前者は底部調整技法C類、後者は底部調整技法B類による。しかし、全形を伺える資料が乏しいため、器種細分の視点とはしていない。

**短頸壺**

短く直立する口縁部を持つものをまとめる。法量により大、小に区分できる。なお、前者には肩に耳部を四か所貼付するものもある。杯J、鉢Aと類似し、一部区分がこれと不明瞭となる。

**横瓶**

体部の側面に短い口縁部がつく器形を呼称する。体部は俵形で、器壁は厚い。体部と頸部は、頸部三段接合技法による。体部は、全面青海波ナデ消し技法。黄土塗布も確認できる。

横瓶は口縁部の形状から2類に区分する。横瓶Aは、口縁部に端部調整技法C類による低い突帯が付く類。横瓶Bは、口縁部に、端部調整技法B3類により縁帯を形成するものを呼ぶ。

**ハソウ**

体部中央の8mm前後の穿孔が特徴的な器種。円形または梢円形の体部と、細い頸部から大きく開く口縁部を持つ。頭部は、体部との接合部分が細い。口縁部付近で屈曲して、受け口状をなす。体部は、球形または卵形で、肩部がやや張る。最大径付近には組合せ文B1類を施す。穿孔は、文様帶中央部に位置する。全て穿孔部強調技法による。底部は底部調整技法C類。

ハソウは高台の有無で2種に区分する。ハソウAは、無高台のもの、ハソウBは有高台のものである。

**壺類****壺の分類**

いわゆる袋物のうち、頭部の太いものを呼称する。大形品。頭部外面下方を中心に黄土塗布が一般的となる。

壺類は、口縁部の形状から、さらに3類に区分する。なお、全形を伺える資料が乏しいため、器種細分の視点とはしていないが、底部の形状に着目すれば、丸底と平底に区分できる。前者が底部調整技法A類、後者は底部調整技法B 1類。

#### 壺A

大振りの器形。形態は、卵形の体部に大振りな口縁部が付く。口縁部は緩やかに外反し、端部は端部調整技法B 3類となる。体部は丸味を帯び、青海波ナデ消し技法。器壁は厚く10mm前後を有する。頸部は、内外面ナデ調整。頸部下部外面には組み合わせ文B類が認められる例もある。

#### 壺B

全形が判明する資料を得ていない。数量は乏しく、体部の形状は不明。壺Aと類似するのか。口縁部は短く外反し、端部は丸く縁帶を形成しない。端部調整技法A類による。

#### 壺C

小振りの壺。やはり全形が判明する資料を得ていない。数量は乏しく、体部の形状は不明。壺Bと類似するのか。口縁部は短く、端部は端部調整技法B 1類またはC類による。一部は鉢Aと類似し、区分がこれと不明瞭となる。

#### その他の器種

##### そのほかの器種

上記以外の形状を、そのほかの器類としてまとめる。

以下のものについて、器種が判明している。

#### 円面鏡

全形が判明する資料を得ていない。杯Bを、天地逆にしたような形状。上面は中央が突出し、いわゆる海部と陸部に区分される。側面には、スカシを設定している。

#### 陶管

やはり全形が判明する資料を得ていない。円筒形の大振りの器種。外面に黄土塗布が確認できる。

#### 陶錘

筋錘形を呈する陶錘。

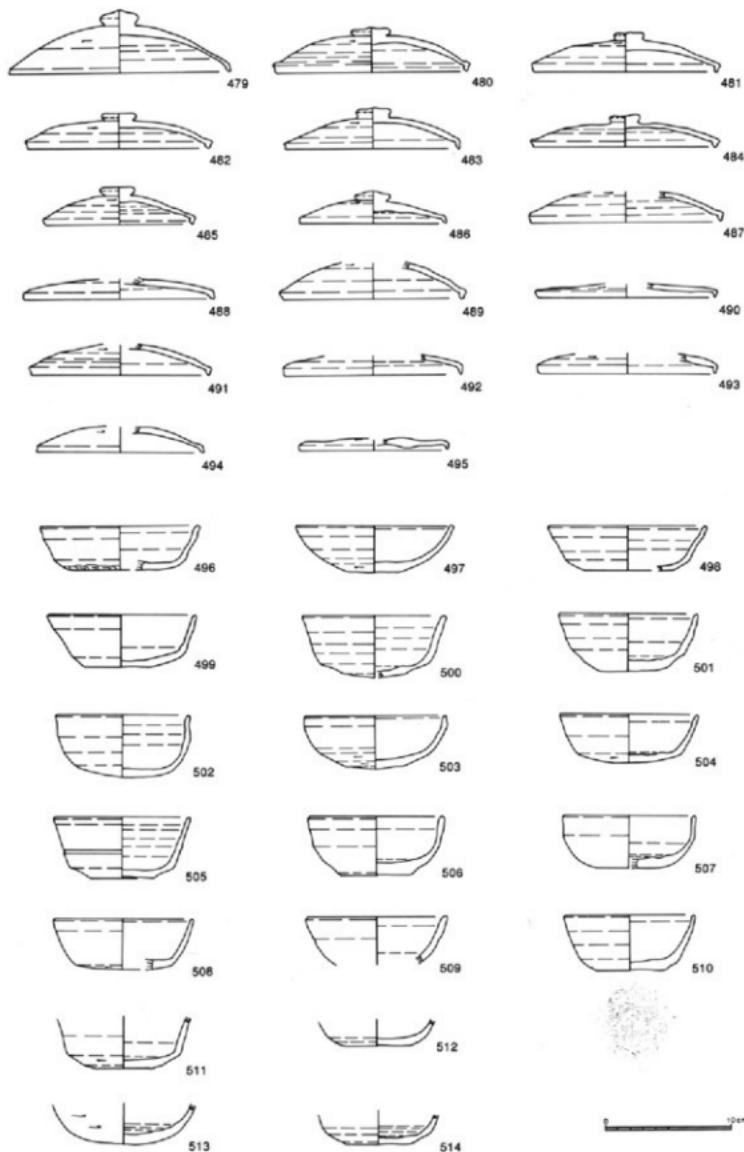


図51 高針原1号窯出土遺物1

## (2) 須恵器

SYO1 資料

SYO1 (図51～55－479～592)

図示した器種には蓋A、杯A・B、椀A・B、高杯B、盤A～C、鉢C・D、横瓶B、壺Aなどがある。なお、壁面改修時の貼り土中からは、杯Hも出土している。

479～495は蓋A。479～484、487、488、489、491、494は焼成不良となる。487～495は鉢を欠く。鉢は、低くつぶれた宝珠形を基本とするが、479はややこれが高い。後述する細分によれば、493が1類、488、490～492、494、495が2類、479～487、489は3類となる。

496～543は杯。498、500～502、505、506、509、511、514は焼成不良となる。502はひずむ。

496～514は杯A。511～514は口縁部を欠く。腰部に張りを有する小型品が多い。外底部は、底部調整技法C類を原則とするが、496、498は底部調整が、手持ちケズリ調整となっている。また、499～502、505、510、511は、切り離し手法C類のままで、調整が観察できない。なお、505は体部に二重沈線文を施す。

515～543は杯B。539～541は底部を、542、543は口縁部を欠く。法量により大型(口径17.0cm程度)、中型(口径15.5cm程度)、小型(口径13.5cm程度)と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形で、外側にやや張り出す。次に底部の状況に着眼すると、529、538、542、543は外面の回転ケズリ整形が若干ラフとなり、中央に直径数mm程度の範囲のみ、切り離し手法B類の痕跡が確認できる。基本的には底部調整技法B2類によるのか。なお、524、528、541は口縁部直下の外面に沈線文を施す。

544～556は椀。544、548、550～552、555は焼成不良となる。549、553はひずむ。

544～549は椀A。腰部に張りを有する形状。法量はほぼ類似する。549は口縁部に素地補修が確認できる。

550～556は椀B。555、556は口縁部を欠く。法量は、ほぼ類似するが、556のみ大振りとなる。腰部の屈曲は、550、551が明瞭、555は鈍い。

557、558は高杯B。557は焼成不良となる。558はひずむ。557は腰部に丸みを帯びた杯部と、やや太い脚部を持つ。558は脚部を欠く。杯部は、やはり腰部に丸みを持つ。

559～564は盤。563は焼成不良となる。564はひずむ。

559、560は盤A。いずれも器壁は厚い。口縁部は560が端部調整技法A1類、559が端部調整技法B1類による。

561～563は盤B。563は口縁部を欠く。561は全形が判明する。脚部は外側に直線的に伸びる。杯部に比較して器壁が薄い。端部は端部調整技法B3類による。

564は盤C。体部はひずむ。みこみに粘土板による十文字の仕切り部を持つ。仕切り部はラフなナデ調整で仕上げる。黄土塗布が顯著。

565～568は鉢。565、566は焼成不良となる。

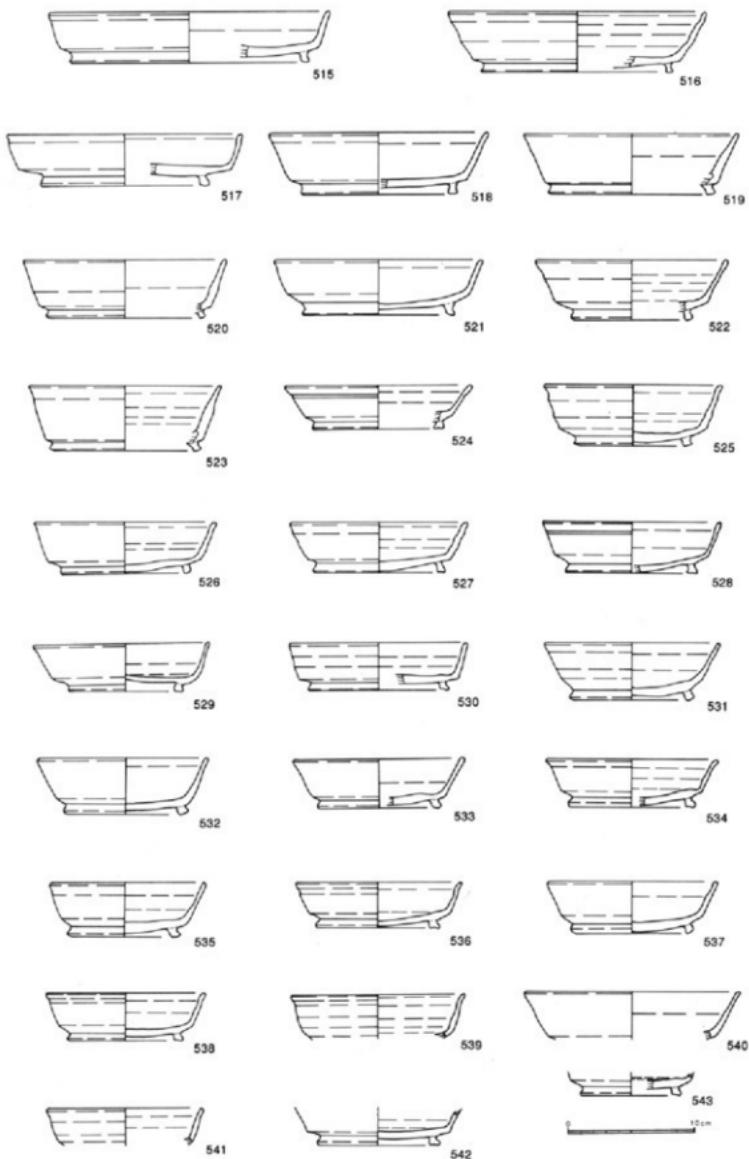


図52 高針原1号窯出土遺物2

565、566は鉢C。体部は直線的となる。565は外面に二重沈線文を施す。

567、568は鉢D。いずれも口縁部片。体部は丸みを帯びる。568は体部最大径付近に沈線文を施す。外面に黄土塗布の可能性を持つ。

569～576は壺・瓶。574～576はひずむ。

569は平瓶。肩部がやや張る形状。体部は丸みを帯びる。平底で底部調整技法C類による。

570～572、575、576は短頸壺。570～572、575は体部下方を欠く。570～572は小振り。肩部のやや張る形状。口縁部は、570、571が端部調整技法B 1類、572が端部調整技法A 1類。

575、576は同一個体。大振りで短く直立する口縁部を持つ。体部は青海波ナデ消し技法による。後者はややひずむ。平底で、底部調整技法B類による。571は体部最大径付近に沈線文を施す。572は肩に、細くて短い線刻を、弧状に並べる。

573、574は横瓶。前者は全形が判明する。いずれも横瓶B。頸部は短い。口縁部は端部調整技法B 2類による。体部は、長径方向で観察すると、最大径付近がやや尖り気味。短径方向ではこれが球形となる。頸部から沈線文を巡らす。574は口縁部片。頸部は太い。口縁部は端部調整技法B 3類による。

577～585は壺。583は焼成不良となる。

577～582は壺A。いずれも、頸部には組み合わせ文B 1類が確認できる。光埴文は、577が刻目文、578、579はオシビキ文、580～582が波状文となる。583～585は底部。全て平底となる。底部調整技法B 1類を原則とする。585は、外底部に木葉による圧痕が観察できる。

586、587は舟底ピット資料。いずれも蓋A。586はひずむ。587は瓶を欠く。

588～592は、盤面の貼り土から出土した資料。588、589は杯A。590は杯H。591は蓋H。後述する細分によれば、3類となる。592は平瓶か。平底となる。

#### 灰出レピット 資 料

##### 灰出レピット (図 56—593～631)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A・B・H、杯A・B、高杯B、鉢A・B・D、平瓶B、ハソウB、壺Cなどがある。

593～599は蓋。596はひずむ。

593～595は蓋A。593、594は器高が高い。鉢は低くつぶれた宝珠形となる。後述する細分によれば、594、595が1類、593が3類となる。

596は蓋B。鉢はボタン状。口縁部とかえり部の位置関係は、ほぼ同位置。

597～599は蓋H。いずれも口縁部の小片で、天井部を欠く。後述する細分によれば、597、598が2類、599が3類となる。

600～622は杯。600、605は焼成不良となる。618はひずむ。

600～603は杯A。

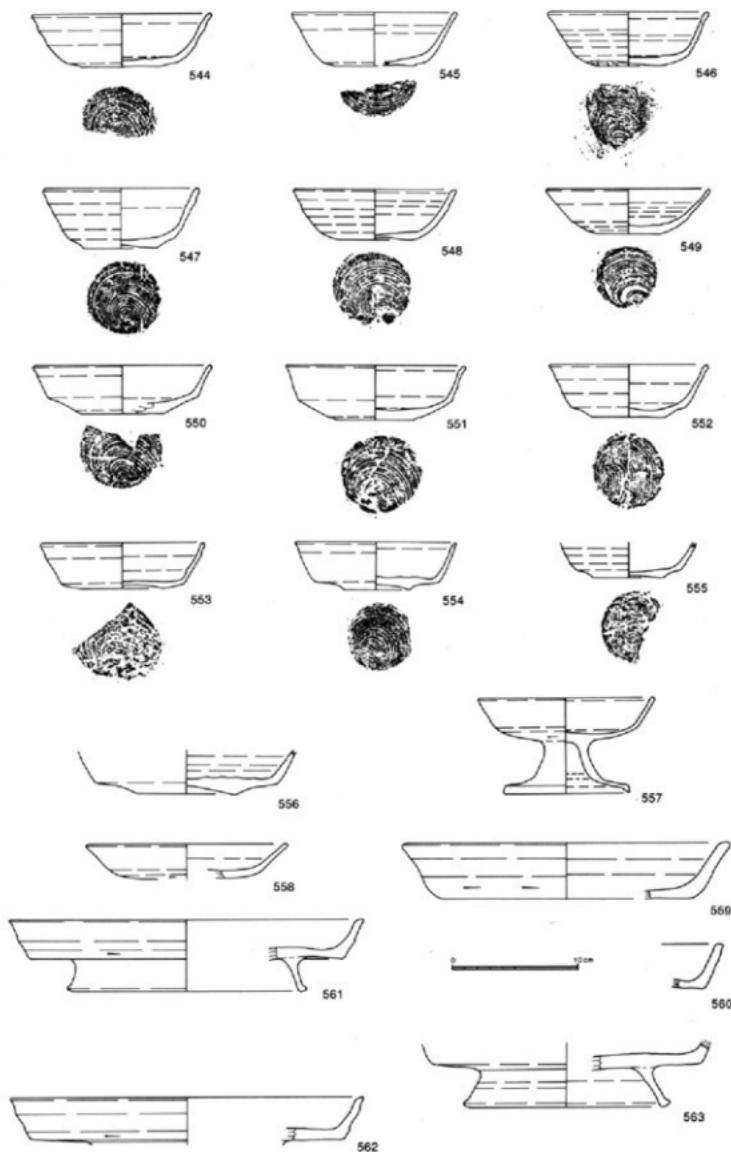


図53 高針原1号窯出土遺物3

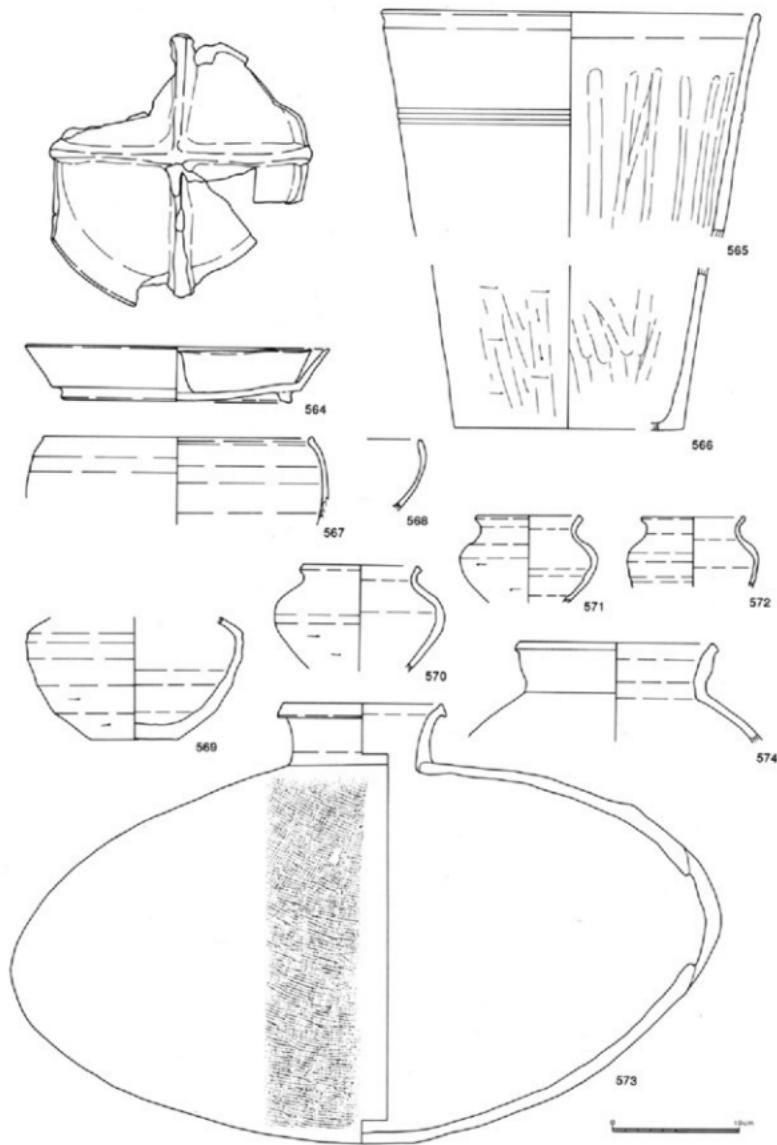


図 54 高針原 1号墓出土遺物 4

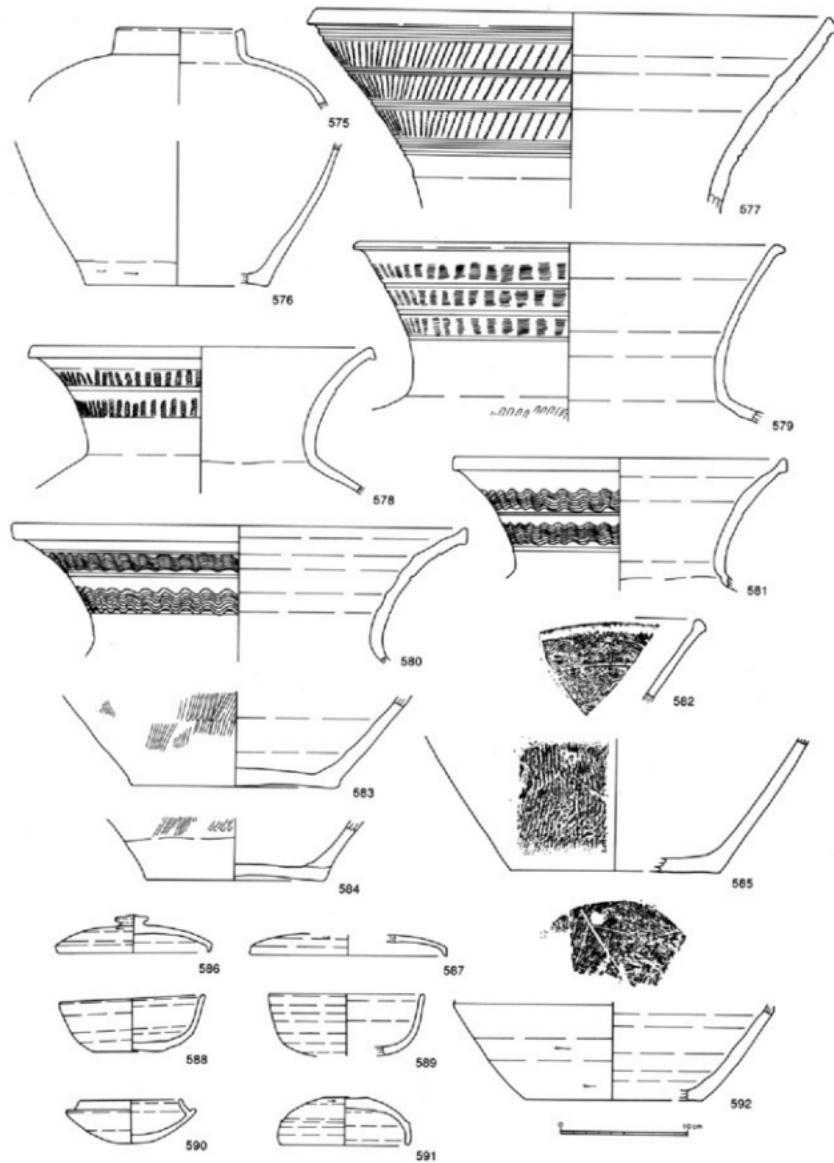


図 55 高針原 1 号窯出土遺物 5

604～622は杯B。615～622は口縁部を欠く。622は小型。高台は断面台形。法量により大型、中型、小型に区分できる。腰部の形状は、607、609、614、619が後を持って屈曲するが、604、605、608、610～613、616、620、622はこれが明瞭ではない。606、615、617、618、621は丸みを帯びる。

623は高杯B。口縁部を欠く。杯部はやや大振りか。脚部は接合部分が細い。

624～627は鉢。

624は鉢A。口縁部の小片。体部下方を欠く。肩部がやや張る形状。口縁部は直立。端部調整技法B 1類による。後述する細分によれば、4類となる。

625、626は鉢B。いずれも底部を欠く。625は、器高がやや高く、器壁が薄い。626は、器高がやや低く、器壁が薄い形状。

627は鉢D。口縁部片。外面に沈線文を施す。

628～630は壺・瓶。

628、629は平瓶B。628は口縁部片。頸部に沈線文を施す。629は把手片。粘土板を手持ちケズリ調整で整える。上面は黄土塗布が確認できる。

630はハソウB。口縁部を欠く。体部は、肩がやや張るが、全体としてはやや丸みを帯びる。体部の組み合わせ文Aは下方の沈線文が欠落する。

631は壺C。口縁部片。端部調整技法B 1類による。

#### SD01 資料

##### SD01 (図57-632～659)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯A・B、高杯B、鉢A、フラスコ形瓶、平瓶A、横瓶B、ハソウBがある。

632～637は、蓋A。635はひずむ。636、637は鉢を欠く。632はやや大振り。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、632はボタン状。後述する細分によれば、633、634、636が1類、632・635が2類、637が3類となる。

638～644は杯。640は焼成不良となる。

638～642は杯A。いずれも小振り。641は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。

643、644は杯B。後者は腰部の屈曲がやや鈍い。

645～648は高杯B。645～647は焼成不良となる。645は器高がやや高く、646は低い。647、648は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

649、650は鉢A。いずれも体部下方を欠く。前者は小振り。口縁部は直立する。端部調整技法A 1類。後者は大振り。口縁部がやや外反する。端部調整技法A 1類。体部は青海波ナデ消し技法による。

651～657は壺・瓶。

651はフラスコ形瓶。口縁部片。外面に自然釉が厚くかかり、詳細は不明だが、頭部外

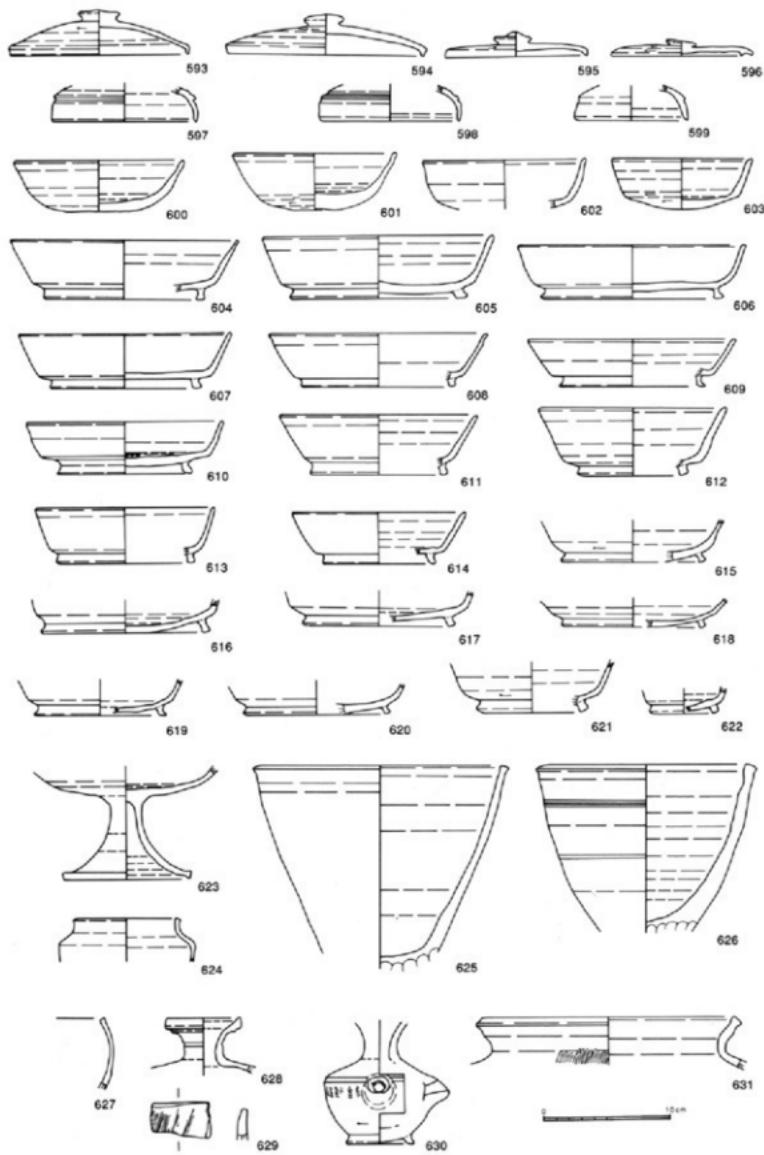


図56 高針原1号窯出土遺物6

面に沈線文を施すかもしれない。

652～655は平瓶。652は口縁部を欠く。大振りな器形で平底。肩部が稜を持つ形状。体部上面に、刻書が確認できる。「瓦」と判読できるのか。653～655は口縁部片。いずれも平瓶Aとなる。

656、657は短頸壺。656は体部下方を、657は口縁部を欠く。なお、657の体部最大径付近には、二重沈線文が確認できる。

658は横瓶B。頭部は厚く、鈍く外反する。

659はハソウB。口縁部を欠く。体部は、肩がやや張るが、全体としてはやや丸みを帯びる。体部の組み合わせ文A類は下段の沈線文が省略される。

SD02 資料

SD02 (図57－660～671)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A・杯A・B・J・高杯B・フラスコ形瓶B・ハソウがある。

660、661は蓋A。いずれも鉢を欠く。後述する細分によれば、1類となる。

662～665は杯。

662、663は杯A。662は口縁部を、663は底部を欠く。663はひずむ。

664は杯B。ややひずむ。腰部は稜をもって屈曲する。

665は杯J。底部を欠く。口縁部がやや長く、外反する。

666～669は高杯B。666は焼成不良となる。器高が低く、やや扁平気味となる。667～669は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

670はフラスコ形瓶B類。頭部がやや太い。頭部に二重沈線文を施す。

671はハソウ。口縁部片。屈曲部分の稜が、やや鋒い。後述する細分によれば、2類となる。

SK01 資料

SK01 (図57－672、673)

資料は乏しい。図示した器種には杯H・鉢Aがある。

672は杯H。底部を欠く。後述する細分によれば、1類となる。

673は鉢A。やはり底部を欠く。体部はやや扁平。器壁は薄く、口縁部はやや長い。体部の最大径付近に二重沈線文、口縁部内面に沈線文を施す。後述する細分によれば、1類となる。

灰層I群資料

灰層I群 (図58－674～727)

資料は乏しい。図示した器種には、蓋A～C・H、杯A・B・G・H・J、高杯A・B、フラスコ形瓶B、平瓶、短頸壺、横瓶B、ハソウ、壺A・Bがある。

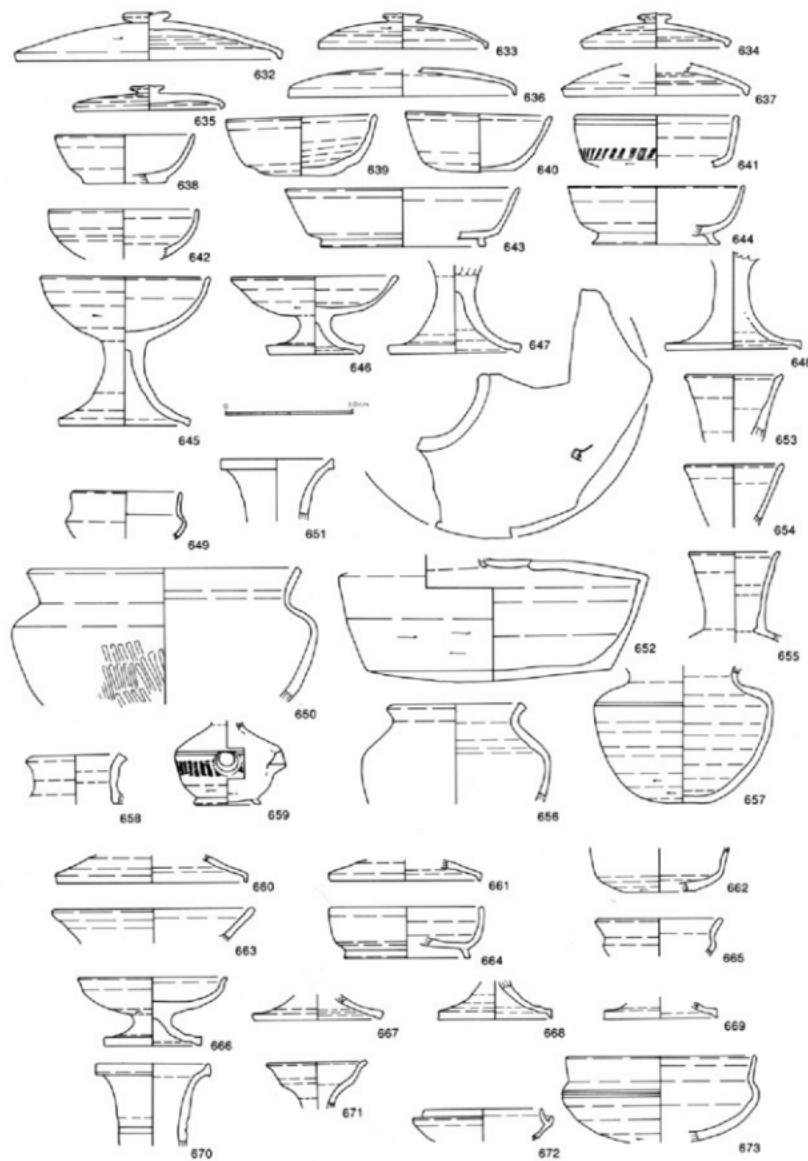


図57 高針原1号窯出土遺物7

674～694は、蓋。682は焼成不良となる。680はひずむ。

674～687は蓋A。683～687は鉢を欠く。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、674、675、680、682はボタン状、679は最大径が上部にある逆円錐台形となる。後述する細分によれば、675、676、678、679～682、684・686・687が1類、674、677、685が2類、683が3類となる。

688～689は蓋B。鉢はボタン状。口縁部とかえり部の位置関係は、いずれもほぼ同位置となる。

690は鉢を欠く。蓋BないしCか。やや大振り。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部がやや突出する。

691、692は蓋C。天井部片で、鉢は小さく丸みを帯びる。

693、694は蓋H。口縁部小片で、天井部を欠く。後述する細分によれば、3類となる。

695～712は杯。699は焼成不良となる。708はひずむ。

695は杯A。底部を欠く。

696～704は杯B。701～704は口縁部を欠く。703、704はやや小振り。法量により中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。外側に張り出す。702は高台より底部が下に突出する。704は高台の内面に、直径1mm程度の貫通しない穿孔が1か所確認できる。

705～708は杯G。708は底部がやや突出する。

709～711は杯H。いずれも底部を欠く。710、711は扁平。後述する細分によれば、709が2類、710、711が3類となる。

712は杯J。やはり底部を欠く。器壁はやや厚く、屈曲も鈍い。

713～716は高杯。いずれも杯部を欠く。713、714が高杯A、715、716が高杯Bか。713は、脚部下方にスカシ文が3か所、瓶部に沈線文が施される。

717～723は壺・瓶。719は焼成不良となる。

717はフラスコ形瓶B。口縁部片。頸部がやや長い。頸部に沈線文を施す。

718は平瓶。体部の上面の破片で、手持ちケズリ調整による断面長方形の把手が付く。

719、720は短頸壺。719は平底。体部はやや丸みを帯びる。口縁部は短く直立し、端部は玉縁状を呈する。720は口縁部片。口縁部は端部調整技法B 1類による。

721、722は横瓶B。いずれも口縁部片。721は器壁が厚い。頸部は太い。鈍く外反する形状。

723はハソウ。口縁部片。後述する細分によれば、3類となる。

724～727は壺。

724、725は壺A。いずれも、頸部には組み合わせ文B 1類が確認できる。充填文は、724が刻目文、725が波状文となる。

726は壺B。口縁部片。口縁部は長い。強く外反する。

727は壺C。やはり口縁部片。口縁部は強く外反する。端部調整技法B 1類による。

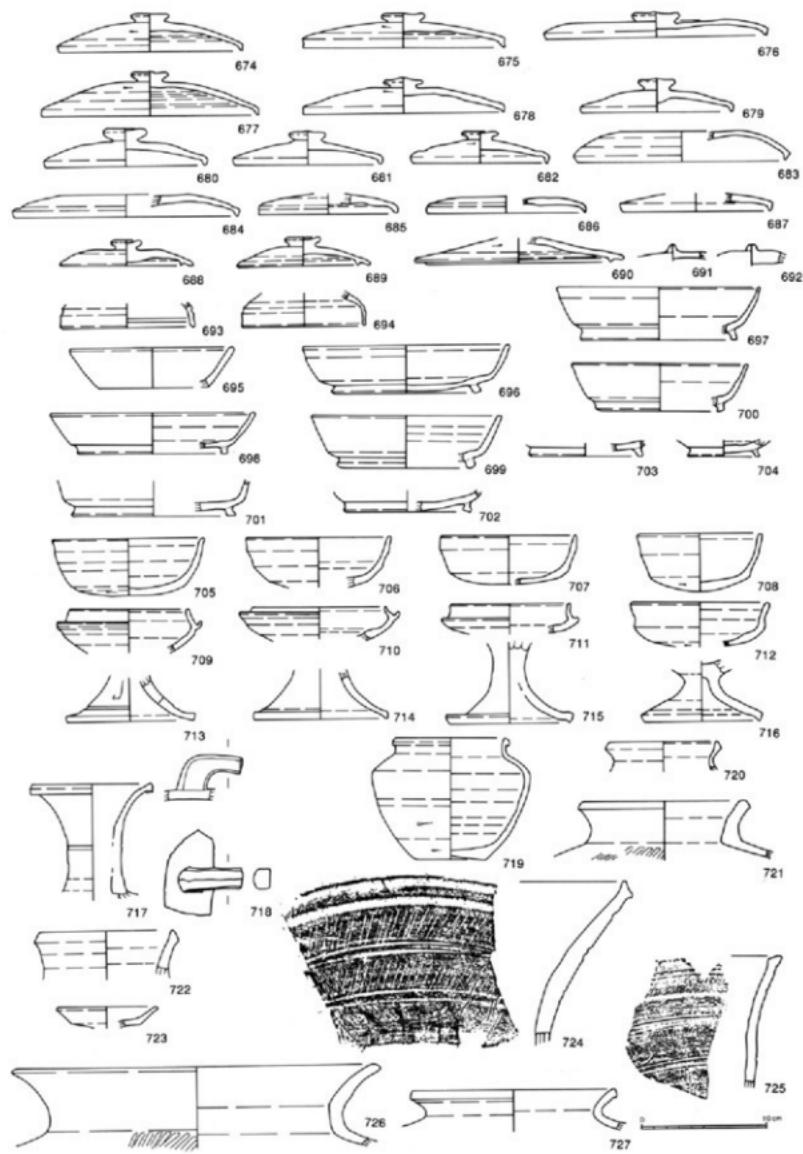


図58 高針原1号窯出土遺物8

## 灰層 II 群 灰層 II 群 (図 59 ~ 69 - 728 ~ 1096)

図示した器種には蓋 A ~ C、H、杯 A · B · G · H · J、高杯 A ~ D、盤 A ~ C、鉢 A ~ D、台付長頸瓶、フラスコ形瓶 A · B、平瓶 A · B、短頸壺、横瓶 A · B、ハソウ A · B、壺 A ~ C、陶鍊などがある。

728 ~ 846 は、蓋。734、757、788、802 は焼成不良となる。731、743、744、774、801、808 はひずむ。

728 ~ 787 は蓋 A。769 ~ 787 は鉢を欠く。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、744、746、765 はやや高く、745、766、767 はボタン状となる。後述する細分によれば、729、730、732 ~ 734、737、738、742、744、745、747 ~ 754、756、757、760 ~ 770、772、773、776、778、783 ~ 787 が 1 類、728、731、735、736、739 ~ 741、743、755、758、759、771、774、775、777、779 ~ 782 が 2 類、746 が 3 類となる。

788 ~ 800 は蓋 B。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、791、795、797、799 はボタン状に、798 は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。口縁部とかえり部の位置関係は、788、789、798 はかえり部が高位置、792 ~ 795 はほぼ同位置、790、791、796、799 はかえり部がやや突出する。797 はかえり部が痕跡的となる。

801 ~ 804 は蓋 C。口縁部とかえり部の位置関係は、802 はかえり部が高位置、803 はかえり部がやや突出する。802 はかえり部が痕跡的となる。

805 ~ 814 は鉢を欠く。蓋 B または C か。814 は天井部外面に環状刻目文を施す。口縁部とかえり部の位置関係は、806、807、811、813、814 はかえり部が高位置、809、810 はほぼ同位置、805、808、812 はかえり部がやや突出する。

815 は蓋 D、鉢を欠く。天井部から稜を持って屈曲して口縁部を形成する。

816 は蓋 E。器壁は薄く、器高は高い。鉢は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。天井部外面には陰灰が厚く覆い、詳細は不明確。

817 は蓋 F。蓋 H 2 類の天井部外面に鉢を付けた形状。鉢はボタン状。

818 は蓋 G。蓋 B または C を大型にしたもの。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部が突出する。

819 ~ 846 は蓋 H。844 ~ 846 は小型。821、822、824 は、口縁部内面に沈線文を施す。後述する細分によれば、819、820、826、827 が 1 類、822、824、825、828、832、843 が 2 類、821、829 ~ 831、833 ~ 839、841、842、844 ~ 846 が 3 類となる。

847 ~ 927 は杯。853、860、871、878、923、927 は焼成不良となる。895、925 はひずむ。

847 ~ 866 は杯 A。法量や形状はばらつく。865 は体部中央に二重沈線文、866 は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。いずれも底部調整技法 B 2 類または C 類だが、850 は切り離し手法 C 類を未調整で残す。なお、856 は蓋 A の口縁部片が軸着している。

867 ~ 884 は杯 B。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。883、884 は、やや深手となる。高台は断面台形。外側にや

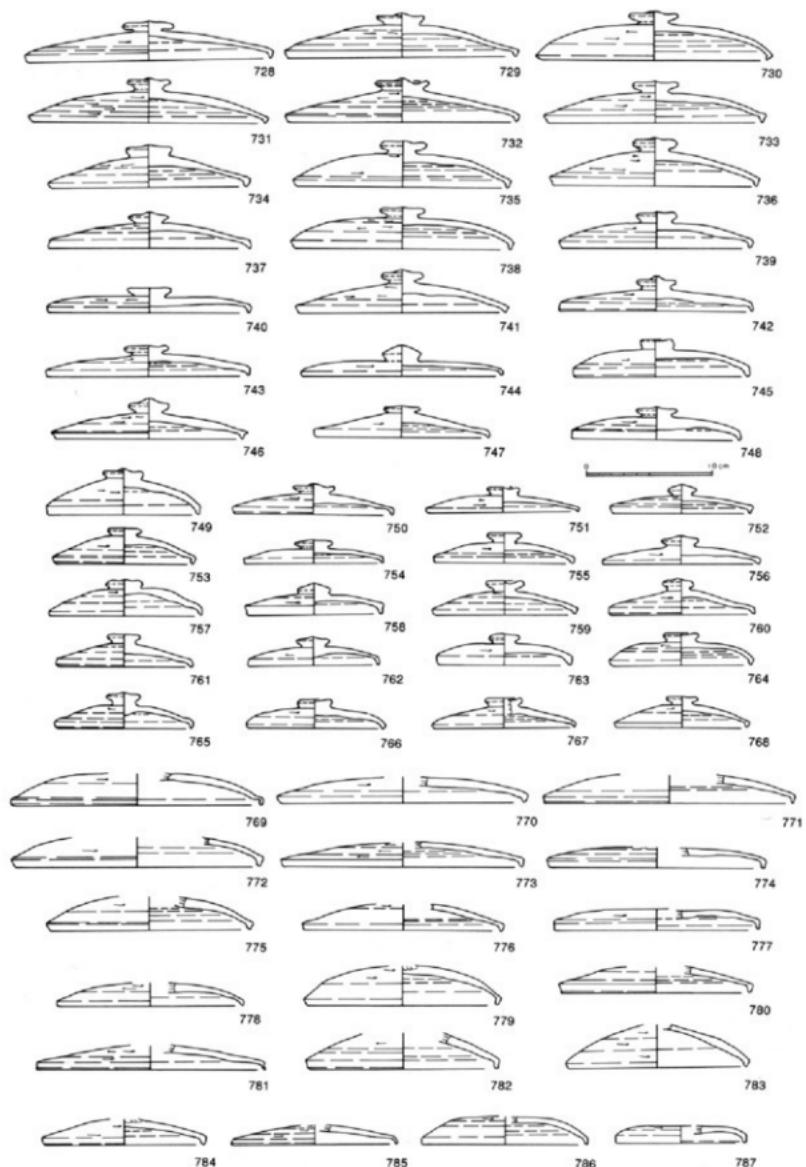


図59 高針原1号窯出土遺物9

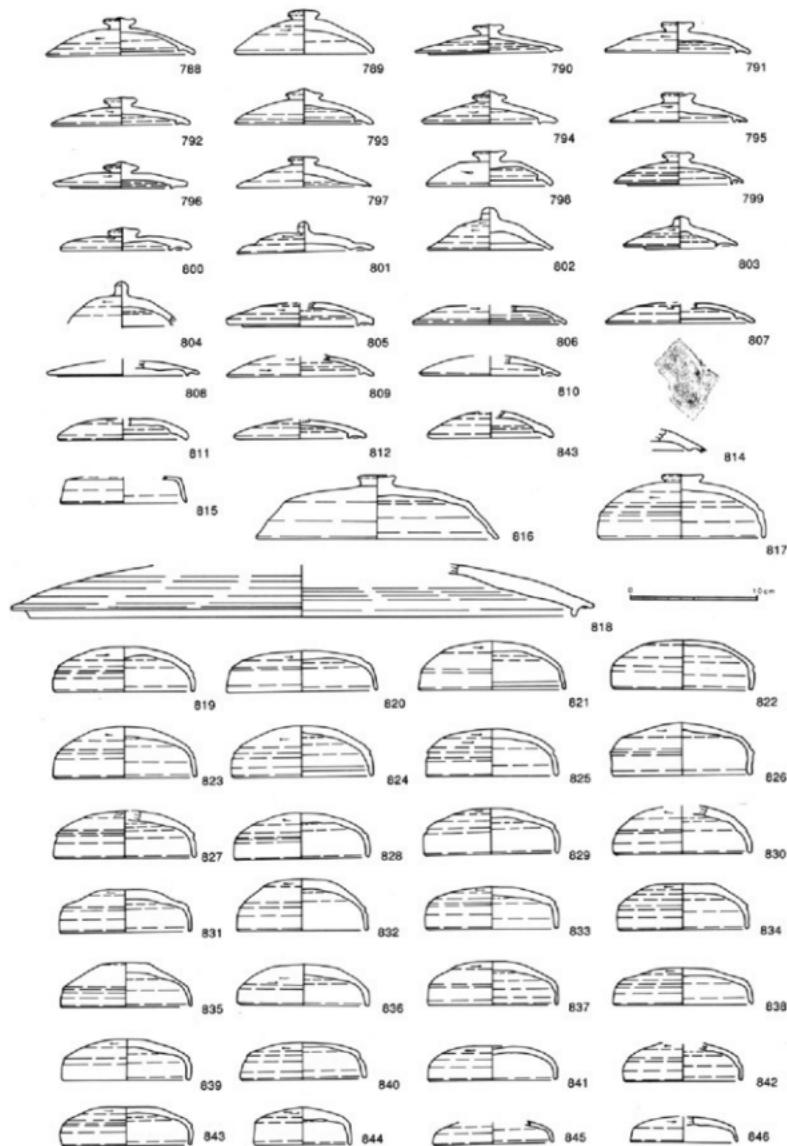


図 60 高針原 1号窯出土遺物 10

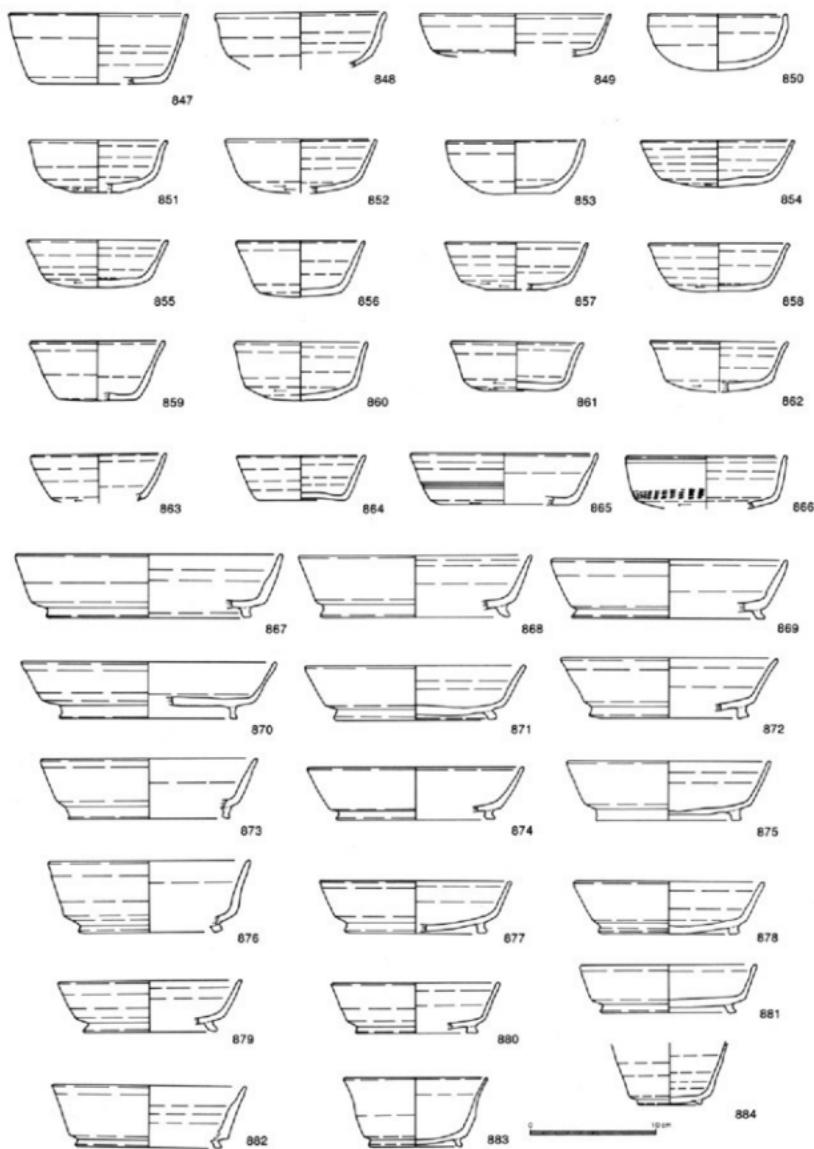


図61 高針原1号窯出土遺物11

や張り出す。腰部は、867～872、874、875、877、881～884が棱を持って屈曲するが、873、876、878～880はこれが不鮮明となる。

885～892は杯G。法量や形状はばらつく。890、892は体部中央に沈線文を施す。892はこれが二重沈線文となり、口縁部内面にも沈線文を施す。

893～926は杯H。後述する細分によれば、915、920が1類、894～902、904～910、912、913、916、918、919、922、926が2類、903、911、914、917、921、923～925が3類となる。

927は杯J。口縁部は外反する。

928～985は高杯。951は焼成不良となる。962、967はひずむ。

928～943は高杯A。脚部が比較的長く、杯部が小振りである資料が多いが、932、935は比較的短脚で、杯部がやや深い。スカシ文は928～931に確認できる。二か所を基本とするが、930は三か所となる。929を除き二段だが、いずれも上段が切り込み状となる。なお、928、930、931は組み合わせ文C類となる。

940～943は脚部片。一応、高杯Aに分類した。脚部にはいずれもスカシ文が確認できる。上段のスカシは940が貫通し、941、942は切り込み状となる。

944～948は高杯B。948は口縁部を欠く。944、945、948は器高が高く、946、947はこれが低い。

949～960は脚部片。一応、高杯Bに分類した。955、958は、二重沈線文を施す。

961～983は高杯C。965～973は脚部を、974～983は杯部を欠く。杯部には962、963、967、972を除き二重沈線文を施す。972はこれが突帯となる。974～976に脚部にはスカシ文が確認できる。いずれも組み合わせ文C類となる。

985は高杯D。基本的には杯H 1類との差異を確認することができない。底部外面に脚部の剥離した痕跡が認められる。

986～989は盤。989はひずむ。

986、987は盤A。口縁部はいずれも端部調整技法B 1類による。986は黄土塗布が確認できる。

988は盤B。脚部を欠く。

989は盤C。口縁部直下に二重沈線文、腰部に沈線文を施し、中央を波状文で充填する。腰部の屈曲は強い。

990～1014は鉢。1002、1010は焼成不良となる。1009はひずむ。

990～1000は鉢A。990～992が大型、993～1000が小型となる。997はやや器高が低い。いずれも体部はやや張る。口縁部の形状は、990、992、993、995、997が直立、991、998が内傾、994、996、999が外反する。991、992、994は、体部の最大径付近に沈線文を施し、1000はこれが二重沈線文となる。後述する細分によれば、990が1類、991が3類、992が2類となる。

1001～1008は鉢B。1002～1004は底部を欠き、1005～1008は底部片となる。1004はやや小振りか。1001は体部外面に組み合わせ文Bを施す。充填文は刻目文となる。1002～1004

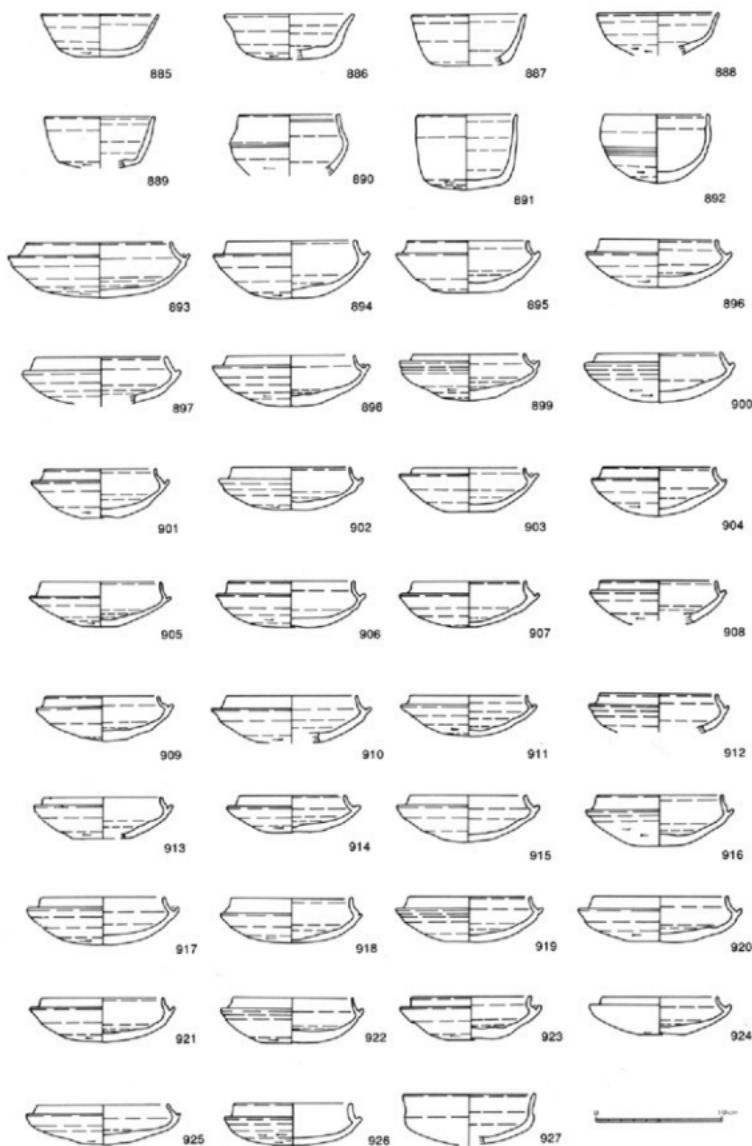


図62 高針原1号窯出土遺物12

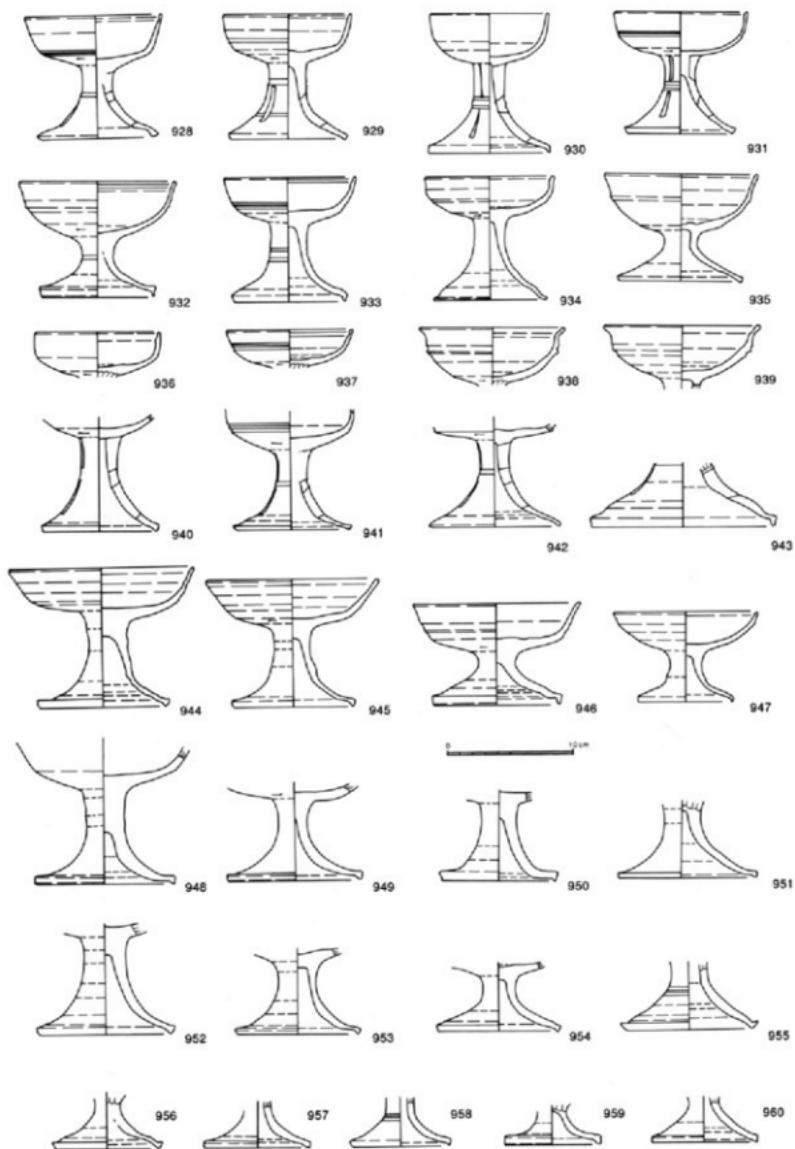


図 63 高針原 1 号窯出土遺物 13

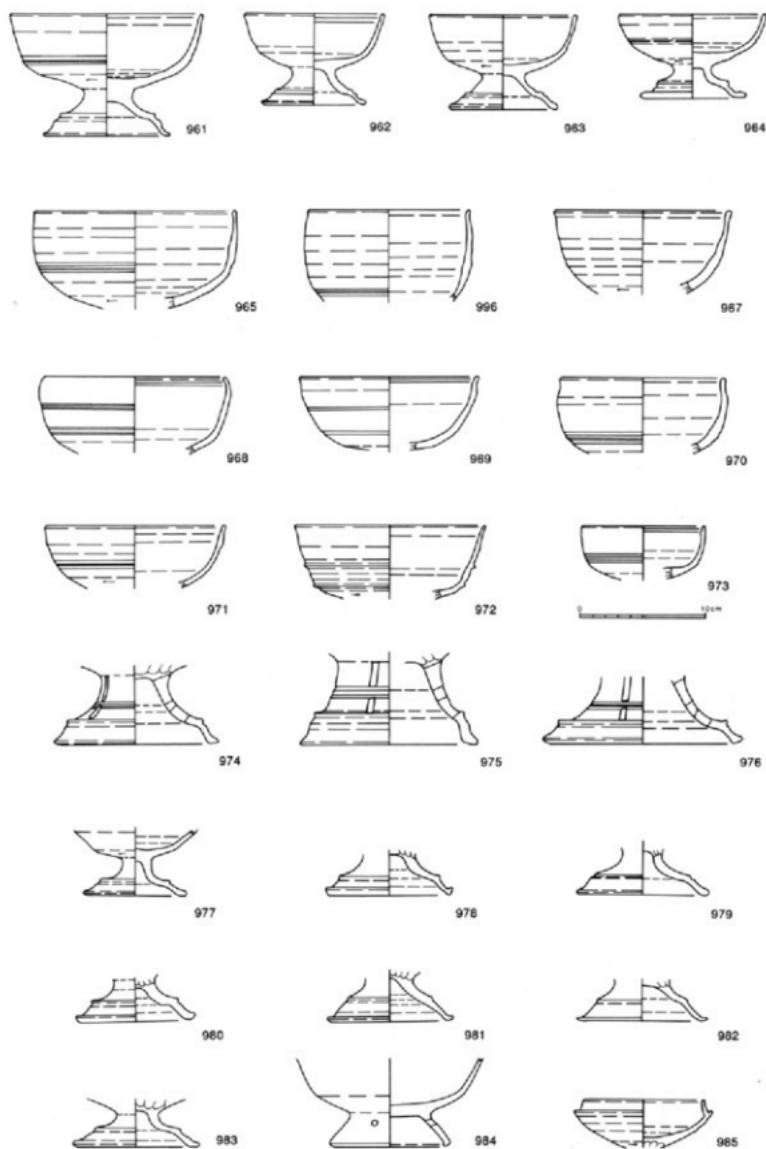


図 64 高針原 1号窯出土遺物 14

は、体部外面に沈線文と二重沈線文を一定間隔で積む。

1009、1010は鉢C。1009は口縁部片。体部外面に二重沈線文を二段施す。1010は底部片。

1011～1014は鉢D。いずれも口縁部片。1013は外面に沈線文を施す。

1015～1081は壺・瓶。1048、1067はひづむ。

1015～1020は台付長頸瓶。1015、1016は口縁部片。1015は頸部が長く、中央には二重沈線文を施す。1017は体部片。肩部の張りはやや鈍く、棱が確認できない。外面は黄土塗布か。1018～1020は、台部。いずれも外側に張り出す。侧面には、方形のスカシ文が確認できる。1018、1019は三か所。1020は小片のためこれが不明。

1021～1035はフラスコ形瓶。1021～1034は頸部片、1035は体部片。1021～1026、1029はフラスコ形瓶Aで、1027、1028、1030～1034はフラスコ形瓶B。1027～1029は頸部がやや短い。1024、1031を除き、頸部中央に二重沈線文を施す。1035は体部中央に環状刻目文を円形の沈線文で囲む。

1036～1041は平瓶。1036～1039が平瓶A、1040は平瓶B。1036、1037、1040は体部が一部残存するもので、肩は丸みを帯びる。1037、1039、1040は体部と頸部に、1038は頸部に二重沈線文を施す。1041は体部片。平底で、肩部に棱を持つ。

1042～1048は短頸壺。1042～1046は大型、1047、1048は小型。体部は丸みを帯びるが、1047、1048は最大径部分で張る。1042は青海波ナデ消し接法を施す。

1052～1057は横瓶。1052～1054が横瓶A、1055～1057が横瓶B。1055は全形が判明する。頸部は短い。口縁部は外反し、端部調整技法B 2類。体部は、青海波ナデ消し接法。長径方向で観察すると梢円形、短径方向では球形となる。頸部から沈線文を巡らす。

1059～1079はハソウ。1059～1069は口縁部片。1059は素地補修、1067は頸部に沈線文が確認できる。後述する細分によれば、1059～1062、1064、1067が1類、1063、1066、1069が2類、1065、1068が3類となる。1070～1078は体部片。1070～1077は丸底でハソウA。体部はやや肩が張る球形。1070は、体部に施される組み合わせ文Aの下段沈線文がやや弱い。1075はこれがややつぶれる。1078、1079は有高台でハソウB。1078は肩の張る形状。体部下方は丸みを帯びる。1079は底部片。

1082～1090は壺。

1082～1086は壺A。1082は全形の判明する資料。体部上方は丸みを帯び、下方ではほぼ直線的に底部に至る。底部は疑尖底となる。底部調整技法Cによる。頸部は外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は刻目文となる。1083から1086は口縁部片。いずれも外面に組み合わせ文を施し、1083がB 2類、1084～1086がB 1類。充填文は1083、1085が刻目文、1084がオシビキ文、1086が波状文となる。

1087、1088は壺B。いずれも口縁部片。頸部は長い。

1089、1090は壺C。やはり口縁部片。1090は端部調整技法C類。

1091、1092は陶鍾。紡錘形を呈する。いずれもナデ調整によるが、小口部は手持ちケズリ調整。孔部の直径は、いずれも5.0 mm、重量は1091が39.2 g、1092が34.9 gをはかる。

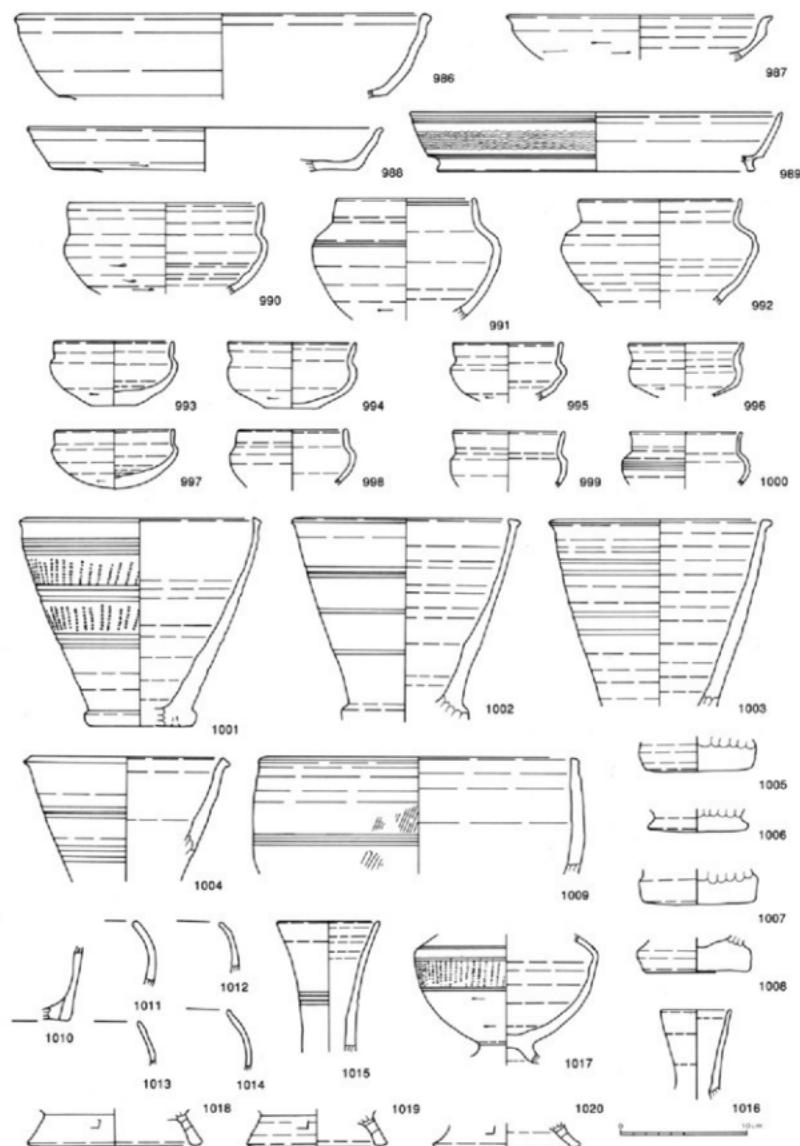


図65 高針原1号窯出土遺物15

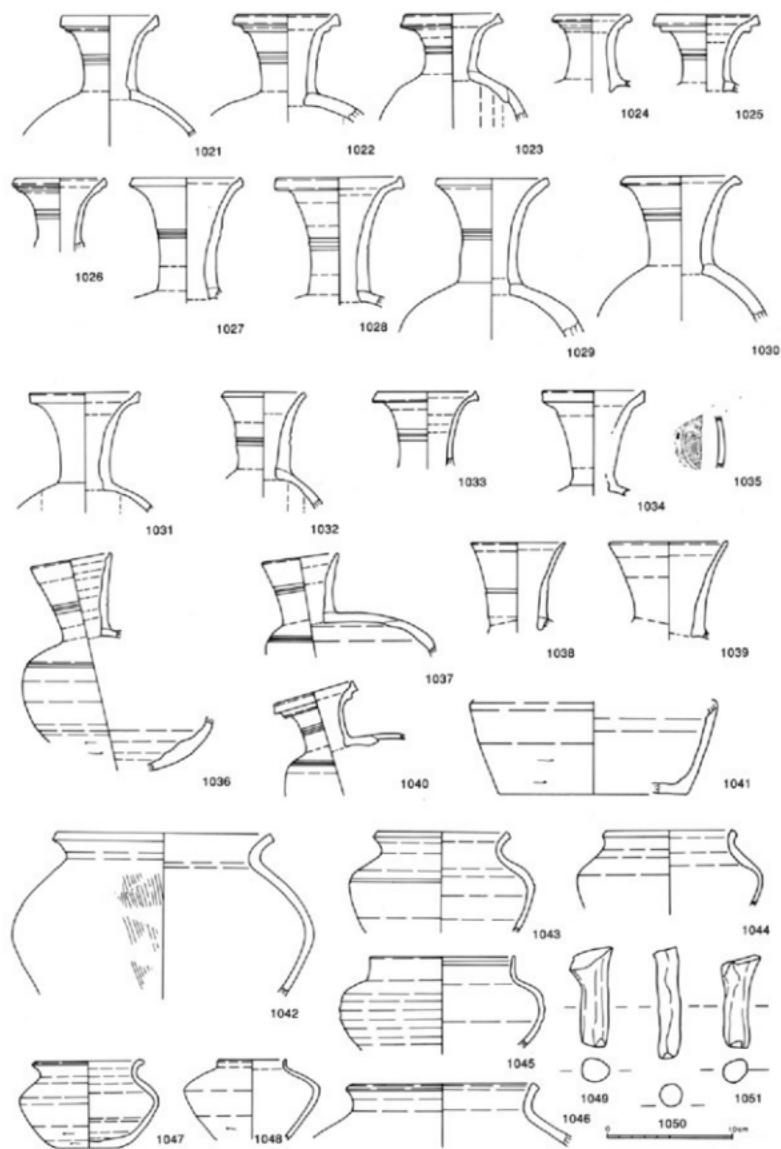


図66 高針原1号墓出土遺物 16

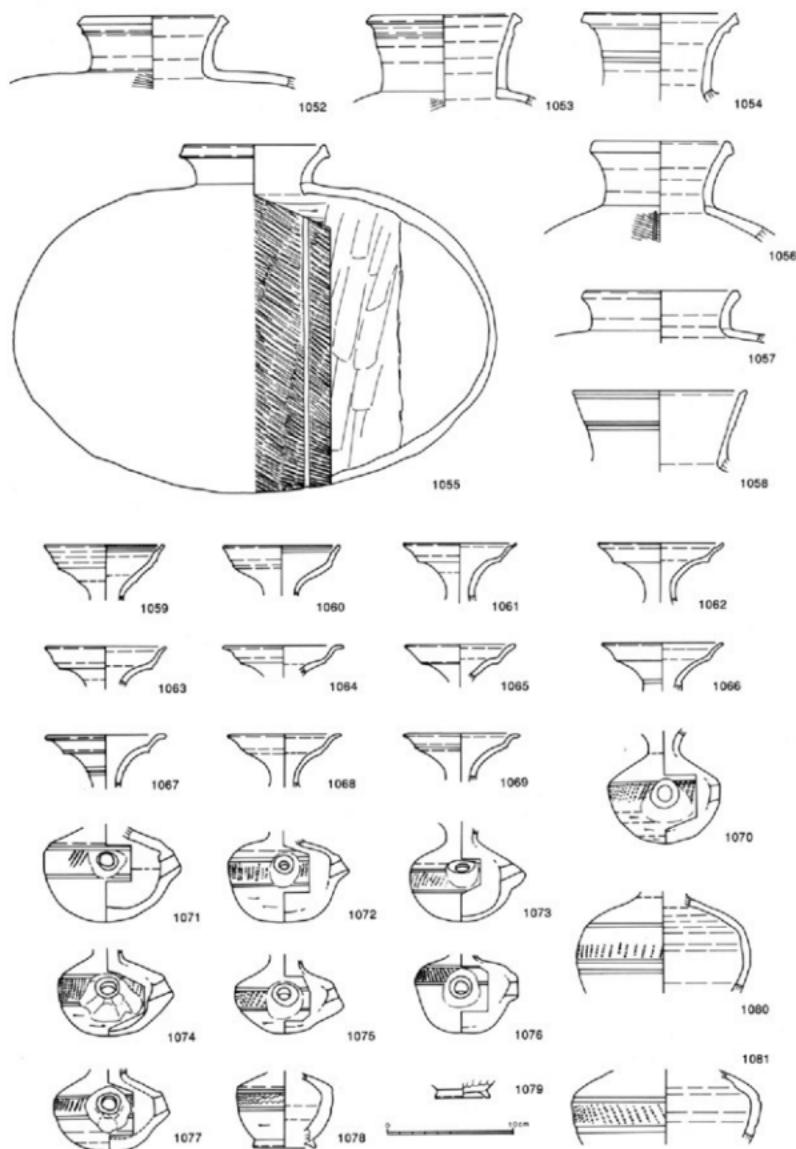


図67 高針原1号窯出土遺物17

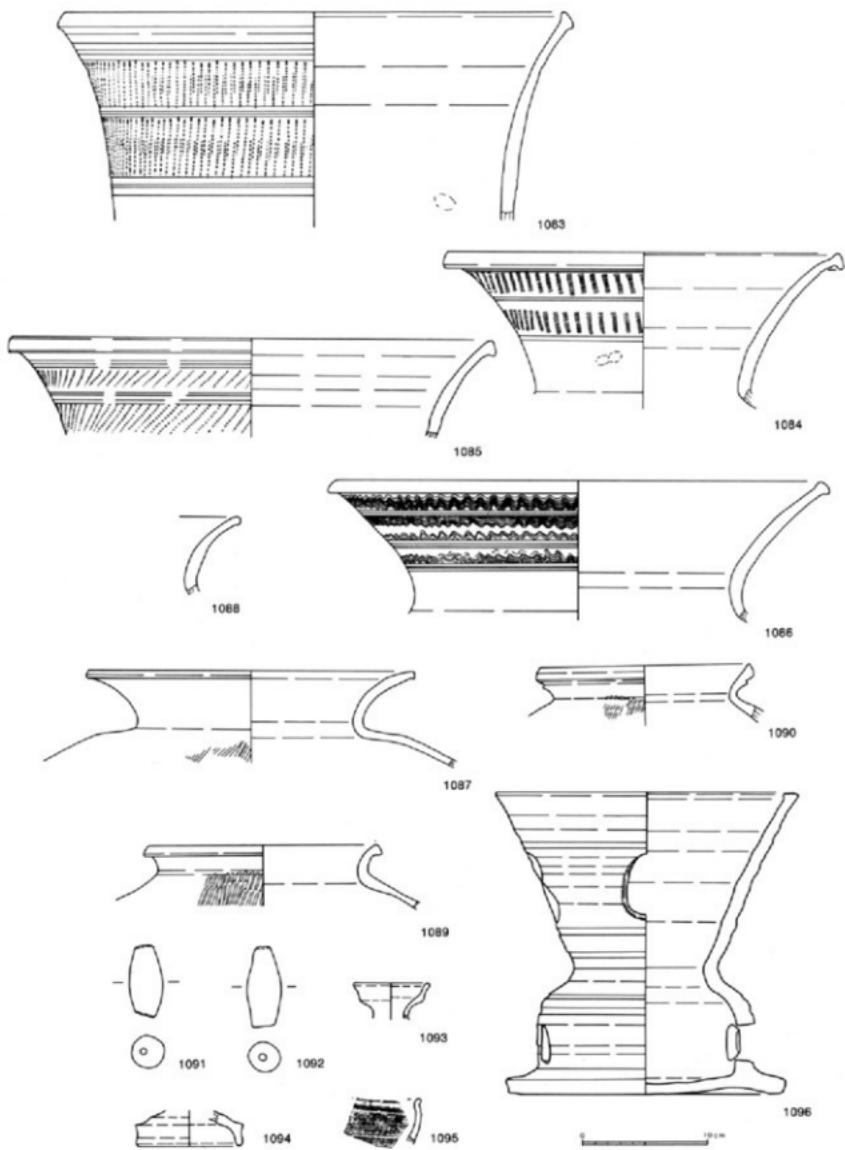


図68 高針原1号窯出土遺物18

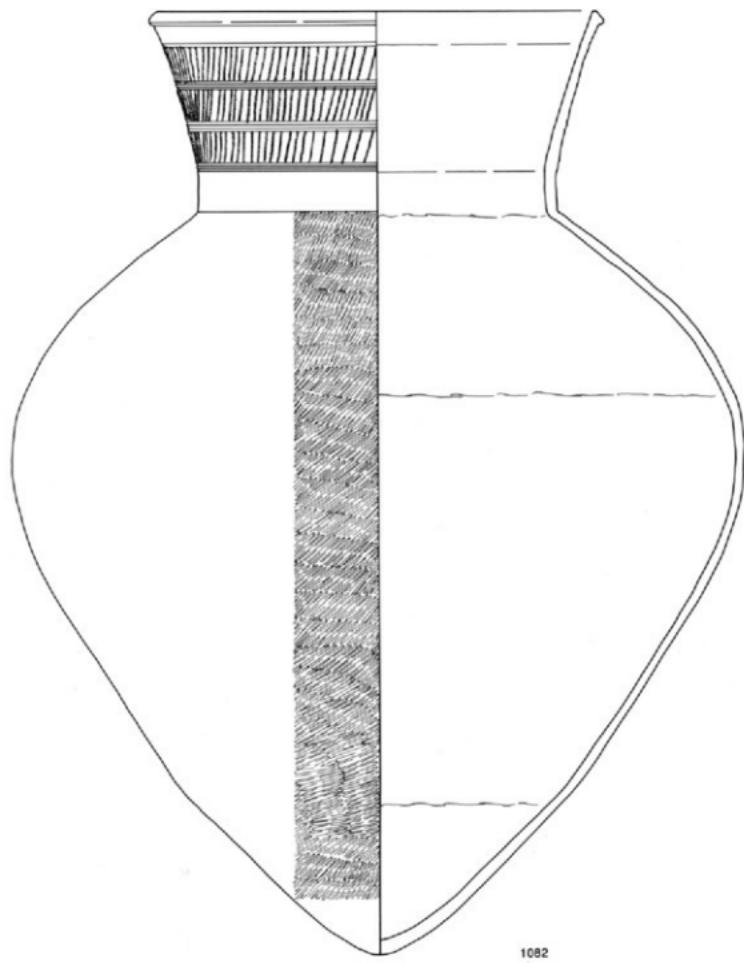


図 69 高針原 1 号窯出土遺物 19

0 20cm

1093は器種不明。口縁部としてこれを図化した。

1094も器種不明。器壁が厚く、端部付近で棱を持って屈曲するため、脚部としてこれを図化した。

1095は楕状の器形か。口縁部片で、形状は鉢Dと類似するが体部上方は張らず、小口径となる。外面に沈線文、波状文を施す。

1096は器種不明。岡崎市小針遺跡に類例がある（齊藤 1999）。器台の可能性も考えられるが、平針遺跡例では底部が被熱しており、これを鉢状の器形として扱っているためこれに従った。形状も特異で、大きく張り出した底部に、低く扁平な体部と直線的に伸びる彌部を持つ。底部は切り離し手法C類。体部と頸部にスカシ文が特徴的である。体部は直径3.0cm程度の円形を4か所、頸部には不整形のスカシ文が施されるが、形状は不明となる。

#### 灰層II群上層（図70～76—1097～1343）

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの上層の資料を報告する。

図示した器種には蓋A～D・G・H、杯A・B・G・H・J、高杯A～C、盤A～C、鉢A～D、台付長颈瓶、フラスコ形瓶A・B、平瓶A、短頸壺、横瓶A・B、ハソウ、壺A～C、陶鍤などがある。

1097～1162は蓋。1097、1099、1101、1102、1146、1147、1150は焼成不良となる。1100、1122はひずむ。

1097～1111は蓋A。1107～1111は鉢を欠く。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1105はボタン状に、1097は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。後述する細分によれば、1098、1099、1102、1104～1107、1109～1111が1類、1097、1100、1101、1103、1108が2類となる。

1112～1116は蓋B。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1115はボタン状、1112は最大径が上部にある逆円錐台形を呈する。口縁部とかえり部の位置関係は、1114はかえり部が高位置、1112、1113はほぼ同位置となる。なお、1115はかえり部が痕跡的となる。

1117は蓋C。鉢は長い。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部が高位置となる。

1118、1119は鉢を欠く。蓋BまたはC。口縁部とかえり部の位置関係は、ほぼ同位置となる。

1120、1121は蓋D。いずれも鉢を欠く。

1122、1123は蓋G。1122は蓋Aを大型にした形状。口縁部の屈曲は短い。黄土塗布が確認できる。1123は蓋BまたはCを大型にした形状。口縁部とかえり部の位置関係は、かえり部がやや突出する。

1124～1159は蓋H。1124は大振り。1127、1131、1136、1140、1142、1148は、口縁部外面に沈線文を施す。後述する細分によれば、1124、1126、1130、1131、1134、1136、1140～

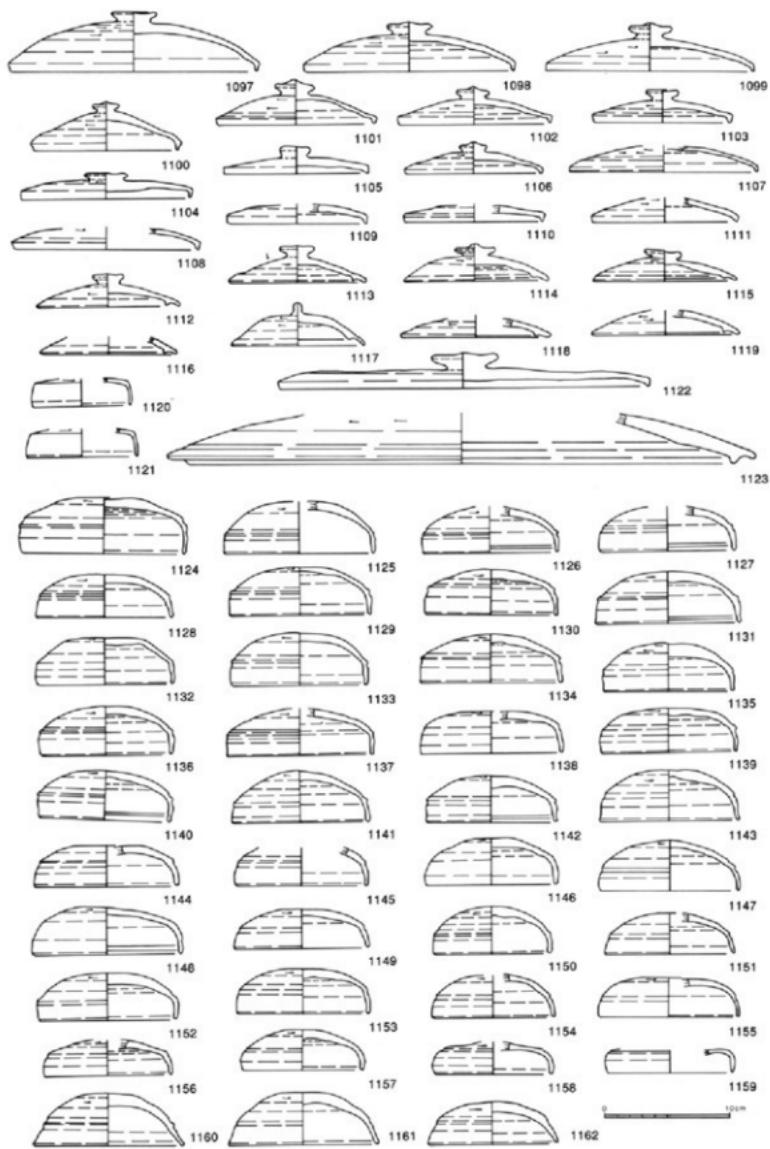


図70 高針原1号窯出土遺物20

1142が1類、1125、1127～1129、1133、1137、1145、1147、1150、1152が2類、1132、1135、1139、1144、1146、1148、1151、1153、1155～1159が3類となる。

1160～1162は蓋Hの口縁部が直立しない形状。一応蓋Hに含めるが、別器種として扱うべきかもしれない。数量は乏しい。口縁部の形態以外に、蓋Hとの差異は確認できない。天井部が残存する資料は、図示した3例にとどまるが、高杯Aの杯部とした破片資料に同一形態のそれが混在している可能性を残す。後述する蓋Hの細分をあてはめれば、1160が1類、1161、1162が3類となる。

1163～1223は杯。1183、1187、1188、1200は焼成不良となる。1178、1217はひずむ。

1163～1174は杯A。法量や形状はばらつく。1163は器高が高く、1164は大口径となる。

1175～1183は杯B。腰部は、1175が腰を持って屈曲するが、1176～1182はこれが不鮮明、1183は丸味を帯びる。図示したものは全て大型と中型。高台は断面台形。外側にやや張り出す。

1184～1187は杯G。1187は口縁直下と体部に沈線文を施す。

1188～1219は杯H。後述する細分によれば、1189、1190、1192、1196～1198、1200、1207が1類、1191、1193、1195、1199、1201～1203、1205、1206、1209、1213、1214、1217、1219が2類、1204、1208、1210、1212、1218が3類となる。

1220～1223は杯J。1222、1223はくびれ部から口縁部までが長い。

1224～1259は高杯。1241、1247、1255は焼成不良となる。

1224～1234は高杯A。1232～1234は脚部を欠く。1224～1226、1232、1233には脚部にスカシ文が確認できる。いずれも二段で二か所、上段は痕跡的となる。1224、1226、1232が組み合わせ文C類となる。

1235～1239は脚部片。一応、高杯Aに分類した。1235は器高が高い。1235～1237には脚部にスカシ文が確認できる。いずれも二段で二か所だが、1235のみ三か所で、組み合わせ文C類となる。

1240～1243は高杯B。1242、1243は脚部を欠く。杯部は浅いが、1240はやや深手となる。

1244～1247は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

1248～1259は高杯C。1250～1252は脚部を、1253～1259は杯部を欠く。杯部には、1248、1249は沈線文を、1249～1251には突帶が付く。文様は、1253の脚部に組み合わせ文C、1254にはスカシ文を施す。

1260～1263は盤。1263はひどくひずむ。

1260、1261は盤A。大振りの盤。底部を欠く。腰部にタタキ整形。1261は体部の浅い形状。器壁は厚い。口縁部は短く直立する。

1262は盤B。脚部片。脚部は、器壁が薄い。

1263は盤C。口縁部直下と腰部に二重沈線文、体部に波状文を施す。

1264～1282は鉢。1279～1281は焼成不良となる。

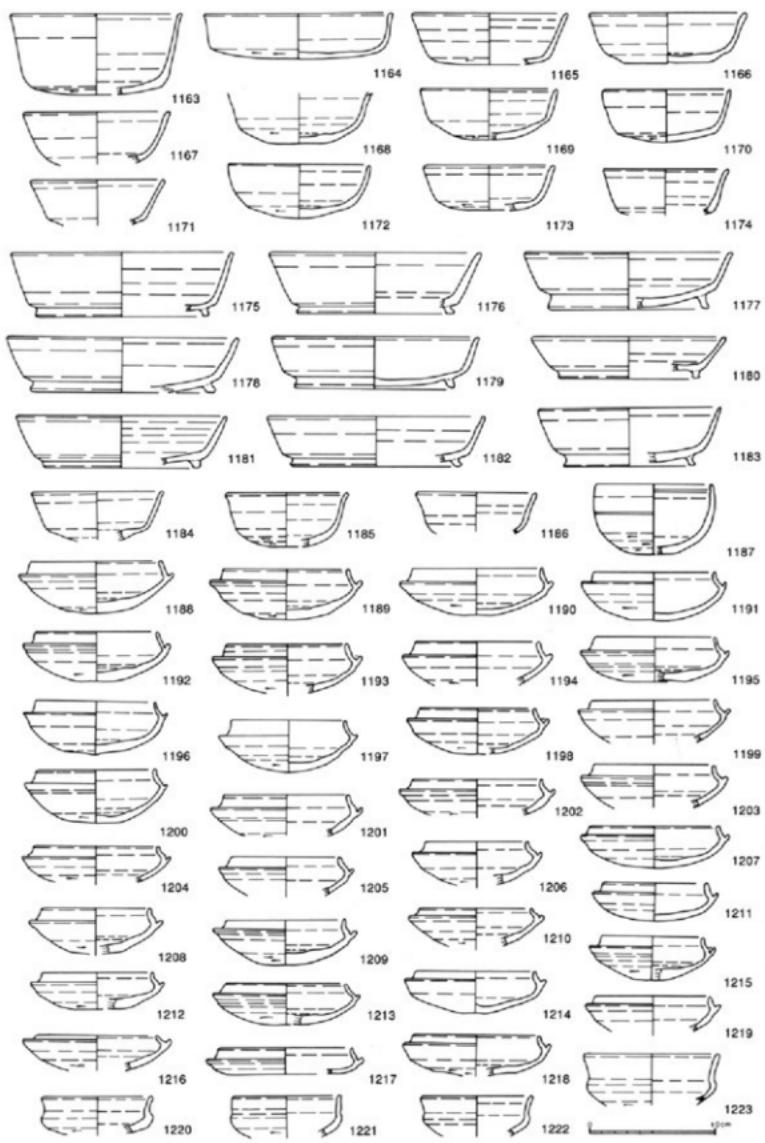


図71 高針原1号窯出土遺物21

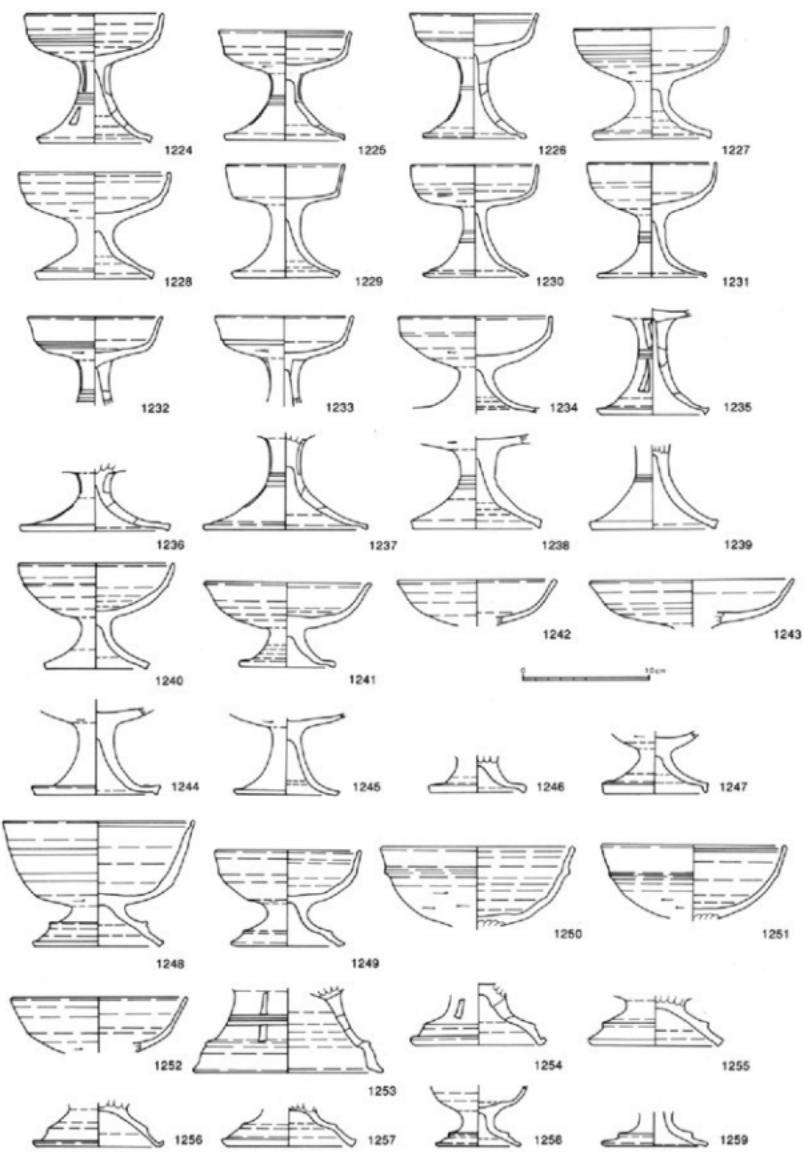


図72 高針原1号窯出土遺物22

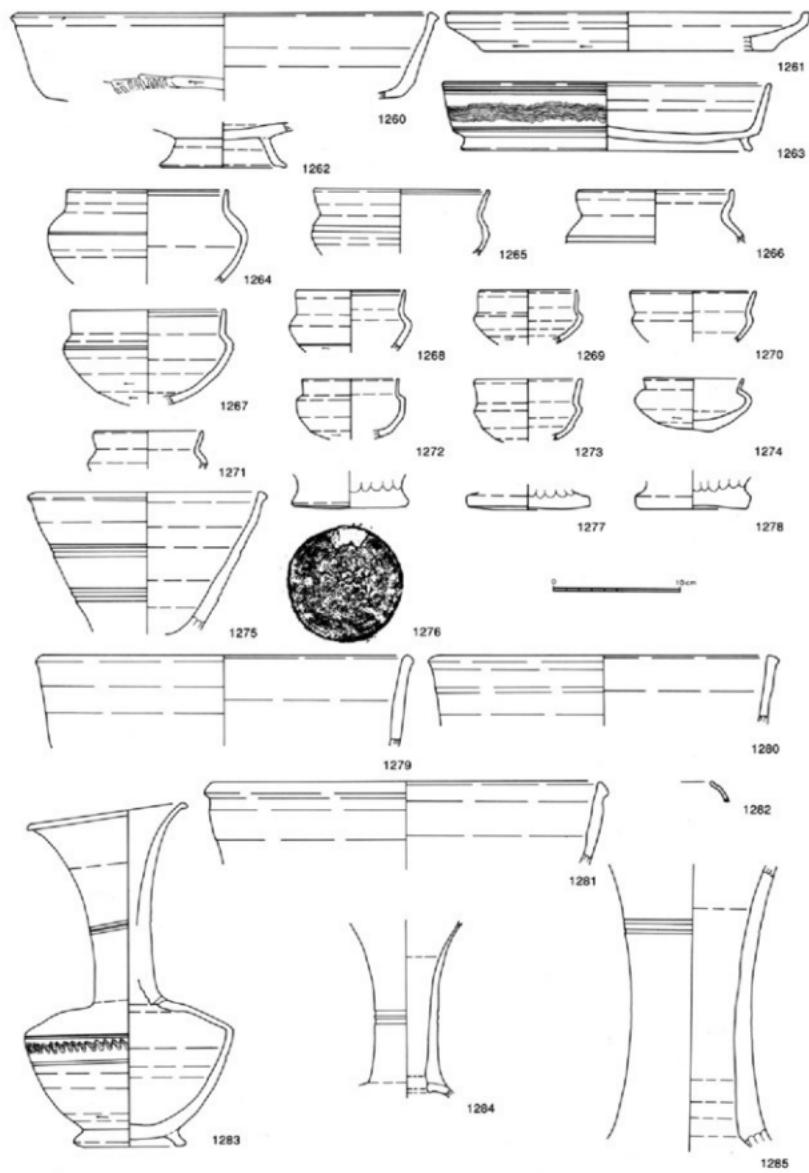


図73 高針原1号窯出土遺物23

1264～1274は鉢A。1264～1267が大型、1268～1274が小型となる。1274はやや器高が低い。いずれも体部は張るが1274はこれが強い。1264、1265、1266、1268は沈線文、1265、1267は二重沈線文を体部に施す。1264～1267の口縁部内面には沈線文を施す。後述する細分によれば、1264、1266が3類、1265が1類、1267が2類となる。

1275～1278は鉢B。1275は底部を欠く。体部には二重沈線文を積む。1276～1278は底部片。1276は外底部に竹管による刺突が雰然と確認できる。刺突は貫通しない。

1279～1281は鉢C。いずれも口縁部片。

1282は鉢D。小型。やはり口縁部片。

1283～1332は壺・瓶。1303は焼成不良となる。

1283～1285は台付頸瓶。1283は全形の判明する資料。高台を持つ形状で、体部には強い後を持つ。頸部は長く大きく開く。頸部中央に二重沈線文、体部に組み合わせ文Aを施す。1284、1285は頸部片。1285は大型。頸部には二重沈線文を施す。

1286～1297はフラスコ形瓶。1286～1292はフラスコ形瓶A、1293～1296はフラスコ形瓶B。1286は全形が判明する資料。1287～1290、1294、1296は頸部外面に二重沈線文を施す。1295は、これが沈線文となる。1297は底部片。高台が付く。

1298～1302は平瓶。いずれも平瓶A。1302は、頸部がやや長い。1301、1302には頸部外面に二重沈線文を施す。

1303～1313は短頸壺。いずれも体部下方を欠く。1303～1309、1313が大型。1307、1308は体部外面に二重沈線文、1304、1305は沈線文を施す。なお、1303は外面に黄土塗布が確認できる。1310～1312は小型。口縁部が短く、体部が強く張る形状。1312に体部に沈線文を施す。

1315～1323は横瓶。1315～1322は横瓶A、1323は横瓶B。1317はほぼ全形が判明する資料。頸部は短い。口縁部は外反し、端部調整技法C類。体部は、青海波ナデ消し技法。形状は、長径方向で観察すると、やや下方に垂下した稍円形、短径方向では球形となる。頸部から沈線文を巡らす。

1324～1332はハソウ。1324、1325は全形の判明する資料。1326～1329は口縁部片。1327には頸部に沈線文が確認できる。後述する細分によれば、1325～1327、1329が1類、1324、1328が2類となる。1330～1332は体部片となる。1324～1331は丸底でハソウA。体部は肩が張る球形だが、1331はややつぶれる。1332は有高台でハソウB。体部は肩に稜を持つ。穿孔部が強調により注口状に発達する。

1333～1342は壺。

1333～1338は壺A。頸部には組み合わせ文Bが確認できる。1334、1335、1337、1338はB 1類で、充填文は1334が波状文、1335、1337、1338は刻目文、1333と1336がB 2類でオシビキ文と刻目文を充填する。

1339、1340は壺B。いずれも口縁部片。1339は、不明瞭だが刻書が確認できる。五文字「黒見田」であるが、最初の三文字のみ「黒見田」と判読できる。

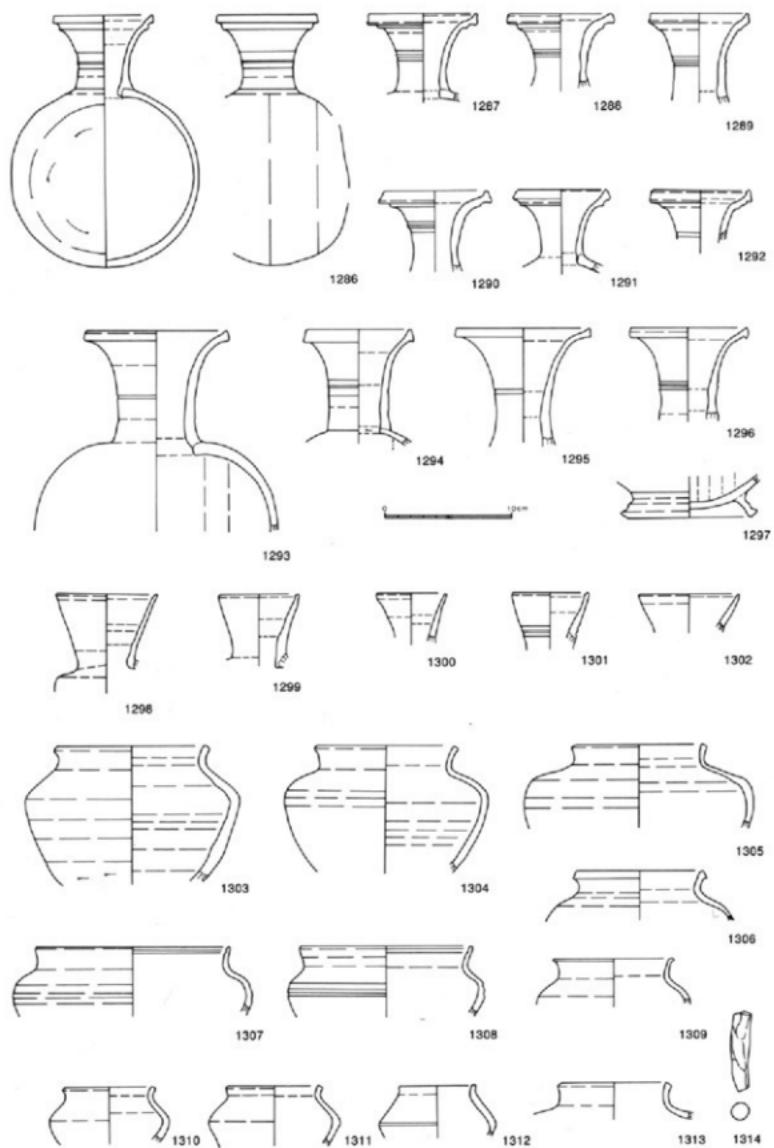


図 74 高針原 1 号窯出土遺物 24

1341、1342 は壺C。口縁部片。口縁部は端部調整技法B 3類。

1343 は陶錘。紡錘形を呈する。ナゲ調整によるが、一部に右回りの手持ちケズリ調整を加える。小口部は手持ちケズリ調整。孔部の直径は、6.0 mm、重量 35.7 g をはかる。

#### 灰層II群中層 資 料

##### 灰層II群中層（図 77—1344～1375）

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの中層の資料を報告する。

図示した器種には蓋H、杯H、高杯C、鉢A、横瓶A・B、ハソウ、壺Aがある。

1344～1348 は蓋H。後述する細分によれば、1344、1346 が1類、1345、1347、1348 が2類となる。

1349～1355 は杯H。後述する細分によれば、1349、1351 が1類、1350、1352～1355 が2類となる。

1356・1357 は高杯C。1356 は脚部を、1357 は杯部を欠く。1356 の外面には棱、1357 はスカシ文を施す。

1358～1360 は鉢A。1358 が大型、1359、1360 が小型となる。いずれも体部は張るが1359、1360 はこれが強い。いずれも体部最大径付近に沈線文を施す。1358 には口縁部内面にもこれが確認できる。後述する細分によれば、1358 は2類となる。

1361～1374 は壺・瓶。1370 はひずむ。

1361 は、プラスコ形瓶A の口縁部片。頭部に二重沈線文を施す。

1362～1364 は平瓶A。1362 は体部が一部残存。肩はやや張る。1362、1364 は頭部に沈線文を施し、1362 はこれが二重沈線文となる。

1365～1368 は横瓶。いずれも口縁部片。1365、1366、1368 は横瓶A。1367 は横瓶B。頭部の形状は1366 が直線的、1365、1367 はゆるやかに外反する。

1369～1371 はハソウ。1369、1370 は口縁部片。後述する細分によれば、いずれも1類。1371 は体部片となる。丸底でハソウA。体部は球形。

1373 は壺の体部片。短頸壺か。体部はややつぶれる球形。最大径の若干上方に沈線文を巡らす。肩部には耳部を貼付した痕跡を残す。耳部は四か所か。

1375 は壺A。焼成不良となる。口縁部片で、頭部には組み合わせ文B 2類が確認でき、刻目文を充填する。

#### 灰層II群下層 資 料

##### 灰層II群下層（図 78—1376～1407）

灰層II群資料のうち、土層観察用のセクションベルト部分のみこれをさらに三つに分割して遺物を取り上げた。ここではこのうちの下層の資料を報告する。

資料は乏しい。図示した器種には、蓋H、杯G・H・J、高杯A・C、鉢A、プラスコ形瓶A、横瓶A、ハソウA がある。

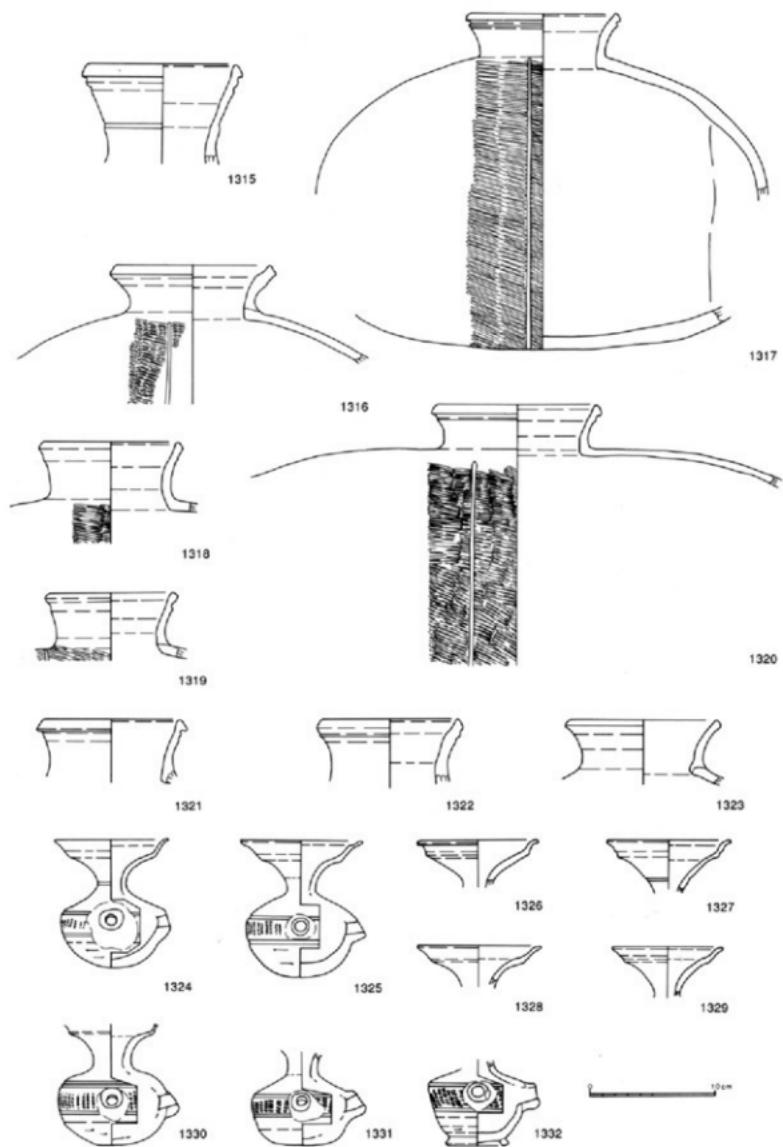


図75 高針原1号窯出土遺物25

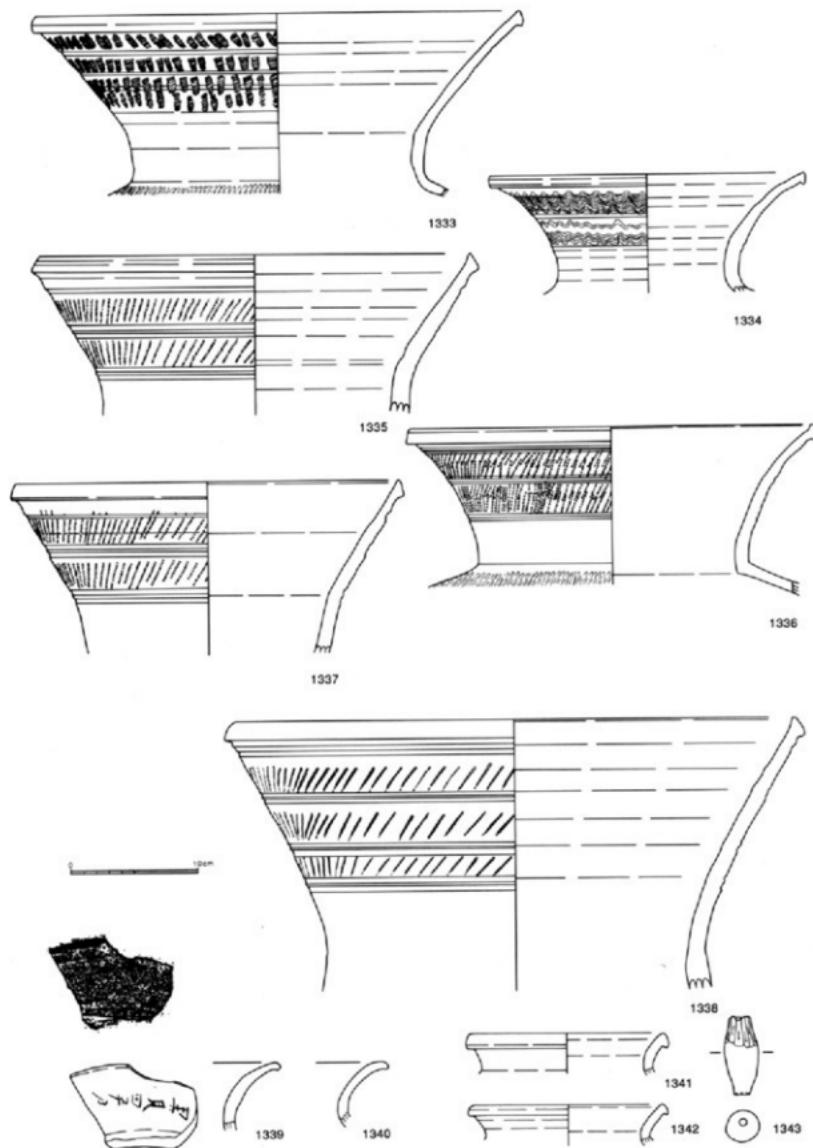


图 76 高针原 1 号窑出土遗物 26

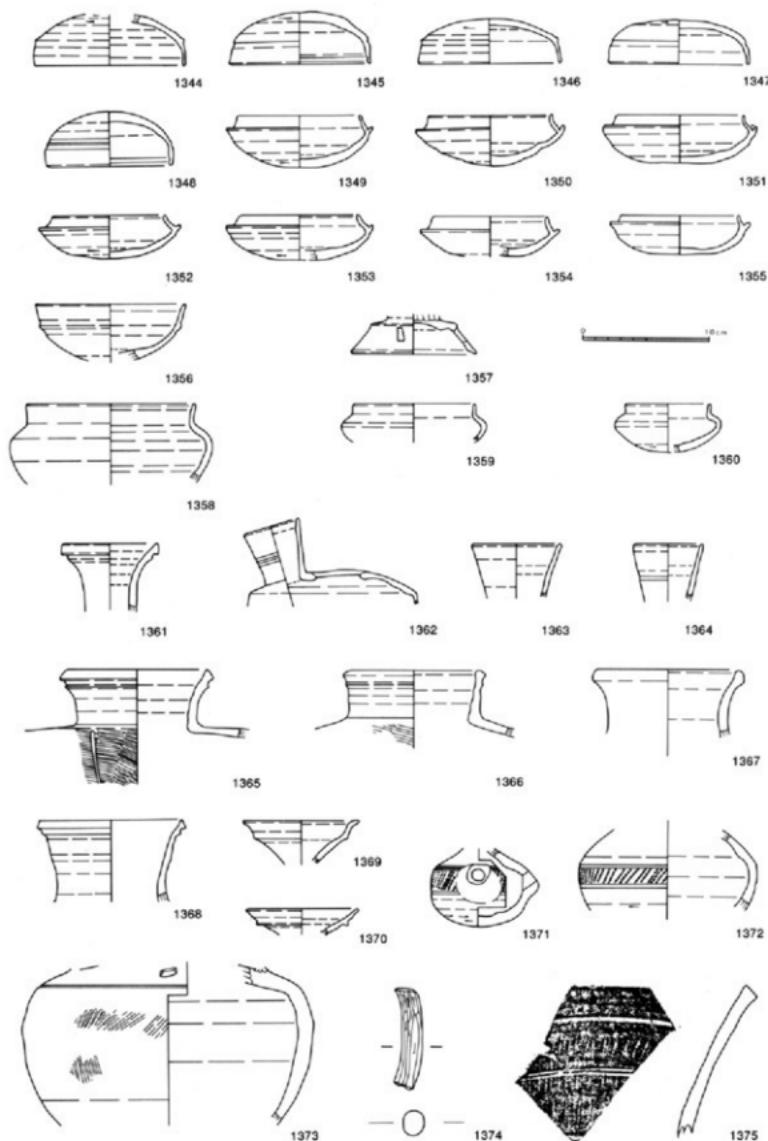


図77 高針原1号窯出土遺物27

1376～1379は、蓋H。1376は焼成不良となる。後述する細分によればいざれも1類。

1380は杯G。丸みを帯びた体部を持つ。深手で、体部外面に二重沈線文を施す。

1381～1386は杯H。後述する細分によれば1381、1386が1類、1382～1385が2類となる。

1387は杯J。口縁部が直立する形状。

1388～1393は高杯。

1388～1390は高杯A。1388、1389は脚部を欠き、1390は杯部を欠く。1388は大振り。1390には組み合わせ文C類が確認できる。スカシは二か所となる。

1391～1393は高杯C。1391は脚部を欠き、1392、1393は杯部を欠く。1391の腰部には二重沈線文、1392には組み合わせ文C類が確認できる。

1394は鉢A。小型となる。体部は丸みを帯び、口縁部は直立する。体部には肩に二重沈線文、下胴部に沈線文を施す。

1395～1406は壺・瓶。

1395～1398はフラスコ形瓶A。いざれも口縁部片で、頸部に二重沈線文を施す。

1399～1401は横瓶A。やはり口縁部片。1400は頸部がやや長い。

1402～1405はハソウ。1402、1403は口縁部片。後述する細分によれば、いざれも2類となる。1404、1405は体部片となる。丸底でハソウA。体部は球形。

1406は、瓶の口縁部片。端部で短く外反する。提瓶か。

#### 灰層III群資料

##### 灰層III群（図79～1408～1442）

資料は乏しい。図示した器種には蓋A、杯A・B・H・J、高杯B、鉢A、フラスコ形瓶B、平瓶A、横瓶、ハソウ、壺A・Bなどがある。

1408～1414は蓋。

1408～1413は蓋A。いざれも鉢を欠く。後述する細分によれば、1408～1411が1類、1412、1413が2類となる。

1414も鉢を欠く。蓋BないしCか。口縁部とかえり部の位置関係は、ははほ同位置となる。

1415～1427は杯。1426はひずむ。

1415～1417は杯A。1415、1416は底部を欠く。1417は端部調整技法Aにより特徴的に仕上げられる。体部外面には沈線文を二段施す。

1418～1422は杯B。1422は口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。腰部は、1418、1421が後を持つ。1419、1422はこれが明瞭ではない。1420は丸みを帯びる。高台は断面台形。外側に張り出す。

1423は、杯AないしB。口縁部片。口縁部直下に沈線文、体部に波状文を施す。

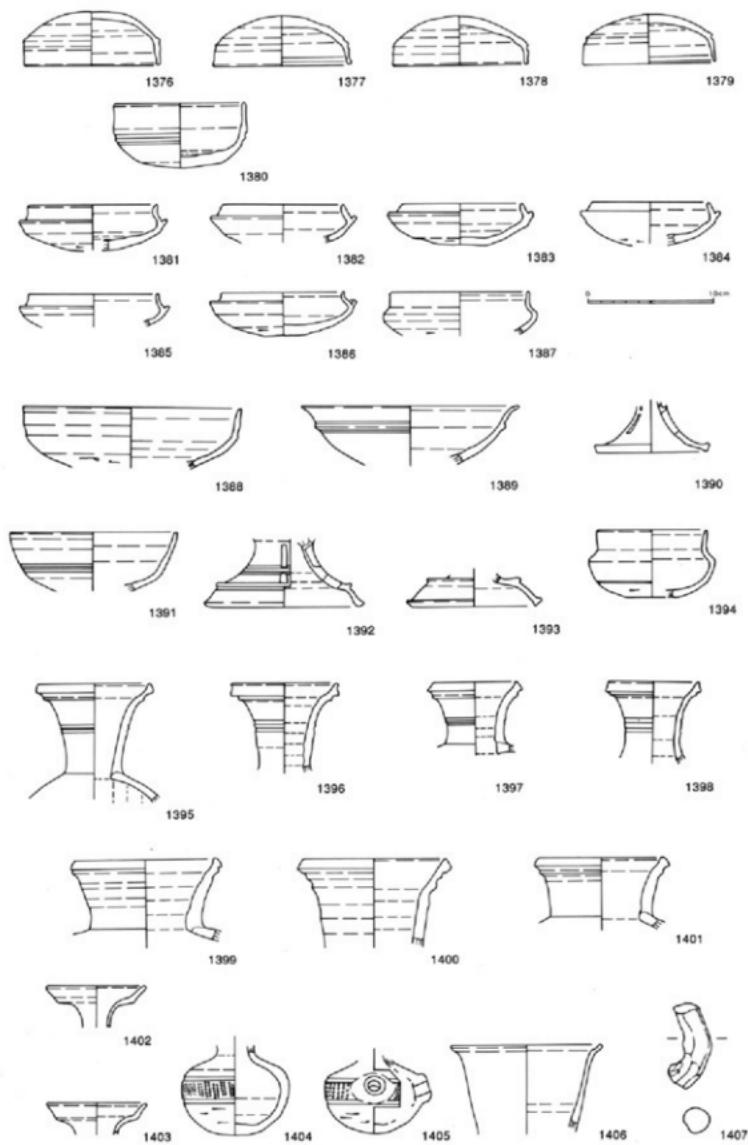


図78 高針原1号窯出土遺物28

1424～1427は杯H。いずれも小振り。後述する細分では、1424が2類、1425～1427が3類となる。

1428は高杯B。脚部を欠く。杯部は浅い。

1429～1431は脚部片。一応、高杯Bに分類した。

1432は鉢A。焼成不良となる。体部下方を欠く。肩は張り、口縁部は直立する。体部に沈線文を施す。

1433～1438は壺・瓶。

1433、1434はフラスコ形瓶B。いずれも口縁部片。

1435は平瓶A。やはり口縁部片。

1436、1437は横瓶A。1436は頸部に二重沈線文を施す。

1438はハソウ。口縁部片。後述する細分によれば1類。

1439～1442は壺。1442は焼成不良となる。

1439～1441は壺A。いずれも口縁部片、頸部外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は1439が刻目文、1440、1441は波状文。

1442は壺B。口縁部片。

#### 灰層IV群資料

#### 灰層IV群（図80－1443～1466）

資料は乏しい。図示した器種には壺A、杯B、鉢B、台付長頸瓶A・B、フラスコ形瓶A、短頸壺、横瓶A・B、壺Bなどがある。

1443、1444は壺A。いずれも鉢を欠く。後述する細分では、1類に属する。

1445～1453は杯B。1445、1447、1453は焼成不良となる。すべて口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。腰部の形状は、1446が腰を持ち、1443、1448、1452はこれが明瞭ではない。高台は断面台形。屈曲気味に、張り出す。

1454～1456は高杯脚部片。一応、高杯Bに含める。

1457は鉢B。口縁部を欠く。底部周辺はタタキ整形。外底部には刻書「黒」が確認できる。

1458～1464は壺・瓶。

1458は台付長頸瓶。頸部片。二重沈線文を二段施す。

1459はフラスコ形瓶A。口縁部片である。

1460は短頸壺。口縁部はわずかに内傾する。

1461～1463は横瓶。いずれも口縁部片で、1461、1462が横瓶A。1463が横瓶Bとなる。

1465は壺B。口縁部の小片。

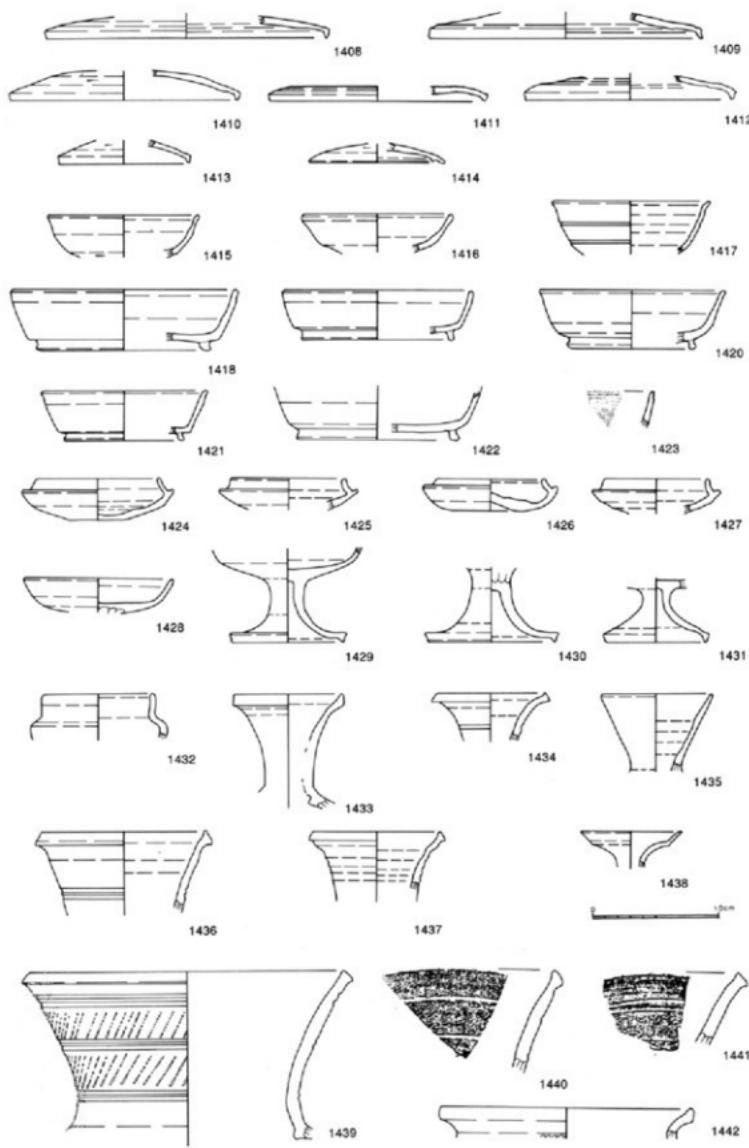


図79 高針原1号窯出土遺物29

## 間層資料 間層 (図 80—1467～1474)

資料は乏しい。図示した器種には蓋A・H、杯H、フラスコ形瓶A・B、壺Cなどがある。

1467、1468は蓋。

1467は蓋A。鉢を欠く。後述する細分によれば、1類となる。

1468は蓋H。小振り。後述する細分によれば、3類となる。

1469は杯H。扁平な形状。後述する細分によれば、3類となる。

1470は高杯の脚部片。高杯Bか。

1471～1473はフラスコ形瓶。いずれも口縁部片。1471がフラスコ形瓶A、1472、1473がフラスコ形瓶B。

1474は壺C。口縁部片。

## 表土層資料 表土層 (図 81、82—1475～1559)

図示した器種には蓋A・H、杯A・B・G・H・J、高杯A～C、盤A～C、鉢A・C・D、フラスコ形瓶A・B、短頸壺、横瓶A・B、ハソウ、壺A・C、陶管などがある。

1475～1496は蓋。1475は焼成不良となる。

1475～1482は蓋A。1480～1482は鉢を欠く。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とする。

1483、1484は蓋B。鉢は1483が低くつぶれた宝珠形、1484がボタン状となる。口縁部とかえり部の位置関係は、1484はかえり部が高位置、1483はほぼ同位置となる。

1485～1488は鉢を欠く。蓋BないしCか。口縁部とかえり部の位置関係は、1486、1487はかえり部が高位置、1485はかえり部がやや突出する。1488はかえり部が痕跡的となる。

1489～1496は蓋H。

1497～1517は杯。

1497～1499は杯A。いずれも底部を欠く。法量や形状はばらつく。1497は口縁部直化に沈線文、腰部付近にオシビキ文を施す。

1500～1510は杯B。法量により中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。内側で接地し、外側に張り出す。

1511～1513は杯G。いずれも小振り。

1514～1516は杯H。1514、1515は底部を欠く。

1517は杯J。器高がやや高い。

1518～1530は高杯。1522～1524は焼成不良となる。

1518～1526は高杯B。1518は脚部を欠く。1519～1526は高杯脚部片。一応、高杯Bに含める。

1527～1530は高杯C。1527、1528は脚部を欠き、1529、1530は杯部を欠く。1527、1528は杯部に突帶が付く。なお、1529は組み合わせ文C類が確認できる。

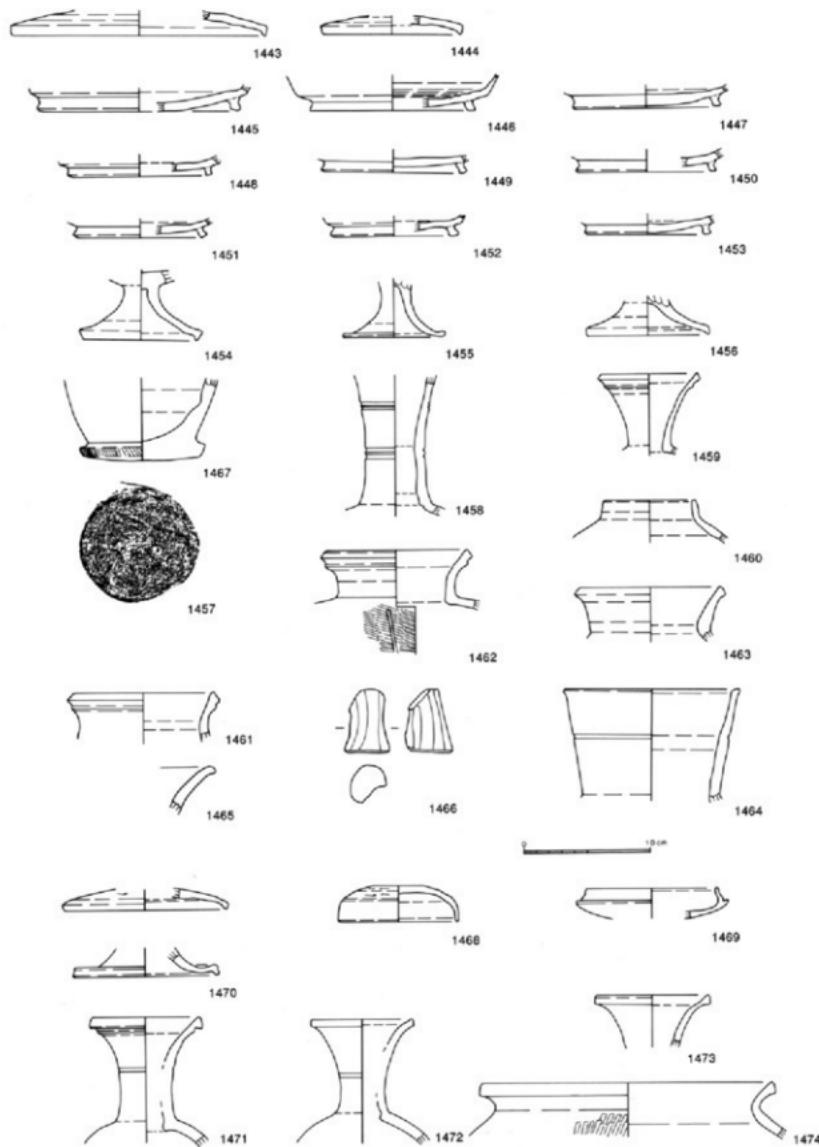


図80 高針原1号窯出土遺物30

1531～1534は盤。1533は焼成不良となる。

1531、1532は盤A。1531は器壁が薄く浅い。丸底となる。1532は、器壁が厚く平底の盤。口縁部で屈曲する。

1533は盤B。脚部片。器高はやや高い。

1534は盤C。口縁部直下と腰部に沈線文、体部に波状文を施す。

1535～1538は鉢。

1535、1536は鉢A。頸部は鈍く屈曲し、口縁部で外反する。

1537は鉢C。底部片。

1538は鉢D。口縁部付近で丸みを帯びて屈曲する。

1539～1551は壺・瓶。

1539～1542はフラスコ形瓶。いずれも口縁部片。1539、1540はフラスコ形瓶A、1541、1542はフラスコ形瓶B。1542は頸部に二重沈線文を施す。

1543～1546は短頸壺。いずれも下胴部を欠く。口縁部の形状は、1543がやや長く直立し、1544～1546は短く外反する。

1547～1550は横瓶。いずれも口縁部片。1547が横瓶A。1548～1550は横瓶B。1548は頸部が太く短い。

1551はハソウ。口縁部片。頸部に二重沈線文を施す。

1553～1555は壺。1555はひずむ。

1553は壺A。口縁部片。頸部外面に組み合わせ文B 1類を施す。充填文は波状文。

1554は壺C。口縁部片。口縁部は端部調整技法B 3類。

1555は壺の底部片。平底。底部調整技法B類による。

1556は器種不明。厚い鉢部に、薄く直立する口縁部を持つ形状として図化した。

1557は形状から観である可能性を持つ。小型の盤状の器形で、整形はラフである。上面は、周辺部がほぼ3mm程度窪み、中央部分はやや突出する。外底部には、直径2mmの穿孔が確認できるが、上面まで貫通していない。

1558は陶管。残存する前面がナデ調整。外面には黄土塗布が確認できる。

#### 攪乱層 資料

##### 攪乱層 (図83～85—1560～1698)

図示した器種には蓋A～D・H、杯A・B・H・J、高杯B・C、鉢A～D、フラスコ形瓶A・B、平瓶A、短頸壺、横瓶B、ハソウA・B、壺A・C、円面鏡、陶管などがある。

1560～1593は蓋。

1560～1574は蓋A。1572～1574は鉢を欠く。鉢は低くつぶれた宝珠形を基本とするが、1571はボタン状となる。

1575～1579は蓋B。口縁部とかえり部の位置関係は、1575、1578はかえり部が高位置、

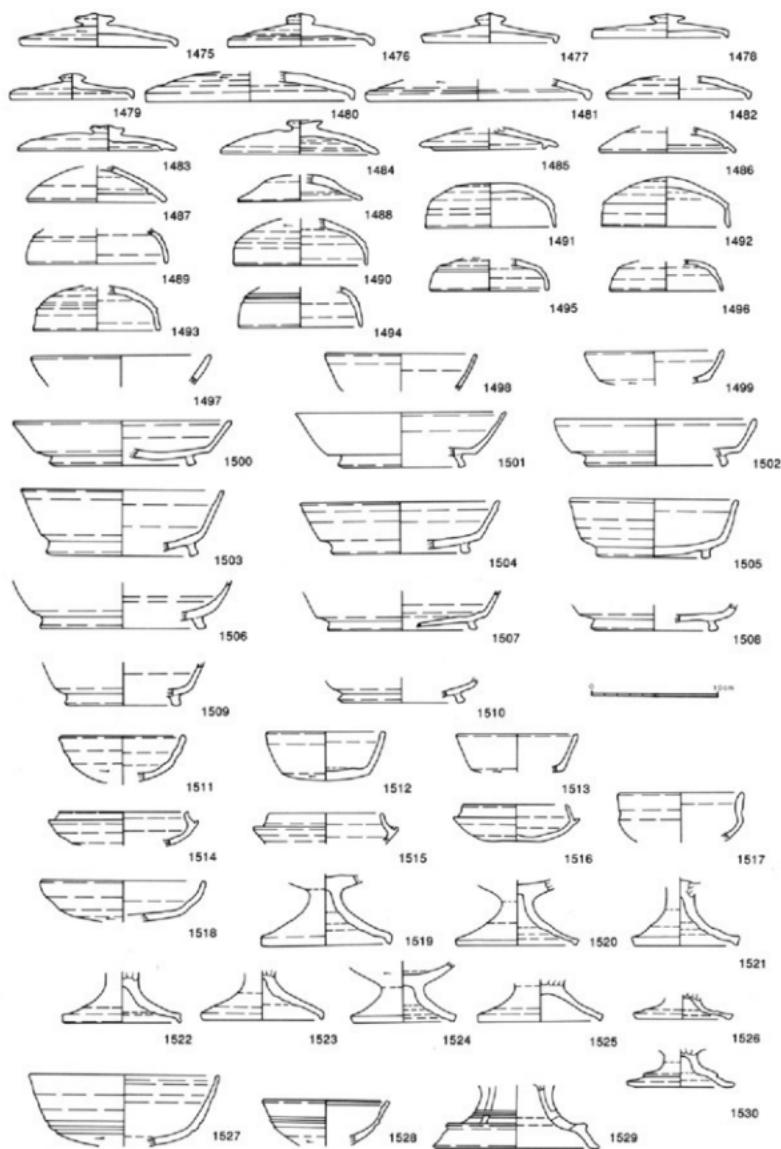


図81 高針原1号窯出土遺物31

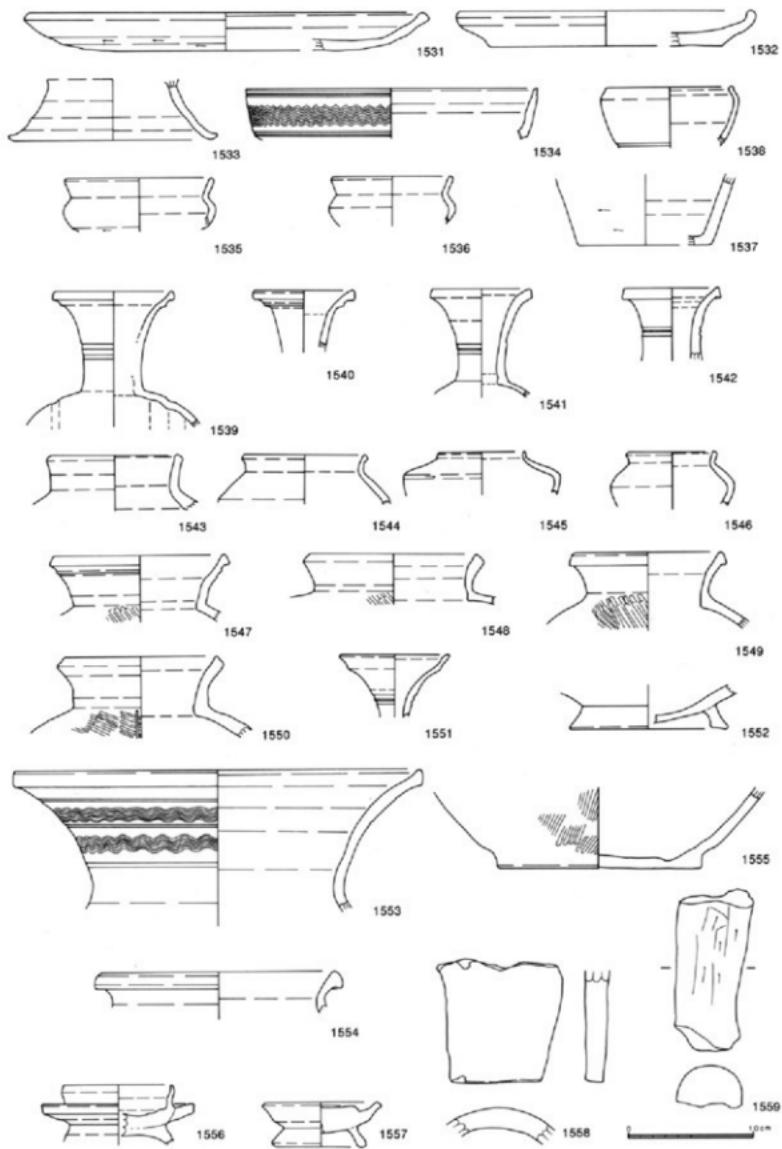


图 82 高针原 1 号窑出土遗物 32

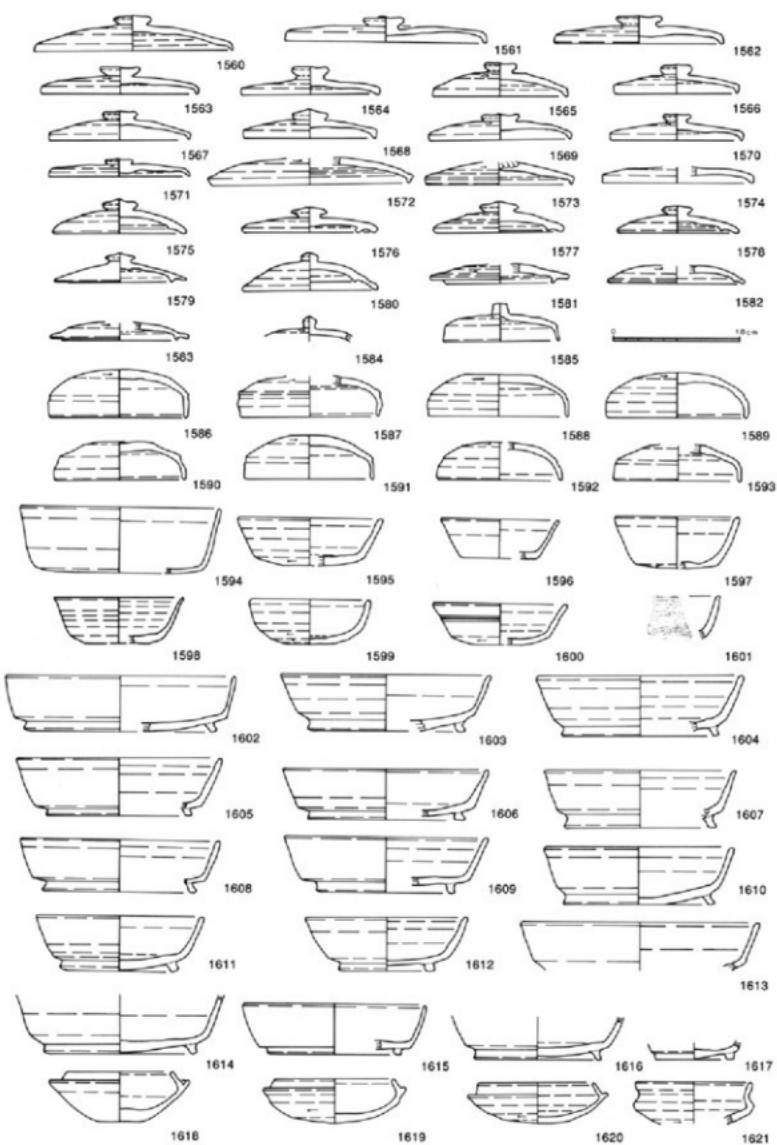


図83 高針原1号窯出土遺物33

1576、1577 はほぼ同位置、1579 はかえり部がやや突出する。

1580 は蓋C。鉢はつぶれ、かえり部が痕跡的となる

1581～1583 は鉢を欠く。蓋BないしCか。口縁部とかえり部の位置関係は、1582 はかえり部が高位置、1581、1583 はかえり部がやや突出する。

1585 は蓋D。小振りとなる。

1586～1593 は蓋H。

1594～1621 は杯。1611、1616、1618 は焼成不良となる。

1594～1601 は杯A。法量や形状はばらつく。1600 は体部中央に二重沈線文、1601 は口縁部直下に沈線文、腰部にオシビキ文を施す。

1602～1617 は杯B。1614～1617 は口縁部を欠く。法量により大型、中型、小型と区分できるが、それぞれに形態、調整などの違いは確認できない。高台は断面台形。丸みを帯び、外側に屈曲気味にやや張り出すものが多い。

1618～1620 は杯H。

1621 は杯J。底部を欠く。口縁部は外反する。

1622～1633 は高杯。1633 は焼成不良となる。

1622～1624 は高杯B。1623、1624 は脚部を欠く。1625～1628 は脚部片。一応、高杯B に分類した。

1629～1633 は高杯C。1629、1630 は脚部を欠く。1629 は杯部に稜を持つ。1630 は深い杯部を持つ。1631～1633 は脚部片。

1634～1646 は鉢。

1634～1640 は鉢A。1634～1636 が大型、1637～1640 が小型となる。いずれも体部は張るが1640 はこれが弱い。1634～1636 は体部最大径付近に二重沈線文を施す。

1641～1643 は鉢B。いずれも底部片。1643 は底部がやや薄い。

1644 は鉢C。口縁部片。

1645、1646 は鉢D。やはり口縁部片。

1647～1689 は壺・瓶。

1647～1665 はフラスコ形瓶。1647～1660 は口縁部片。1647～1656 はフラスコ形瓶A、1657～1660 はフラスコ形瓶B。1662 は底部片。高台を持つ。1663～1665 は体部片。環状刻目文を円形の沈線文で囲む。

1667～1671 は平瓶A。口縁部片。1672、1673 は平瓶の把手片。全面手持ちケズリ調整による。断面形は円形。

1674～1676 は短頸壺。いずれも体部下方を欠く。口縁部は外反する。

1679、1680 は横瓶B。いずれも口縁部片。

1681～1689 はハソウ。1681～1684 は口縁部片、1685～1689 は体部片となる。1685、1686 は丸底でハソウA。体部はやや肩が張る球形。1687～1689 は有高台でハソウB。1687 の体部は隅丸長方形。穿孔部が強調により注口状に発達する。

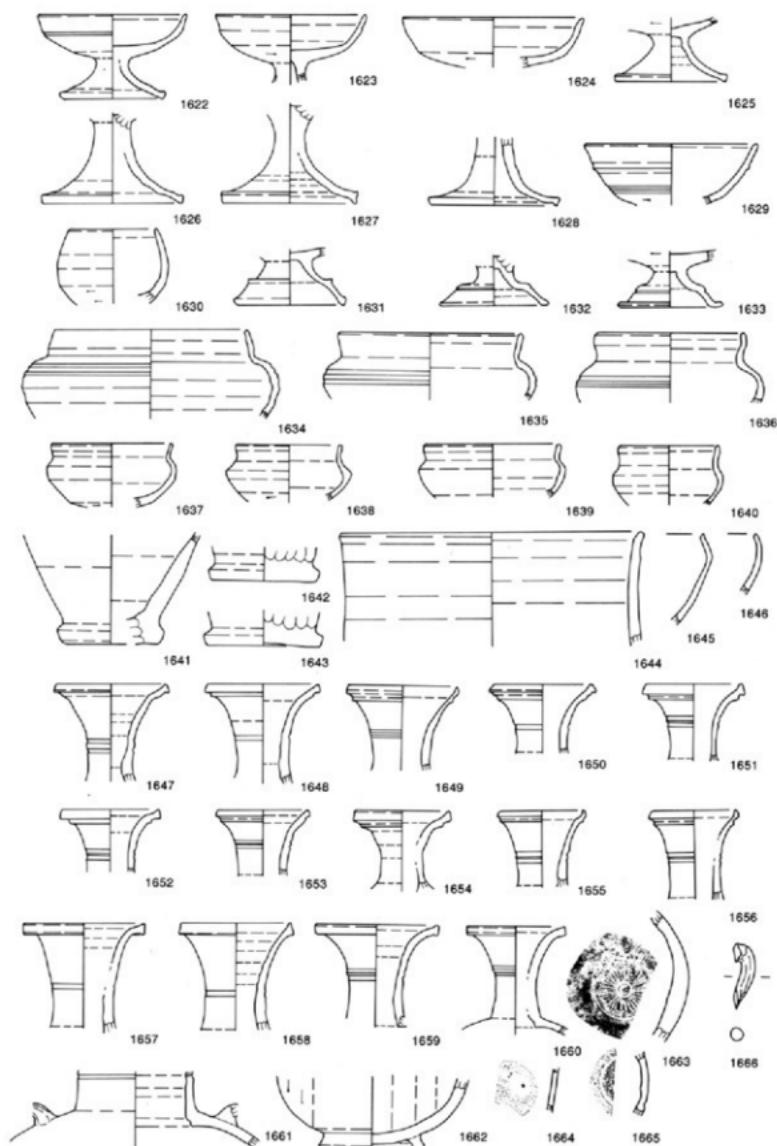


図84 高針原1号窯出土遺物34

1691～1693は壺。

1691、1692は壺A。口縁部片。いずれも頸部外面に組み合わせ文を施す。1691は、組み合わせ文B 1類。充填文は刻目文。1692は、組み合わせ文B 2類。充填文は刻目文。

1694は円面硯。上面の破片。残存する側面には、ヘラによる線刻が確認できる。

1695は陶管。残存する前面がナデ調整。外面には黄土塗布が確認できる。

**刻書土器** 1696～1698は刻書が確認できる資料を集めた。1696は壺Aの頸部片。口縁部に沿って「瓦」と焼成後に刻まれる。1697は鉢または壺の底部片。外底部にやはり「瓦」と刻書される。1698は杯の底部片。外底部に「卍」と刻書される。

## (2) 窯道具

確認できた窯道具には、支持具とその他の窯道具となる。

### ① 支持具

支持具には棒トチと焼台がある。

#### 棒トチ (図86-1699～1705)

整形時に削り取られた製品のバリを、そのまま支持具に転用したもの。一般的には細長く棒状を呈するが、一定の規格は認められない。7点図示する。

#### 焼台

今回の調査で得られた焼台には、直径10cm大の礫を使用しているもの(以下礫焼台と仮称する)、壺など大型品の破片を転用したものの(以下転用焼台と仮称する)などがある。なお、実際の使用は、これらを単独で用いるよりも、二種類以上を組み合わされることが多い。

礫焼台(図版45・46-1706～1712)は、拳大の転石を焼台として使用したもの。図版46は、その使用例となる。いずれも表面に被熱や自然釉、製品の釉着などが確認できる。石材はほぼチャートで、出土位置に傾向をうかがうことはできない。完形品が517点、破片が7799点得られた。重量は完形品が124604.3 g、破片が952101.3 gである。破片の出土数を、破片の総出土点数と、完形品の平均重量241 gから求めると、3951点となる。これに完形品数を加えると4468点となる。

転用焼台(図87-1713～1718)は、焼成不良品の破片を焼台として使用したものと呼ぶ。転用痕跡の存在のみを根拠として識別するため、実数の把握が困難となる。焼成時には、これを礫焼台、剥離壁片などと組み合わせて、焼成時の焼台としている。転用される器種、部位は、壺の体部片がほとんどを占める。また、転用に際しては、破片の大きさや

#### 焼台の数量

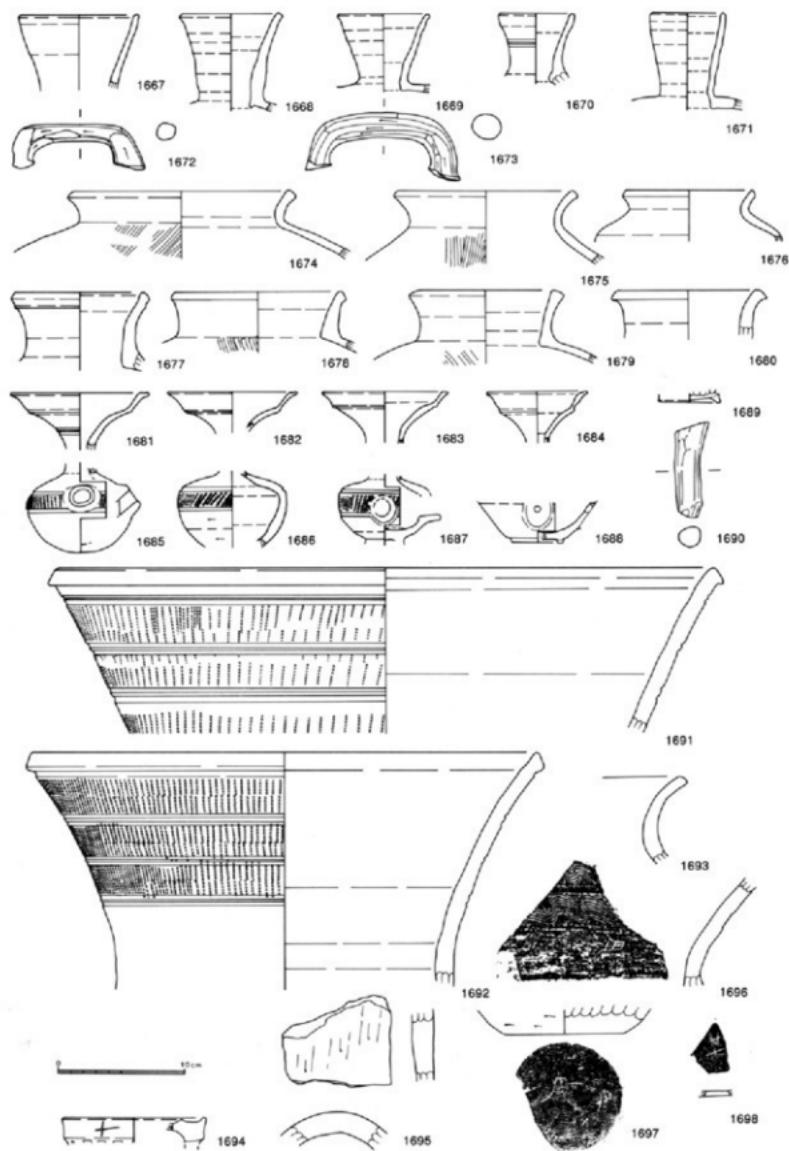


図 85 高針原 1 号窯出土遺物 35

形状などを加工したものも一部には含まれる。加工法は、周囲の全てまたは一部に研磨が確認できるもの（1713～1717）や、周囲の全てまたは一部を打ち欠いたもの（1718）などがある。なお、前者については焼台以外の用途もあわせて考える必要もあるが、確實に焼台として使用した痕跡をとどめるものも含まれることから、一応ここに含めている。

## ② その他の窯道具

### 当て具

1719、1720は、半球形の体部に扁平な鉢が付く形状。鉢には穿孔が確認できる。1721はこれらの破片か。全体的に華奢な感が否めないが、ここでは一応當て具の可能性を考え、窯道具として分類する。底部調整技法A類に関連するのか。

### 分焰棒（図版46～1722・1723）

窯体の構造物であるがここで扱う。管状のスサ入り粘土が被熱したもので、直径10.0cm程度をはかる。5点出土している。直径約4.0cmの穴部が中央にみられる。表面は自然釉や窯壁極小片が付着するのが特色となる。

## （3）土師器（図88～1724～1731）

### 土師器長胴壺

灰原II群を中心とし、若干の土師器の破片が出土した。器種はすべて壺である。完形品はなく、1～3が比較的大きく接合した他は、底部および胴部の破片が若干出土している。

1724は長胴壺である。口径19.7cm、器高は残存部が29.1cm、胴部最大径22cm。口縁は頸部より緩やかに立上り、端部はつまみ上げられ面をなす。口縁部外面は横ナデ、内面は頸部まで横ハケが施される。胴部は張りが弱く、頸部から約11cmのところで最大径をもつ。胴部外面は3段以上の継ハケを施す。内面は横方向の板ナデが痕跡をとどめるほか、継方向のナデもわずかに認められる。下部は調整が粗く、輪積み及び指押えの痕が残る。器厚は0.4～1.0cmで全体に厚めである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。外面頸部以下が熱を受けて赤味を帯びるが、焦の付着はない。

1725は壺の口縁部である。口径21.6cm。口縁は頸部より緩やかに立上り、途中で屈曲して大きく外に開く。端部は上方につまみ上げられ、丸くまとまる。口縁部は内外面とも横ナデを施すが、内面括れ部には横ハケの痕がわずかに残る。胴部は外面に細かい継ハケ、内面に横方向の板ナデを施す。胎土は粗く、白色砂粒を多く含む。

1726は長胴壺である。器高は22.8cmを残す。底径は6.8cm。胴部外面は4段以上の継ハケを施し、内面は横方向の板ナデ痕を残す。底部は平底で、体部は底部より内湾気味に立ち上がり外へ開く。外面最下部を横方向のケズリで整えており、底面端部が若干盛り上がった状態になる。器厚は0.3～0.7cmで非常に薄い。胎土は粗く、砂粒を多く含む。熱を受けて一部黒～灰茶色に変色する。

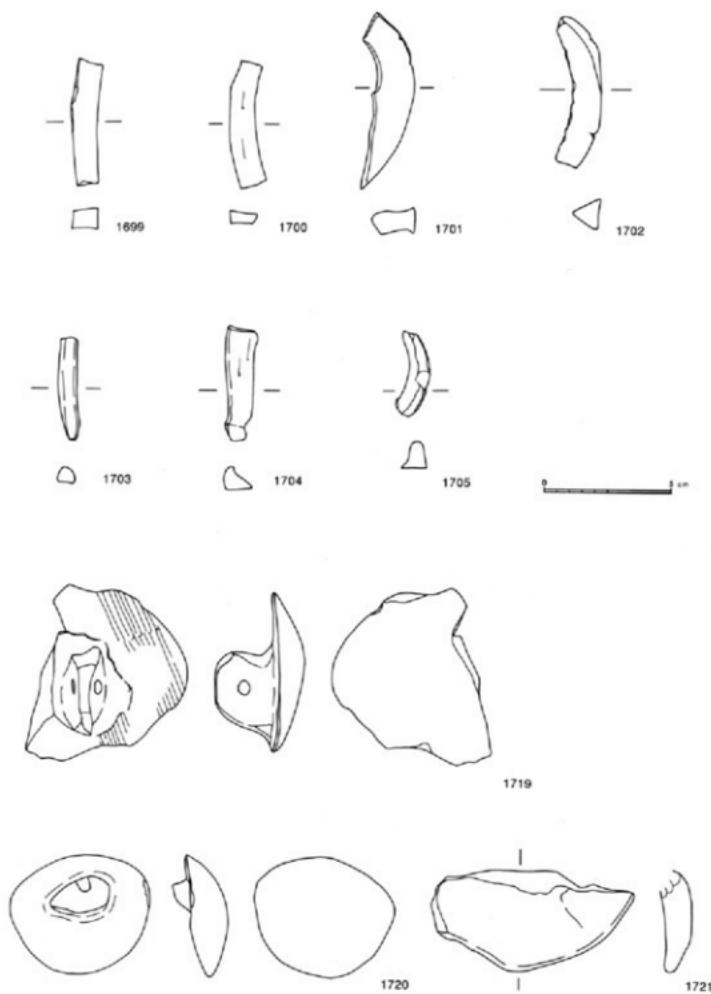


図86 高針原1号窯出土遺物36

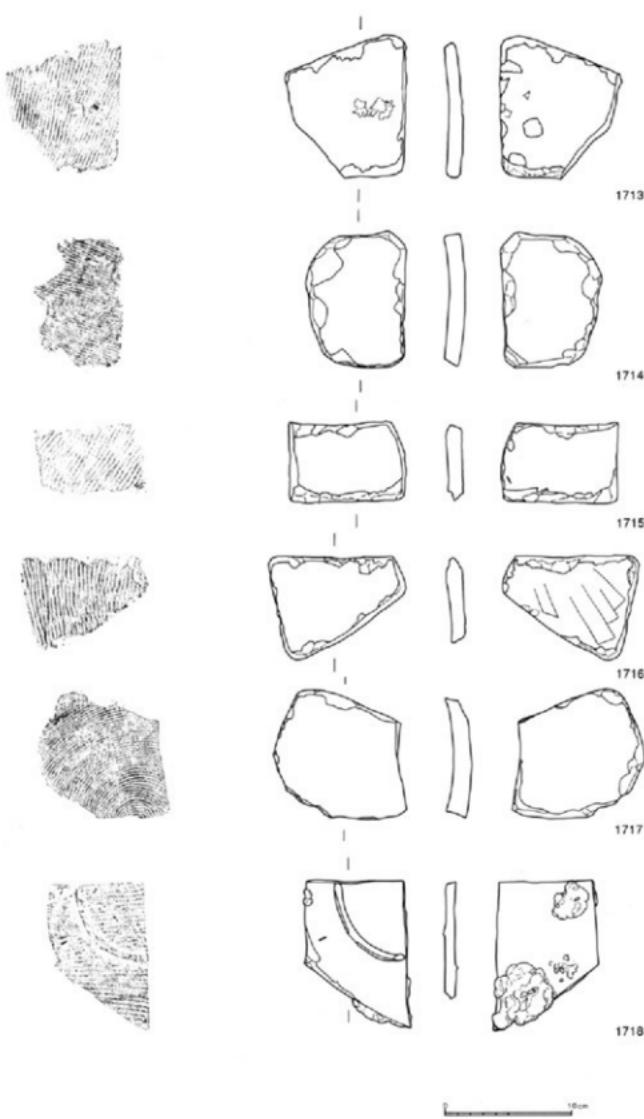


図87 高針原1号窯出土遺物37

1727～1731は壺の底部で、すべて平底である。底径は6.4～8.0cm。体部外面は立上り部分に横ナデが施され、若干括れた状態になる。1731は外面上りに工具による明瞭な横ナデを施す。底部外面は1727、1728が中央に向って若干浮き上がるが、1731は1726と同様完全な平坦面をなす。木葉等の痕跡は残りが悪く確認できない。また、底部内面はすべて平坦面を持たず、湾曲してそのまま体部へ続く。胎土は粗く、砂粒を多く含み、1728～1731には雲母の含有が目立つ。

#### (4) そのほかの遺物（図89—1732、1733）

本調査区では、高針原1号窯より年代が下がり、これと直接の関連が考えられない遺物も出土している。1732、1733は灰釉陶器の椀。いずれも表土層などから出土し、SY01周辺に点在するが、出土位置からの特色はみつけることはできない。器壁は薄く、内底部にはわずかに使用痕が確認できる。いずれも黒鉢90号窯式に属する。

### 3 小結

#### (1) 遺構について

今回検出できた窯体は、全長8m程度が残存するに過ぎない。ほぼ同時期の窯体が全長

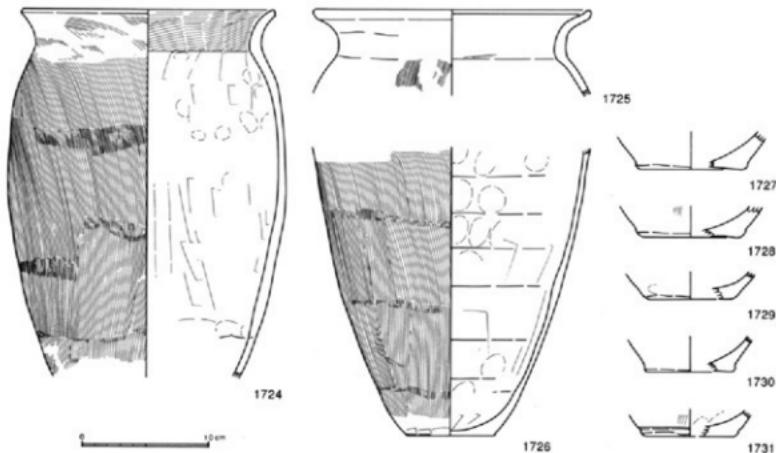


図88 高針原1号窯出土遺物38

12~13mであることから比較すると、50%が残存するに過ぎないこととなる。一方、窯体前面の構造は比較的よく残存し、灰出しビットと、そこから伸びる排水溝が特徴的であった。

本窯は、別記のように操業が比較的長期間に及んでいることが考えられる。このため、各所で機能を維持させるための、改修なし整地作業が確認できた。このうち最も著しいのが、窯体の改修である。窯体の改修は、スサ入り粘土を壁面にそのまま貼付する形で成されるため、これを重ねる度に焼成室の容積が減少し、一回の操業での生産量が減少する結果を生む。本窯ではこの問題を克服するために、G面で大規模な改修を施している。この改修は、窯体の床面を掘削し、焼成室の空間を確保したものであった。このため、この作業には大量の廃土を伴ったと予想される。そして、この時点の廃土が、灰層Ⅰ群と灰層Ⅱ群との間層であった可能性が考えられる。一方、この作業以前にも、灰原の整地は確認できる。SD02の掘削である。こうした灰原の整地は度々実施されたものと考えられる。灰層Ⅲ群や灰層Ⅳ群は、こうした整地による二次的な灰層であったのかもしれない。

## (2) 遺物について

### ① 出土遺物の計測

今回得られた資料は、飛鳥時代に含まれられる内容を持っている。資料数は安定しており、

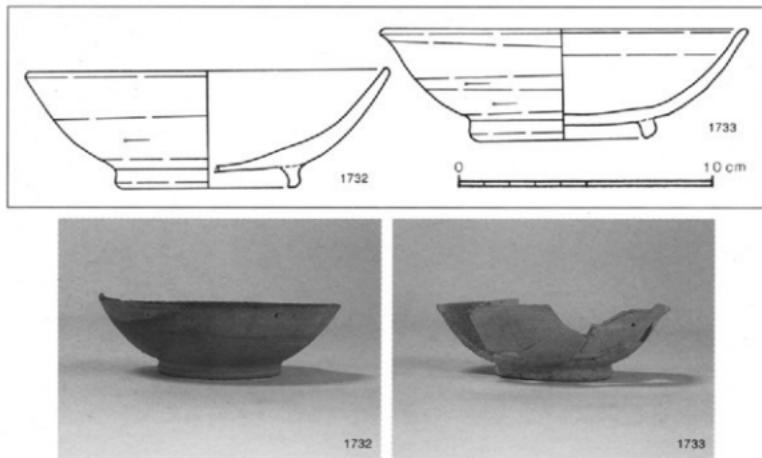


図 89 高針原 1 号窯出土遺物 39

操業段階の焼成比率を反映しているものと考えられる。しかし、出土量の関係から、全ての遺物を個体識別することは困難である。こうしたことから、出土遺物を計測するにあたり、Ⅲ章で使用した口縁部計測による集計作業を実施した。

表5は、集計結果を器種別にまとめたもので、図91でこれをグラフ化している。

まず、全体的な傾向として、生産量が20%を超える器種が存在しないことに注目したい。主力器種として考えられる杯類も、極端な突出は見せない。器種数も多く、生産の方向性が、多器種少量生産であったことが考えられる。

次に器種別に特色を眺める。

まず、蓋類は、蓋Aが突出することに注意したい。数値は17%を越える。しかし、これとセットとなるはずの杯Bが、6%に留まっている。一方、杯Hとセットとなる蓋Hは、これと類似した数値を示している。このことから考えると、蓋Aは杯Bにのみに限定された器種ではないことが明らかである。また、蓋Bも同様に、これとセットとなるとされる杯Gの、ほぼ倍数程度も存在している。ここでは杯Gの認定が不明確であることも考慮しなせねばならないが、蓋Aと杯B、杯Gと蓋Bというセット関係が、あまり厳格なものではなかったことが考えられる。

杯類は、杯Hが10%を越え、主力器種としての位置を占めている。杯AとBの比率は6%程度で、ほぼ拮抗する。杯Gは2%程度である。

梳類は乏しい。1%にも満たない。



図90 高針原1号窯SY01左壁改修状況

## 構成比の変化

鉢類は、鉢Aが2%を越える。しかし、全体的には生産量の少ない一群である。

盤類も全体的に生産量が少ない。やはり、生産量の少ない一群。

壺・瓶では、全体的に焼成量が多い傾向を示す。中でもフラスコ形瓶は10%を越える。主力器種と呼称しても良いであろう。また、平瓶も4%を越える数値を示し、生産量の比較的多い器種となっている。

高杯類は、A～Cがほぼ2%に近い数値でまとまっている。高杯Aが若干優勢で、高杯Bが劣勢である。高杯Dは、伝統的な器種ではあるが、高針原1号窯ではすでに例外的な存在となっている。壺はA～Cで、4%を切る。壺Aの比率がやや高く、壺AとCを比較すると1:2程度となる。

次に、量的に安定している灰層Ⅱ群、灰層Ⅰ群、SY01の資料についてのみ、個々にその構成比を眺めたい。

まず、灰層Ⅱ群の資料は、総遺物量の35.8%を占める。器種も多い。これのみで100%として、資料の構成比をみると、杯H、蓋Hのセットが10%前後で、優位を占める。これに他の杯類が、杯Aが5.3%、杯Bが3.2%、杯Gが2.6%と、それぞれ一定量を占めてこれに加わる。また、壺・瓶類も比較的安定する。特にフラスコ形瓶が優位で、フラスコ形瓶Aが5.15%、フラスコ形瓶Bが3.7%となる。これに続く、平瓶が5.6%、ハソウは、4.2%を占めている。

次の灰層Ⅰ群の資料は、総遺物量の3.6%を占める。灰層Ⅱ群と比較すると資料的には安定していない。これのみで100%として、資料の構成比をみると、蓋類を除けば、杯類が優位を占める。杯類の主体は、杯Bと杯Gとなる。両者では20%を占める。一方、灰層Ⅱ群では圧倒的に優位であった杯Hが、全体の2.4%を占めるにすぎず、極端に減少している。壺・瓶類では、短頸壺が9%、横瓶Bが4.2%、フラスコ形瓶Bが、6.7%と比較的安定した数量を占めている。

最後のSY01の資料は、総遺物量の8.8%を占める。これのみで100%として、資料の構成比をみると、杯Bが28.8%となっていることに注目したい。なお、杯Hは1.7%を数えるが、補修部の貼り土から出土した資料がほとんどで、基本的には存在してはいない。

以上、比較的安定している資料について、資料の構成を比較した。これをまとめると、まず、灰層Ⅱ群資料は、新たに登場して奈良時代にまで継続する器種と、古墳時代以来の伝統的な器種が共存する内容を持つ。このため器種数が多い。一方、SY01では、器種がほぼ前者に集約された内容を持っている。また、灰層Ⅰ群は、両者の中間的な構成と考えられる。なお、三者を比較すると、高針原1号窯資料内での、古墳時代的な要素が消滅していく課程を表現できるものと考えられる。

## ② 遺物からみた操業期間

次に、出土遺物から窯体の操業期間を考える。

表5 高針原1号窯器種構成表1

出土位置	種類	器種	口縁部個体数	比率	位置別比率	出土位置	種類	器種	口縁部個体数	比率	位置別比率
SD01	須恵器	蓋A	5.08333333	1.34%	43.88%	SD01	須恵器	横瓶	0.58333333	0.15%	4.24%
		杯A	2.83333333	0.75%	24.46%			ハソウ不明	0.5	0.13%	3.64%
		杯B	0.5	0.13%	4.32%			蓋A	0.25	0.07%	1.82%
		高杯B	0.416666667	0.11%	3.60%			蓋B	0.25	0.07%	1.82%
		蓋A	0.25	0.07%	2.16%			蓋C	0.166666667	0.04%	1.21%
		フラスコ形瓶不明	0.25	0.07%	2.16%			計	13.75	3.62%	100.00%
		平底A	1.416666667	0.37%	12.23%			計	25.8333333	6.80%	19.00%
		平底不明	0	0.00%	0.00%			蓋A	7.58333333	2.00%	5.58%
		短脚壺	0.58333333	0.15%	5.04%			蓋C	1.58333333	0.42%	1.16%
		横瓶	0.25	0.07%	2.16%			蓋D	0.25	0.07%	1.82%
		ハソウB	0	0.00%	0.00%			蓋E	0.08333333	0.02%	0.06%
		計	11.58333333	3.05%	100.00%			蓋F	0.33333333	0.09%	0.25%
SD02	須恵器	蓋A	0.416666667	0.11%	17.86%			蓋G	0.166666667	0.04%	1.12%
		杯A	0.166666667	0.04%	7.14%			蓋H	9.916666667	2.61%	7.29%
		杯B	0.25	0.07%	10.71%			蓋不明	3.33333333	0.86%	2.45%
		杯J	0.166666667	0.04%	7.14%			蓋A	7.25	1.91%	5.33%
		高杯B	0.5	0.13%	21.43%			蓋B	4.416666667	1.16%	3.25%
		フラスコ形瓶B	0.333333333	0.09%	14.29%			蓋G	3.5	0.92%	2.57%
		短脚壺	0.116666667	0.04%	7.14%			蓋H	17.33333333	4.56%	12.75%
		横瓶	0.333333333	0.09%	14.29%			蓋J	0.166666667	0.04%	1.12%
		ハソウ不明	0	0.00%	0.00%			蓋不明	0	0.00%	0.00%
		計	2.333333333	0.61%	100.00%			高杯A	3.75	0.99%	2.78%
SK01	須恵器	蓋H	0.25	0.07%	6.00%			高杯B	1	0.26%	0.74%
		蓋A	0.166666667	0.04%	4.00%			高杯C	3.333333333	0.88%	2.45%
		計	0.416666667	0.11%	100.00%			高杯D	0.5	0.13%	3.77%
		蓋H	0.583333333	0.15%	1.74%			高杯E	0	0.00%	0.00%
SY01	須恵器	蓋A	5.08333333	2.26%	25.56%			蓋A	0.416666667	0.11%	0.31%
		蓋H	0.583333333	0.15%	1.74%			蓋B	0.333333333	0.09%	0.25%
		杯A	5.75	1.51%	17.12%			蓋C	0.25	0.07%	0.18%
		杯B	9.866666667	2.54%	28.78%			蓋D	2.666666667	0.70%	1.96%
		杯H	0.583333333	0.15%	1.74%			蓋B	0.75	0.20%	0.55%
		杯H	0.333333333	0.09%	0.99%			蓋C	0.666666667	0.18%	0.49%
		杯A	1.333333333	0.36%	3.07%			蓋D	0	0.00%	0.00%
		杯B	0.816666667	0.24%	2.73%			付長頸瓶	1	0.26%	0.74%
		高杯B	0.416666667	0.11%	1.24%			フラスコ形瓶A	7	1.84%	5.15%
		高杯C	0.25	0.07%	0.74%			フラスコ形瓶B	5	1.32%	3.68%
灰出レピット	須恵器	蓋A	0.416666667	0.11%	100.00%			フラスコ形瓶不明	0	0.00%	0.00%
		蓋H	0.583333333	0.15%	1.74%			平底A	6.75	7.78%	4.96%
		杯A	5.75	1.51%	17.12%			平底B	0.833333333	0.22%	0.61%
		杯B	9.866666667	2.54%	28.78%			平底不明	0.166666667	0.04%	0.12%
		杯H	0.583333333	0.15%	1.74%			短脚壺	3.416666667	0.90%	2.51%
		短脚壺	0.116666667	0.04%	0.50%			横瓶A	3	0.79%	2.21%
		蓋A	1.166666667	0.31%	3.47%			横瓶B	1.833333333	0.48%	1.35%
		蓋B	0	0.00%	0.00%			横瓶不明	1.166666667	0.31%	0.86%
		計	33.58333333	8.64%	100.00%			ハソウA	0	0.00%	0.00%
		蓋A	3.416666667	0.90%	33.88%			ハソウB	0	0.00%	0.00%
灰層Ⅱ群上層	須恵器	蓋A	0.583333333	0.15%	5.79%			ハソウ不明	5.75	1.51%	4.23%
		蓋H	0.333333333	0.09%	3.31%			蓋A	1.25	0.33%	0.92%
		杯A	1.166666667	0.31%	11.57%			蓋B	0.25	0.07%	0.18%
		杯B	2.416666667	0.64%	23.97%			蓋C	2.416666667	0.64%	1.78%
		杯H	0.75	0.20%	7.44%			脚鍍	0	0.00%	0.00%
		杯A	0	0.00%	0.00%			脚鍍不明	0.75	0.20%	0.55%
		高杯B	0	0.00%	0.00%			計	136	35.81%	100.00%
		蓋A	0.166666667	0.04%	1.65%			付長頸瓶	8.063333333	2.13%	9.34%
		高杯C	0.75	0.20%	7.44%			フランクA	3.916666667	1.03%	4.53%
		杯D	0	0.00%	0.00%			フランクB	0.083333333	0.02%	0.10%
沈層Ⅰ群	須恵器	蓋A	4.566666667	1.23%	33.94%			フランクC	12.58333333	3.31%	14.55%
		蓋B	1.063333333	0.29%	7.88%			フランクD	0.916666667	0.24%	1.06%
		蓋C	0	0.00%	0.00%			蓋FA	3.916666667	1.03%	4.53%
		蓋H	0.25	0.07%	1.82%			蓋FB	1.25	0.33%	1.45%
		杯A	0.25	0.07%	1.82%			蓋FC	2	0.53%	2.31%
		杯B	0.166666667	0.04%	1.21%			蓋A	0.5	0.13%	0.58%
		杯H	1.333333333	0.35%	9.70%			蓋B	0	0.00%	0.00%
		杯G	1.416666667	0.37%	10.30%			蓋C	0.5	0.13%	0.58%
		杯H	0.333333333	0.09%	2.42%			蓋B	0	0.00%	0.00%
		杯J	0.333333333	0.09%	2.42%			蓋C	0.5	0.13%	0.58%
		高杯B	0	0.00%	0.00%			蓋B	2.25	0.59%	2.80%
		高杯C	0	0.00%	0.00%			蓋C	0.25	0.07%	0.29%
		フランクA	0.916666667	0.24%	6.67%			蓋D	0.166666667	0.04%	0.19%
		フランクB	0	0.00%	0.00%			付長頸瓶	0.416666667	0.11%	0.48%
		フランクC	1.25	0.33%	9.09%			フランクA	0.166666667	0.04%	0.13%

表 6 高針原 1 号窯器種構成表 2

出土位置	種類	器種	口縁部個体数	比率	位置別比率
灰層Ⅱ群上層	須恵器	フラスク形瓶B	2,666666667	0.70%	3.08%
		フラスク形瓶不明	0	0.00%	0.00%
		平底A	3,333333333	0.86%	3.65%
		短脚壺	2,916666667	0.71%	3.37%
		横底A	4	1.05%	4.62%
		横底B	0.25	0.07%	0.29%
		ハソウA	1,833333333	0.46%	2.12%
		ハソウB	0	0.00%	0.00%
		壺A	2.25	0.59%	2.60%
		壺B	0,666666667	0.18%	0.77%
		壺C	0,333333333	0.09%	0.39%
		陶錐	0	0.00%	0.00%
		器種不明	0	0.00%	0.00%
		計	86.5	22.77%	100.00%
灰層Ⅱ群中層	須恵器	壺H	1,083333333	0.29%	12.87%
		杯G	3,083333333	0.81%	38.63%
		高杯C	0,166666667	0.04%	1.98%
		鉢A	0,833333333	0.22%	9.90%
		フラスク形瓶A	0,416666667	0.11%	4.95%
		平底A	1,166666667	0.31%	13.86%
		短脚壺	0	0.00%	0.00%
		横底A	1	0.26%	11.88%
		横底B	0.25	0.07%	2.97%
		ハソウA	0	0.00%	0.00%
		ハソウ不明	0,333333333	0.09%	3.96%
		壺A	0,803333333	0.02%	0.99%
		壺C	0	0.00%	0.00%
		計	8,416666667	2.22%	100.00%
灰層Ⅱ群下層	須恵器	壺H	1.5	0.39%	16.22%
		杯G	0,083333333	0.02%	0.90%
		杯H	2	0.53%	21.82%
		高杯A	1.25	0.33%	13.51%
		高杯B	0	0.00%	0.00%
		高杯C	0,333333333	0.09%	3.60%
		鉢A	0.25	0.07%	2.70%
		フラスク形瓶A	1,916666667	0.50%	20.72%
		横底A	0,916666667	0.24%	9.91%
		ハソウA	0	0.00%	0.00%
灰層Ⅲ群	須恵器	ハソウ不明	0,583333333	0.15%	6.31%
		壺B	0.25	0.07%	2.70%
		器種不明	0	0.00%	0.00%
		計	9.25	2.44%	100.00%
		壺A	1,333333333	0.35%	17.76%
		壺C	0,333333333	0.09%	4.44%
		杯A	0.5	0.13%	6.67%
		杯B	0,666666667	0.16%	8.89%
		杯H	1,416666667	0.37%	18.89%
		杯不明	0,083333333	0.02%	1.11%
灰層Ⅳ群	須恵器	窓井B	0,083333333	0.02%	1.11%
		鉢A	0,166666667	0.04%	2.22%
		フラスク形瓶B	1,166666667	0.31%	15.56%
		平底A	0,166666667	0.04%	2.22%
		横底A	0,333333333	0.09%	4.44%
		ハソウ不明	0,583333333	0.15%	7.78%
		壺A	0.5	0.13%	6.67%
		壺B	0,166666667	0.04%	2.22%
		計	7.5	1.97%	100.00%
		壺A	0,333333333	0.09%	16.67%
灰層Ⅴ群	須恵器	窓井B	0	0.00%	0.00%
		鉢B	0	0.00%	0.00%
		台付茶碗	0	0.00%	0.00%
		フラスク形瓶A	0,416666667	0.11%	20.83%
		平底不明	0,166666667	0.04%	8.33%
		短脚壺	0,166666667	0.04%	8.33%
		横底A	0,666666667	0.18%	33.33%
		横底B	0.25	0.07%	12.50%
		壺B	0	0.00%	0.00%
		器種不明	0	0.00%	0.00%
同層	須恵器	計	2	0.53%	100.00%
		壺A	0.25	0.07%	9.38%
		壺H	0.25	0.07%	9.38%
		杯H	0,166666667	0.04%	6.25%
		窓井不明	0	0.00%	0.00%
		フラスク形瓶A	1	0.26%	37.50%
		フラスク形瓶B	0,833333333	0.22%	31.25%
		計	38.4166667	10.11%	100.00%
		出土位置不明	須恵器	壺不明	0 0.00% 0.00%
				壺A	0.5 0.13% 100.00%
		計		0.5	0.13% 100.00%
		合計		379.8333333	100.00%

前述のように、今回検出できた窯体は壁面が15面にも及んでいる。このため、窯体には長期間の操業が予想できる。しかし、一方では壁面の数だけを根拠として、操業期間の問題を考えることはできないという指摘(尾野 1997)もあり、ここではさらに別方向からの検証も加えねばならない。

今回注目したいのは、窯詰め時の支持具として窯内で使用される窯道具の数量である。前述のように、本窯で確認している窯道具の支持具には、礫焼台、転用焼台、棒トチなどがある。このうち、本窯での主力となっているのは前二者である。なお、棒トチについては、出土数は乏しい。高針原1号窯では、図示したものがほぼ全てで、例外的な使用にすぎず、今回の分析の対象とはしない。

本窯では、礫焼台を、総数約4500点得ている。この数値は、完形で出土した礫焼台の統計に、破片で出土したそれの総重量を、完形品の平均重量で割って求めた数値を加えたものである。一方、転用焼台は実数を把握できていない。しかし、壺の体部片を観察すると、かなりの高確率で転用焼台として使用した痕跡が観察できる。なお、本窯では、壺体部の破片は26548点出土している。また、転用焼台は壺の体部片に限定できるものではない。これは、礫焼台とともにかなり膨大な数値と考えられる。

こうした状況は、感覚的ではあるが、本窯に多数の操業があったことを考える有力な事実となっている。しかし、一回の窯詰めに、どの程度の焼台が必要であったのかを示す確実なデータは、現状では報告されてはいない。

ところで、岐阜県各務原市に所在する天狗谷7号窯例(渡辺 1988)は、こうした問題を解決するヒントとなる情報が提示されている。図92に報告書から窯体図を転載した。天狗谷7号窯は、須恵器窯で、焼成中に天井部が崩落して放棄された窯体と報告されている。この崩壊は、焼成の最終段階で生じたものと予想されており、流通可能な製品は、窯体から取り出されている。しかし、部分的ではあるが、床面上には焼成時の原位置を留める杯類が残存していた。窯詰め状態であるので、基底部には焼台が使用されている。測量図によれば、これは20cm弱の間隔で、4列を確認できる。焼台列は、礫焼台と転用焼台で構成されるが、測量図からは使用状況に法則性はうかがうことができない。また、重ね焼き柱の全てに焼台が使用されているわけでもない。こうした状況から、天狗谷7号窯での焼台の使用法を考えると、傾斜する床面に水平を得ることの他に、製品を並べることにより生じた余剰空間を埋める役割も持っていたことが考えられる。従ってこれらの焼台は、規格化された使用法が存在しなかったことが考えられる。

#### 焼台數試算

以下に、天狗谷7号窯の状況をもとに、高針原1号窯の焼成一回あたりの使用焼台数を試算する。算出には、個体数識別が容易な、礫焼台のみを使用する。なお、天狗谷7号窯の床面上の焼台では、礫焼台と転用焼台との用途差は確認できなかった。このことを理由として、全焼台中に礫焼台が占める割合を、天狗谷7号窯と高針原1号窯が同一であったと仮定する。次に、少し乱暴な数値だが、天狗谷7号窯の窯詰め状態の残存部分を $2\text{ m}^3$ と数える。図中には約40点の礫焼台が存在しているから、 $1\text{ m}^3$ につき20点の使用となる。1

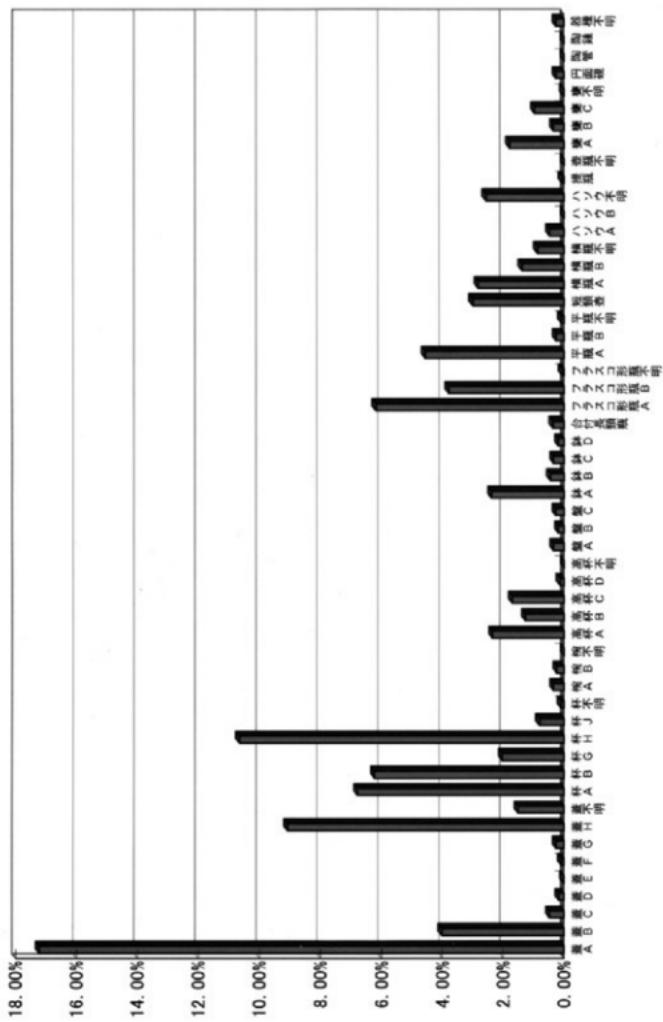


図91 高針原1号窯器種構成

回焼成分の窯焼台数は、ここでは器種による窯焼台の使用頻度の差がないものと仮定して、単純に床面積から算出した。

なお、窯体の床面積であるが、高針原1号窯は窯体の上部が消滅しているため計測ができない。このため、ほぼ同時期で、高針原1号窯と規模や構造が類似している、小牧市高藏寺3号窯（愛知県教委 1983）の床面積を測量図から計測し、この数値を援用することにする。算出できた床面積は、 $18.59 \text{ m}^2$ 。このうち舟底ピット上面が $6.93 \text{ m}^2$ 、舟底ピット上面を除く焼成室が $11.66 \text{ m}^2$ となる。製品が、焼成時にどの部分まで設置されるかが不明確だが、ここでは、仮に舟底ピット上面を除く焼成室の全面に、製品を窯詰めしたものとして計算する。その結果、高針原1号窯では、最低19回分の窯詰めが可能な窯焼台の出土が確認できた。

操業回数

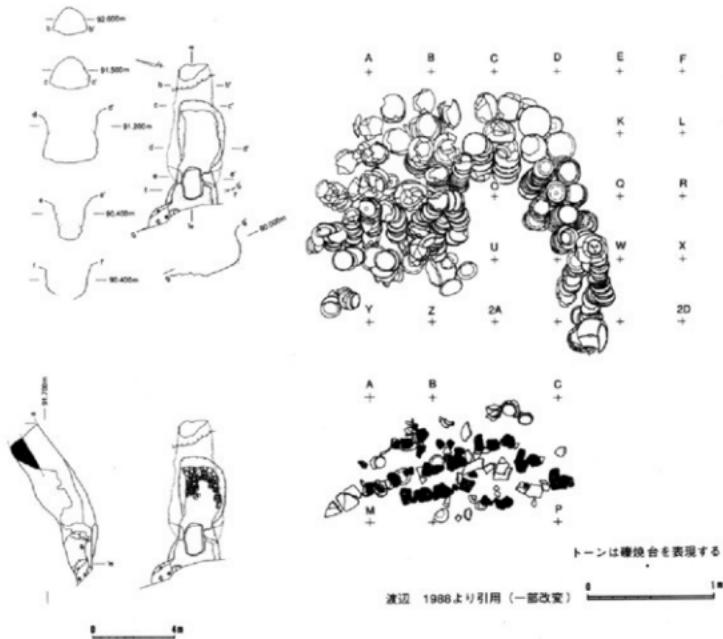


図92 各務原市天狗谷7号窯

しかし、この数値は若干の補正が必要である。まず、高針原1号窯では、灰原が一部削平を受けて完存していない。このため、調査では操業時に使用された窯焼台の全てを得ているわけではない。次に、高針原1号窯と高藏寺3号窯の焚き口幅を比較した場合、後者の方がやや広い。窯体の全長と、焚き口の幅とがどのように関連するのかが不明確だが、高藏寺3号窯の窯体を、高針原1号窯よりやや大きく考える必要もある。また、試算した値は、窯焼台を全て使い捨てとして算出している。しかし、これは実際には繰り返して使用しているため、本来ならば数値に使用回数を乗じたものでなくてはならない。

以上の点を考えると、窯体の操業回数は、少なくとも19回の数倍を考えなければならぬだろう。こうした点は、第VI章で触れるように、高針原1号窯の操業期間が広く考えられることとよく整合している。

### (3) 刻書土器

「黒見田」 最後に、刻書土器について考える。ここでは、「黒見田」と刻書された壺Bと「黒」と刻書された鉢Bに注目する。前者の資料が灰層II群の上層から、後者が灰層IV群から出土しており、両者には時間的な前後関係が認められる。資料は、各1点ずつ存在するのみであるが、ここでは、後者が前者の省略形である可能性も考えることができる。

次に字体であるが、前者は細く浅い線で刻まれている。「黒見田」とまでは判読できるが、それに続く二文字は不明となる。一方、後者は太くはっきりとした刻書であるが、文字の下方にくずしが著しい。このため、やはり判読は難解となる。なお、両者は「黒」の右上がり、やや鋭角気味となることが類似している。

ところで、「黒見田」は今回が初見ではない。現状では、名古屋市内各地から3例の報告がある。生産遺跡が1例、集落遺跡資料が2例である。いずれも、今回の資料とはほぼ同時期に該当するものである。

生産遺跡の例は、天白区天白町に所在するNN105号窯（戸笠1号窯）例である。高針原1号窯と近接し、第I章に報告した周辺遺跡にも含まれている。器種は鉢B。刻書は外底部で、外側から中央に向かい、「黒見田」の三文字が刻まれている。

集落遺跡資料は、まず守山区小幡遺跡資料（山田他 1998）がある。器種は壺B。刻書は頸部に認められ、口縁部に沿って「黒見田」の三文字と、統いて判読できない二文字がある。この資料は、E-2区という調査区の、SKS075と命名された土坑から、同時代の資料とともに出土している。

次に、中区正木町遺跡資料（竹内 1986）がある。器種は台付長颈瓶。刻書は外底部で、直径からややはざれた位置に「黒見田」の三文字が刻まれている。この資料は、P12地点と命名された調査区からの出土である。この調査区は、ほぼ中央部に自然の落ち込みが確

認でき、これを貝層が埋めていたと報告されている。『黒見田』を刻書する台付長颈瓶は、同時代の資料とともに、ここから出土している。なお、この遺跡では、『瓦』の刻書例も存在する（竹内 1988）。器種は杯A。刻書は外底部に認められる。この資料は、第2次調査に包含層中からの出土している。

## 「 瓦 」

また、『黒見田』と同一概念と考えられている『黒見太』と刻書される資料が、奈良県石神遺跡に知られている。この資料は、猿投廬産と判断されているもので、盤の底部片である。刻書は外底部で、ここでは文字が太くはっきりとした文字で刻まれる。『黒見田』が全て判読の困難な刻書であることは対極的である。

## 「 黒見太 」

『黒見田』または『黒見太』の意味する概念は不明である。現状では、地名もしくは人名が想定されている。しかも、これら出土地点が、前者が名古屋台地の拠点的な集落、あるいは、それに準ずるような地点であり、後者はこの時期の国家中枢部に近接した遺跡とされている。また、『瓦』も、やはり意味不明となる。しかし、出土遺跡が『黒見田』を持つ正木町遺跡であることを過大評価すると、これらと同様の性格を持つ可能性も考えられる。

つまり、これらの解明が7世紀末前後の窯業生産体制や、製品の律令的な取扱いシステムの成立過程を解明することに、有益な情報となることが予想できる。今後の資料増加を待ちたい。

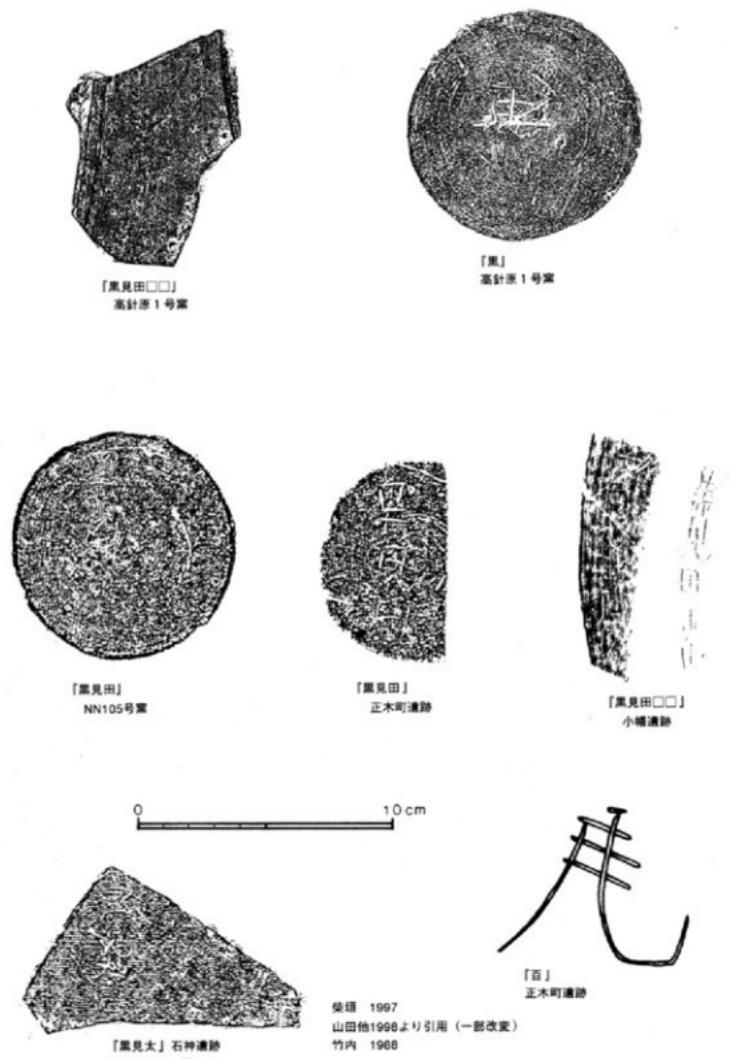


図 93 刻書土器集成